
とある狐の魔法先生

TARO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある狐の魔法先生

【Nコード】

N9872R

【作者名】

TARO

【あらすじ】

とある狐が幻想郷から飛び出して行く先は……魔法世界！？

なるべく原作に沿って進めていく予定です。それにちよくちよくオリジナルを入れていく感じです。注）転生ものではありませんがオリ主です。オリ主はチート能力持ちで最強です。そういったものが苦手な人は閲覧をお控え下さい。

主人公設定

名前：八雲 白 ヤクモ ハク

種族：神獣（空狐）

能力：力を操る程度の能力

あらゆる術を操る程度の能力

二つ名：妖獣の王（幻想郷）

幻想を統べる者（外の世界）

八雲一家の一人。^{ファミリー}紫とは千年程の付き合い（もはや家族とっていいほど）。

紫と出合った当初、彼女は白のことを式にしようと追いかけていた。当然白は抵抗し、力づくでも式にすると言う紫と戦闘になるが、結果は引き分け。

その後、逃げる白、追う紫という構図が出来上がり度々戦闘になるが、結局決着は付かず。

ある時幻想郷の話聞き、紫といると面白そうという理由で行動を共にするようになる（式にはなっておらず、代わりに九尾の狐（後の藍）を紫の式にするよう力を貸した）。

幻想郷の創造にも手を貸し、博麗大結界の創設にも力を貸している。幻想郷を愛しており、郷の安全管理に紫とともに尽力するが、最近

大きな事件が無いため暇を持て余している。

容姿

白い肌に銀の長髪。鮮血のような赤い瞳。

銀色の尻尾を九本持つ。狐耳もちろん有る。

尻尾や耳は隠すことも可能で、邪魔になるときや人間の振りをするときには隠している。

尻尾を隠すことで妖力や神力を隠すことができる。尻尾は一本ずつ出したり隠したりすることが可能。尻尾の本数に比例して力も強くなる。

因みに狐の姿になることも可能（そのときは体長50cm、尾長40cmほどの銀色の狐となる）。

空狐について

空狐とは三千年以上生きてきた狐になるとされている、通力自在の大神狐のことです。

妖狐の位において天狐に次いで二番目に当たりますが、妖力においては天狐を大きく上回りあらゆる術を使いこなすとされています。

その姿はもはや狐の姿をしておらず人の姿をしており耳、尻尾は無いとされています。

しかしこの小説では普段は人の姿をしているが耳や尻尾は隠しているだけとされています。
その為人間達には上述のような姿で伝えられているが実際には尻尾は九本で耳もある、という設定になっております。

以上です。

勝手に空狐の設定捏造してんじゃねえよ。など、この設定を見て不快に思われる方は閲覧をお控え下さい。

第一話 狐、旅立つ（前書き）

皆さん初めまして。初投稿です。

オ리지最強ものですが、それでもいいと言っ方は是非読んでやって下さい。

それでは、どうぞ。

第一話 狐、旅立つ

幻想郷。

そこはとある東の国の山の中にある辺境の地。

強力な結界によって外部と隔離された、閉ざされた世界。

そして、人ならざるもの達の楽園。

そう、幻想郷には妖怪などの人外のものと、僅かな人間たちが住んでいる。

強力な結界によってその外部と隔離されており、外部からは幻想郷の存在を確認することはできず、幻想郷内に入ることもできない。

同様に幻想郷内部からも外部の様子を確認することはできず、幻想郷から外へ出ることはできない。

そのため、幻想郷では外の世界とは異なる独自の文明が妖怪たちによって築き上げられている。

因みに、幻想郷は元から結界で隔離されていた訳ではなく、単に「東の国にある人里離れた辺境の地」がそう呼ばれていただけであった。

幻想郷には妖怪が多く住み着き、ここに迷い込んだら最後、妖怪に喰われてしまうとして恐れられていたため、普通の人間は幻想郷には近づかなかった。

しかし、中には妖怪退治の為に幻想郷へ住み着く人間もいた。

そして月日が流れ、人間たちは文明を発展させその数を増やして
く。
人間の勢力が増して幻想郷の社会のバランスが崩れることを憂いた
妖怪の賢者 八雲紫やくもむかりと妖獣の王 八雲白はくによって結界を張り、なん
とかバランスを保ち現在に至っている。

そして、現在・・・

「ああ・・・暇だ・・・」

コロコロ・・・

「暇だなあー」

ゴロゴロゴロゴロ……

「ひーまーだーん」

「白様、五月蠅いです。そして鬱陶しいです」

「……なんか最近俺に冷たくない？藍」

「気のせいです」

ここは幻想郷のどこかにあると言われている八雲紫の住む屋敷。
そして俺は八雲白。この屋敷の主である紫とは、まあ、家族のよ
うなものだ。

「そんなことよりもそこを退いて下さい。掃除ができません」

で、先ほどから俺に辛辣な言葉を浴びせているのは紫の式である八
雲藍。^{らん}

現在この屋敷を掃除中の彼女にはどうやら畳の上をゴロゴロと転が
っている俺は邪魔なようだ。

箒を使って床を掃いていく藍。
彼女が歩く度に、彼女のお尻のあたりから生えているものが左右に揺れる。

九本のふさふさとした尻尾。

そう、彼女は妖怪 九尾の狐である。

「ねえ、藍」

その揺れる尻尾を見て俺はどうしても思ってしまう。

「何ですか？」

「その尻尾、邪魔じゃない？」

と、

「確かに邪魔ですが、仕方ありません。私は白様のように尾を隠すことができませんから」

やはり邪魔だったようだ。

しかしそんなことを感じさせないほどに洗濯に掃除、炊事などなんでもやってるからな。

主はあんなでも式はまじめになるんだな。

いや、主があんなだからか？

と、そこでその藍の主の姿を最近見ていないことに気がついた。

「そついえば紫は？最近姿が見えないけど」

「紫様なら冬眠してますよ」

「ありゃ？もうそんな時期だったけ？」

「いえ。いつもはもう少し遅い時期に冬眠されていましたが、今年はどうも『つまらない』らしくいつもより早めに冬眠されたようです」

なるほど。

しかしそうなるとますます暇になるな。

幽々子の家は・・・昨日も一昨日の行ってるしなあ。

萃香のとこ・・・はやめよう。酒は嫌いじゃないが、あのワクに付き合つのはなあ。

加奈子と諏訪子のとこは・・・俺が行くと早苗ちゃんがえらい畏まるからなあ、こんな昼間から行くのは可愛そうだ。俺としてはもっと砕けた感じでいいのに。

しかたない、久しぶりに香霖堂にでも行く・・・いや、待てよ。

(幻想郷の)中に面白いことが無いなら外に探しに行けばいいじゃないか！

よし！思い立ったら即行動！明日やるうは馬鹿やローってね。
紫はちよくちよく外に出かけてるみたいだけど、俺は幻想郷に結界張ってから一度も出てなかったからな。

「藍。俺ちよつと幻想郷の外に行つて来るから」

「……………は？」

ぼかんと、口を半開きに呆る藍。うむ、なかなか珍しい表情だ。

「いや、だから幻想郷の外n」

「何言ってるんですか！大体、幻想郷から出るなんてそんなこと・
・できるんでしたね、白様の能力なら……………」

「うん。できるんだよ」

そう。本来幻想郷は強力な結界によってその外部と隔離されており、
幻想郷に入ること、外に出ることもできない。

二人の例外を除いて。

一人は『境界を操る程度の能力』を持ち、『スキマ』という特別な移動手段を使う八雲紫。

そしてもう一人はこの俺、八雲白だ。

なぜ俺が幻想郷の外に出ることが可能かということ、俺の持つ能力がやはり関係してくる。

俺の能力は『力を操る程度の能力』

この能力は、この世のあらゆる『力』を支配下にできる能力である。重力や浮力といった自然の力はもちろん。自分や他人の筋力、魔力なども操ることができる。

また、見たことがあるものなら他人の『能力』を自分のもののように使用することもできる。

つまりこの能力で紫の能力を使い、幻想郷の外に行こうというわけだ。

「では、いぬ」

そう呟き、力を使うために隠していた尻尾を顕現させる。

五尺ほどの長さの白銀の尻尾が九本ほど生えてくる。

そして同時に身体に満ちてくる膨大な妖力。

あまりに膨大な妖力に空間が軋む。

「相変わらず凄まじい妖力ですね……。流石、我らが妖獣の王
神獣・空狐 八雲白様です」

そう言い片膝を着き頭を垂れる藍。

「あはは……。ただ長く生きてるだけだつて。だからほら、顔を
上げてつて」

そんな藍を苦笑しつつ顔を上げるよう促す。

神獣・空狐

三千年以上生きた狐が神となったものであり、通力自在の大神狐で
ある。

妖狐の位においては天狐に次いで二番目とされているが、妖力にお
いては天狐のそれを大きく上回っている。

また神力もその身に宿しており、あらゆる術を使いこなすとされて
いる。

と、まあ。そんなそんな風に語られているのが、空狐＝俺である。

で、なぜ俺が今まで隠していた尻尾を顕現させたかということ、別に尻尾を出していないと能力が使えないわけではない。

ただ、使用する『他人の能力』が強力なものであるほど、俺の消費する力（妖力や神力）も大きくなっていくからである。

そして、今回使う紫の能力は尻尾を九本顕現させた、万全の状態ではないと使用できないのである。

「そんじゃ、行きますか」

その眩きとともにくぱあ、と空間が裂ける。

その赤黒い空間の割目からは無数の瞳が覗いている。

紫の「境界を操る程度の能力」は空間の境界を操り裂け目を作ることで、離れた場所同士をつなげてしまう事が出来てしまう。

これを紫は「スキマ」と呼んでいて、主に移動手段として用いている。

で、今俺の目の前にある裂目が「スキマ」である。

なんでスキマの中に目がたくさんあるのかというと、これは紫の幻

想郷の外に対するイメージなんだとか。
まあそこらへんはよくわからん。なんせ俺は紫の能力を「見て」それを真似ているだけだし。

おっと、そんなことはどうでもいいか。

これより俺は夢と希望と面白いことが待っている外の世界へと旅立つのだ！

「じゃあ行ってくるね〜藍。お土産期待しといてね」

「はあ、止めても無駄だと思いますから止めませんが、なるべく早く帰ってきてくださいね」

「はい」

そう言っただ俺は目の前のスキマの淵を掴み

「それじゃ、いってきまーす」

スキマの中へと身を投じた

第一話 狐、旅立つ（後書き）

まず読んで下さった皆様に感謝を。

誤字脱字があればご報告お願いします。

感想に狂喜乱舞し、罵詈雑言に凄くへこみます。打たれ弱い作者です。

ではまたお会いしましょう。

第二話 狐、魔法世界に立つ（前書き）

連投です。

次回の予定は未定。なるべく早く上げたいです。

それでは、どうぞ。

第二話 狐、魔法世界に立つ

スキマに入った俺は出口となるスキマを開く場所を考えていた。まずこの姿で出歩けるようなところがいい。

尻尾は隠せばいいので問題は無いが、俺の容姿が・・・ねえ。

まず絹のような白い肌。

そして腰の上まである輝く銀髪。

その毛先は小さな赤いリボンで結って九つに分けてある。

この髪型はずいぶん前に紫にされたのだが、それからずっとこの髪型にしている。あるとき九つもリボンで結ぶのが面倒で後ろで一つにまとめたりしてたのだがそれを見た途端、紫も機嫌が物凄く悪くなったのでそれ以降この髪型を続けている。そのころなぜか紫が服をくれた（偶に紫が着ている導師が着るような服を男用にしたようなもの）のだが、それも着ていないと紫が不機嫌になるのでそれ以降着続けている。因みに今もその服装だ。

話が逸れた。俺の容姿についてだったか。

そう、これだけでも十分に異常なのだが、極み付けは、

まるで鮮血のような、朱い、紅い瞳。

いや、この言い方だとなんか不気味だ。

まるで紅玉のような、紅い瞳。

うん、これでいこう。

ね、物凄い容姿でしょ？

こんな容姿の男が歩いていたら、流石に何かしら思うでしょ。

実はこの容姿だが、最初からこうだったわけではない。
俺が三千年生き、空狐となったときこんな姿になってしまったのだ。
神獣ともなると容姿も人間離れ（もともと人ではないが）するの
かしらね。とは紫の談である。

まあ能力を使って姿を変えることもできるのだが、そうすると四六
時中能力を使い続けなくてはいけないのでぶっちゃけ面倒くさいの
だ。

で、この姿で出歩けるところとなると・・・。
まず日本は除外される。この国でこんな奇妙な姿をした人は見たこ
とが無い。

かといって外国でもなあ。
幻想郷に結界を張る前に何度かアメリカやイギリスに行ったことは
あるが、ここまで奇妙な姿は見なかったなあ。

そういえば、前に一度だけ紫と行ったことのある『魔法世界』はど
うだろうか。
確かあそこは角の生えた人やら、獣っぽい人やらが普通にいたよう
な気がする。

この容姿でもきつと大丈夫だろう。

よし。行き先は決まった。

しかしずいぶん前に一度行ったきりだからなあ。

出口のイメージがハッキリできないからどこに出るかわからん。

まあいいか。

とりあえず魔法世界に着けば。

てことで、魔法世界をイメージしてスキマの出口を開く。

くぱあ、と空間が裂けそこから光が漏れ出す。

どうやらうまく魔法世界へ繋がったようだ。

ほっと一安心し、スキマから顔を出す、と。

どーん。 ぐわーん。

わーわー。 ぐおー。

ひゅー。 どっかーん。

なにやらお取り込み中のようだ。

目の前では、炎が雷が氷槍が風刃が光球が光線が飛び交い、巨大な絡繰闊歩し、巨大な船が空を飛ぶ。

ヒトがヒトを殺し、ヒトだったモノを築き上げる。

「なんか大変なところに出てきちゃったみたいだねえ」

ご覧の通り、只今戦争の真っ最中らしい。

とりあえず巻き込まれないように上空へとスキマで移動する。

それにしても一方的な戦いだな。一部の兵なんてもう敗走し始めてるし。

まあ、戦力がぜんぜん違うもんなあ。今押している方の軍はでっかい絡繰が三体もいる上に兵一人一人の力ももう一方の軍を大きく上回っている。

これじゃあ勝敗は火を見るより明らかだ。

暫くその光景を見ていたが、血が滾るとでも言うのか体が熱くなっていることに気付く。

どうやら戦場の空気に当てられてしまったようだ。

落ち着こうと大きく息を吸い、深呼吸する。

鼻から入ってくる臭い。

人の血の臭い、人が焼ける臭い。

耳から入ってくる音。

怒声、悲鳴、断末魔の叫び。

それら全てが俺の脳を刺激する。

あ……ヤバイかも。

最近幻想郷ではスペルカードルールを用いた戦いが定着したため、このような命を賭けた戦場の空気を久しく感じていなかった。そこにいきなりこの空気を当てられたため、気が高まってしまった。

少し、暴れたい気分だ。

普段はこんなことは無いのだが、色々溜まっていたのかもかもしれない。

しかし、ここで暴れてしまっただけでは今後の旅路に影響が出てしまいそうなのでなんとかこの衝動を抑え、この場を後にしようとしたのだが、

巨大な絡繰の一体と目が合ってしまった。

そいつは俺のことを敵と認識したのかその巨大な拳で殴りかかってきた。

人の何倍もの大きさのその拳はただ殴るだけで人一人を殺めるには十分すぎる威力を持っていた。が、

そんなもの俺の前には無意味に等しい。

軽く翳した右手でその巨大な拳を受け止める。

衝撃音はない。俺の能力で威力を完全に殺したからだ。

ここでこいつに知能や理性があればあまりに異常な現象に行動を停止していたことだろう。

しかしそこは知能も理性も無いただの絡繰。俺が無傷と見るや受け止められていない方の拳で殴りかかってくる。今度は左手を掲げる。しかし先ほどとは違い、拳の威力を殺すのではなく反射させるような能力を使う。すると、

ズガァン!!!

自分の拳の力をもろに受けたそいつは派手に吹っ飛び一回転しうつ伏せに倒れた。

ズズウン・・・!!

そいつが倒れた衝撃で大地が揺れる。

するとその瞬間、今までこの戦場に響いていた怒声が、悲鳴が、叫びがピタリと止んだ。

皆が一樣に此方を見やる。しかし気分が高揚している俺はそれに気が付かなかった。

地面に倒れたそいつは、起き上がろうと片手を地面に付き力を込め上体を持ち上げる。

その瞬間、地面に付いていた手がその肩口から切断された。

ズウン・・・!

再び地に伏す事になる巨大絡繰。
その肩口はまるで鋭利な刃物で切断されたような綺麗な切断面だった。

もちろんそれを行ったのは俺だ。

「境界を操る程度の能力」で『腕と体幹の境界』を切断したのだ。

懲りず、今度は逆の手を付き起き上がろうとする。

その手を再び肩口から切断する。

ズウン……！

再び転倒。

足を使い此方に這って来る。

両足をその付け根から切断する。

ついに動けなくなったそいつは口を大きく開けた。

その口からなにやら魔力の高まりを感じる。大方此方にその魔力を放つつもりだろう。

放たれても全く問題ないのだが、鬱陶しいのでその首を切断する。

ついに動かなくなる絡繰。

呆気ない。所詮ただでかいだけの絡繰。

一体でも壊せば少しは気分が収まるかもと思ったが全然だ。
不完全燃焼もいいところだ。

そこでふと、辺りが静かになっていることに気付く。
見回してみるとこの場にいる者が皆、此方を見ていた。

その顔に浮かべるのは皆一様に驚愕。

それもそのはずである。白が破壊した絡繰は鬼神兵と言い、ヘラス帝国の主力兵器の一つでありその力は一人の兵にどうにかできるものではなく、百人の兵が揃ってやっと一体の鬼神兵を足止めできる程の力なのである。

その鬼神兵を今目の前でたった一人で、それも圧倒的な力で破壊した者が現れたのだ。彼らが驚愕するのも無理は無い。

誰一人として動かないこの場で此方に向かって動く影が二つ。

残りの巨大絡繰だ。

二体の絡繰はその巨体からは想像も付かないほどの速さでこちらに飛び迫ってくる。

あと一足で手が届こうという所で能力を使う。

操るのは重力。

迫る絡繰二体に限定して、その身体にかかる重力を何十倍にも増加

させる。

途端、

ズドン！！！！

地面が窪む程の衝撃で地に倒れ伏す二体の絡繰。

有り得ないほどの重力を受けギシギシと音を立て軋む身体が徐々に地面へと減り込んでいく。

そして、

メキメキ！！ベゴツツ！！！！

ついに身体が重力に耐えられなくなり、無残に破壊された。

その光景を一部始終見ていた者たちの表情に二通りの変化が現れる。一つはその表情に希望を湛える者達。鬼神兵を圧倒的な力で破壊した者が自分達に加勢してくれている（白には全くその気はないが）者が現れたのだ、心強く思わないはずが無い。まして先ほどまで自軍が敗走寸前だったのだから尚更である。

もう一つはその表情を絶望に染める者達。自軍の主力兵器、それも三体をたった一人でいとも容易く破壊する者が相手に加わったのだ。この状況に士気を下げない者はいないだろう。

しかし、つい先程までは自軍が押していたのだ。その勢いをここで

失うことは避けたいと考えるが当然である。

その考えに至った者達数名が白に向けて魔法を放つ。

炎が、雷が、氷槍が、風刃が、光球が、光線が白に迫る。
それを白はただ一瞥し

「汚い弾幕だね」

能力を使い、魔力を霧散させる。と、

魔力で形成されたそれらは、フツと消えていった。

こんな弾幕避ける価値も無い

目の前で起こったことが理解できないのか、その場にいた者が皆、
呆然としている。

「弾幕張るならさ」

妖術を使い、炎、水、風、雷、氷と様々な属性を付加させた色鮮やかな弾を大量に創り、

「もっと綺麗に張らないと」

それらを先程此方に魔法を放った者達に、撃ち込んだ。

くナギ

今俺達紅き翼は「グレートブリッジ奪還作戦」への参加のため巨大要塞グレートブリッジへ急行している。
この作戦には俺達は当初参加する予定はなかった（メガロセンブリアのクソ爺どもが俺達は必要ないとかほざいていた）のだが、開戦後にクソ爺どもから泣きつかれたのでこうして戦場へと急行しているのだ。

戦場に到着してみるとそこには予想外な光景が広がっていた。

「これは一体……」

隣でアルが呟く

どうやらアルもこの光景が信じられないようだ。

アルだけではない。詠春もお師匠もあのラカンでさえも呆然としていた。

クソ爺の話では戦況は劣勢、今にも敗走が起こりそうな状態だと聞いていた。だからこそ俺達が戦線に投下されることになったのだが。

目の前に広がるのは逃げ惑う敵を攻め立てる連合軍。
予想外な状況に暫し呆然としてみると、

「な、なんだありゃあ!？」

ジャックが何かを見つけたようだ。その指差す方を見てみる、と数えるのが馬鹿らしくなるほどの、色鮮やかなサッカーボール程の球体が逃げる帝国軍の一団へと迫っていく。

見たこともない魔法。いや、そもそもあれは魔法なのだろうか。
あれが何なのかは分からないが、その球体はこの空を色鮮やかに染め上げていて、

「スゲエ・・・」

思わずそう呟いてしまうほど、美しく、幻想的な光景だった。

つて、呆けてる場合じゃねえ。一体誰があの魔法（？）を使ったんだ？

術者を特定するため。球体の軌跡を辿っていくと、

なにやら、モサモサした物がいた。

「なんだ・・・ありやあ？」

ジャックが先程と同じ台詞を呟くが今度のはどことなく間抜けだった。

まああんなモサモサした物体が宙に浮いてたらそんな反応にもなるか。

とにかく、あれが何なのかを見極めるためにそのモサモサを凝視して見ると、

フリフリ

動いた。

つてことは生きてる？

というかもしれない・・・

「・・・尻尾？」

よく見てみると、そのモサモサは切れ目が入っており幾つかに分かれていますように見える。

おそらく何本かの尻尾が集まっているのだろう。

何はともあれ、あのモサモサが尻尾であることが判明した。
ということは獣人だろうか。少なくとも話しはできそうだ。

そう思いそいつの元に飛んで行くことにした。

く白く

やりすぎた……

正直ここまでやるつもりは全く無かった。

しかし弾幕を張っていたらつい興が乗ってしまい。片方の軍を壊滅寸前まで追い込んでしまった。

ここまでやってしまったら流石に両方の軍から嫌でも注目されるだろう。

壊滅寸前にしてしまった軍の方からはもちろんお尋ね者として追われることとなるだろう。

また、もう一方の軍からも悪い感情は無いだろうが追われることになるのは間違いない。

今後のことを考えて多くの人間に俺の姿を記憶される前にこの場から去るのが得策なのだが、気分の高揚も収まり落ち着いてきた俺は只今絶賛落ち込み中である。

自分の愚行に膝を抱えておちこんでいると

「おい！そのアンタ！」

なんか後ろのから誰かに呼ばれたのでその体制のままクルリと振り返る。

「なに？」

そこにいたのは赤毛の少年と、黒髪短髪の青年、同じく黒髪だが此方は肩くらいの長さがあり白いローブ纏った青年、白髪の少年に筋肉達磨がいた。

俺に声をかけたのは赤毛の少年のようだ

「ちょっとアンタに聞きたいことが……ってなにしてんだ、アンタ？」

「今ちょっと落ち込んでるだ」

「そ、そうか……まあ元氣出せ！」

「……ありがとう」

慰められた。結構イイ人っぽい。

「で、聞きたいことってのは？」

「ヘラス帝国の軍を壊滅寸前まで追いやったのは貴方ですか？」

と黒髪ローブ。

「ヘラス帝国って？」

「貴方が先程魔法を放った者達ですよ」

ああ、あいつらヘラス帝国って国の軍だったのか。そういえば前に紫と一緒に魔法世界を回ったときに行ったような行かなかったよな。

とりあえず俺は一国を敵に回してしまったようだ。

「まさか知らずに攻撃したんですか？」

「……………」

再び膝を抱えて落ち込む俺。

ああホントこれからどうしよう？というかあつちが最初に攻撃してきたんじゃないか。なんで俺がこんなに悩まないといけないんだ。

と、ウジウジ悩んでいたらだんだんムシヤクシヤしてきた。いつそヘラス帝国とやらを滅ぼしてやるうか。

なんか考えがだんだん物騒になってきた。一旦落ち着こう。

「なあ、アンタ帝国じゃないなら連合の人間なのか？」

「ん？いや、俺はヘラス帝国の者じゃないけど、その連合のものでもないよ」

「ならなんで帝国軍に攻撃してたんだ？」

「先に手を出したのはあいつらだよ。こっちは正当防衛ってやつさ」

「正当防衛にしてはやり過ぎのような気もしますが……」

はい。そこは反省しております。

「待て、連合でも帝国でもないとしたら、君は一体何者なんだ？」

黒髪短髪さんが鋭くつつこんでくる。

あゝ、なんて説明しようか。

誤魔化すのも面倒くさいし、正直に話してしまうか。まあそれで何か問題が起きたら逃げればいいし、最悪口封じに神隠しにあってもらおう。

なんて、物騒なことを考えていると

ブウン……！

いきなり先程の巨大絡繰やら空飛ぶ巨大な船やらがわんさか現れた。

「くっ！！大規模転移魔法か！！帝国の奴等、意地でも此処を渡さないつもりか！」

なんだか辺りが騒がしくなった。
目の前の五人も臨戦態勢をとる。

「話は後だ！今はまず帝国の奴等を追い払おうぜ！」

赤毛の少年の言葉を合図に彼らは戦場へと飛び立っていった。

「貴方も手伝ってくれませんか？」

一人残っていた黒髪ローブ。どうやら俺を仲間に取り込む心算らしい。

まあ帝国から追われるのもう確実なので、連合とやらに荷担してとつとつこの戦争を終わらせるのがいいかもな。戦争が終われば大手を振って出歩けるだろうし。

「ん。そんじゃ、微力ながら助太刀しましょうか」

そついうと、俺があっさり了解したことに驚いたのか少し目を見開く黒髪ローブさん。しかしすぐに先程と同じように柔らかな微笑みを湛える。

「ありがとうございます。では私達もいきましょう。ああ、自己紹介がまだでしたね。私はアルビレオ イマと申します。アルとお呼び下さい」

「俺は八雲 白。よろしく、アル。さて、ちゃっちやと片付けようか」

さて、まだ少しムシャクシャしてたのでちょうどよかった
ゲフンゲフン！

いや、なんでもないですよ？ホントだよ？

．．．．．

その後程なくして戦闘は連合軍の大勝という形で幕を閉じた。

アル達一行はお前らホントに人間か？という程の力で（特に赤毛と筋肉達磨）帝国の兵を圧倒していた。

これ、俺いらんじゃね？なんて思わなくも無かったが俺もそこ

そこに活躍したとだけはおいづ。

第二話 狐、魔法世界に立つ（後書き）

まず読んで下さった皆様に感謝を。

感想等どしどしお願いします。作者の力となります故に。

それではまたお会いしましょう。

第三話 狐、紅き翼となる(前書き)

これからは一週間に最低一回は更新したいと思います。

それでは、どごご。

第三話 狐、紅き翼となる

「それでは、まずは自己紹介からいきましょう」

アルビレオ イマ アルがいつもの微笑を浮かべそう告げた。

あの戦闘の後、俺は戦場で出会った五人組と近くの街にある飲食店へと来ていた。

そこで俺が自分の事を話し出そうとしたら、アルがそれに待ったをかけた。曰く、

「私はもう自己紹介を済ませましたが、皆さんはまだお互いの名前も知らないでしょう？お話をするならまずお互いの名前を知ってからにしましょう」

ということらしい。

まあ名前が分からないと呼ぶときに「おい」とか「おまえ」なんて呼び方になるからね。それは少し寂しい気がする。

他の四人も異論は無いらしくアルの言葉に頷く。

「じゃあ俺からだな」

まず最初に名乗りを上げたのは赤髪の少年。

先程の戦闘でこの少年は凄まじい戦果を挙げている。一般の兵が使う魔法なんかとは桁違いの威力の魔法を連発し、次々と帝国の空飛ぶ船を墜としていく様はまさに圧巻だった。特に彼が多用していた「千の雷」という魔法の威力は凄まじかった。あれは魔理沙のマスタースパークに匹敵するだろう。

「俺はナギ スプリングフィールド。旧世界の魔法使いだ」

と、ナギ少年の簡潔な自己紹介。ナギ少年が言っていた『旧世界』というのは俺が暮らしていた幻想郷がある世界だ。旧世界と魔法世界は『ゲート』と呼ばれるもので繋がれていて普通はそれを使い、行き来するらしい。そのゲートがどこにあるのかは知らない。前に紫と来たときもスキマで来たからな！。

「次は俺だな」

続いて筋肉達磨。

この男もナギ少年と同じく凄まじい戦果を挙げている。おそらくこの男が今回の戦闘で一番の戦果を挙げているだろう。

「俺はジャック ラカン。魔法世界の出身だ。因みに、ついこの間までこいつらとは敵同士だった」

そう言って、「がっはっは！」と笑う筋肉達磨

ジャック。

何とも豪快な男だ。

その豪快さは先程の戦闘にも現れていた。

この男、攻撃方法が基本的に拳なのだ。

それであるの巨大な船やら絡繰をなぎ倒していくのだから驚きである。

そして彼の繰り出す技の名前がまた・・・その・・・とても個性的なのだ。

『羅漢適当に右パンチ』やら『気合い防御』など明らかに適当に名前着けただろ。と言いたくなるようなものばかりなのだ。そしてそれを大声で叫ぶのだが、そんな適当に名前着けるくらいなら叫ばなくてよくね？なんて思っていたりする。

「では、次は俺が」

お次は黒髪短髪さんのようだ。

それにしても、なんだか出会ってからずっと彼の俺を見る視線が鋭いというか、なんだか警戒されているような気がする。

俺何かしたっけ？

「俺は青山 詠春。旧世界の出身だ。」

やっぱり簡潔な自己紹介。皆もうちょっと自分のことを話してもいいと思うんだけどなあ。

せっかくだから少し質問してみよう。

「詠春は名前からして日本の出身かい？」

「あ、ああ。日本の京都出身だ」

「彼はそこで『神鳴流』という剣術を修めたサムライなんですよ」

へー、侍かー。って侍ってまだいるのか？確か幻想郷が外の世界と隔離される少し前に廃刀令が出されてなかったけ？

まあいいか、それよりも神鳴流って聞いたことあるような気が・・・。

そういえば昔、陰陽師の連中と戦^やりあったときに連中の中にそんな剣術を使っていた奴らがいたような気がする。

ってことは詠春はその末裔ってことか、なら俺が何なのか薄々気づいてるのかねえ？だから視線がきついのかな。

「それにしても、旧世界について詳しいのですね？」

「ん？ああ、俺も旧世界の出身だからね」

と、答えると皆が
いや、詠春以外が呆けた様な表情
となる。

どうやら詠春は今の俺の発言で俺が何なのか確信に至ったようだ。
先程よりもその視線が鋭くなっている。

他の皆はやはり俺のことを魔法世界の出身だと思っていたようだ。
まあ旧世界に尻尾を生やした人間はいないからね。

「まあ俺のことは後で説明するからさ、自己紹介の続きをお願い」

「む、そうじゃの。では、ワシはゼクトじゃ。一応ナギの師匠ということになっておる」

へー、ナギ少年のお師匠さんか。しかしこの白髪少年

ゼクトは随分不思議な存在だな。とりあえず人間ではないな。俺のようなモノとも違う、どこか人工的な感じがするが……。
ま、そんなことはどうでもいいか、ゼクトはゼクトってことで。

「これで私達は全員自己紹介は終わりましたね。それではお願いします。白」

「ん。俺は八雲 白。さっきも言ったけど、旧世界の出身だ」

皆に習って簡潔な自己紹介。まあこれで許してくれるとは思わないけど。

「八雲……だつて……!？」

おろ？なんか詠春の顔が青いぞ？なんか変なこと言ったか、俺？

「おい、どうしたんだよ詠春？」

詠春の異変に気付いたナギ少年が問いかける。
しかし詠春はそれに気付かずぶつぶつと何事かを呟いている。

「先程の妖力……そして八雲……まさか……境界の……
いや、しかし……」

他の皆には聞こえないだろうが人間よりも遥かに耳の良い俺は詠春が何を言っているのか聞き取ることができた。
そしてそれから推測すると

もしかして誰かと勘違いしてないか？『境界の』なんていったら俺は一人しか思い浮かばないが……。
そういえばアイツよく外に行ってるしな。偶に人間攫って来るし、
外の世界でも有名なかもしれない。悪い意味で……。
とりあえず、誤解は解いたほうが良いだろう。

「あー、ちよつといい、詠春？たぶん今詠春が考えてることは間違
いだから」

「どついうことですか？」

状況が飲み込めていないアルたちは俺の発言に疑問顔だ。
詠春は探るような目で此方をみる。

「詠春にはばれてるみたいだからもう言っちゃうけど、俺は旧世界の日本って国で妖怪とか妖って呼ばれてる（俺は少し違うんだけどね）類のモノなんだよ。で、詠春は俺のことをある妖怪と勘違いしてるんじゃないのかなって」

「どうなんですか、詠春？」

「・・・先程の戦闘で貴方から膨大な妖力を感じた。そして貴方が名乗った八雲と言う名。私を知る妖怪で八雲の名を冠するモノはかの大妖怪『境界の妖怪 八雲』しかない。貴方はその『境界の妖怪』ではないのか？」

やっぱり紫と勘違いされてたみたいだ。

名前が一緒なのだから間違ってしまうのは分からなくも無いが、この尻尾見たら俺の正体はすぐ分かると思うんだけどなあ。

「確かに同じ八雲の名だけど俺は『境界の妖怪』じゃないよ。因みにその『境界の妖怪』の本名は八雲 紫。姓が同じ事から分かると思うけど、俺とは家族みたいなもの、かな」

「では、貴方は一体何者なんだ？」

「詠春ならこの尻尾見れば分かると思うんだけどな」

そう言い、九本の尻尾をフリフリと振ってみる。

「九本の尻尾……。そうか、九尾の狐か」

その応えに俺は満足気に頷く。

「では、改めて自己紹介を」

居住まいを正し、軽く咳払いする。

「俺は妖獣の王、神獣・空狐 八雲 白。どうぞよろしく」

「神獣・空狐……！」

「なあ、クウコってなんだ？」

「魔法世界出身の俺が知るわけねえじゃねえか」

「ワシも知らんな」

「詠春、クウコとは何なのですか？」

詠春以外は当然空狐を知らないようで、なんじゃそら、って顔を
している。

いやー、自己紹介してこーいう反応が返ってくるのは新鮮だ。幻想

郷じゃ自己紹介すると尊敬が畏怖が大半だったからなあ。一握りの好戦的な奴は勝負を吹っかけてきたけど・・・。
俺としては普通に接してくれるほうがいいんだけどなあ。

「ほ、本当に貴方は空狐なのですか？」

と今まで呆然としていた詠春が問いかけてくる。

「うん。だって嘘ついてもしかたないでしょ」

「しかし、空狐とはその姿は既に狐ではなく人間の姿をしていると・・・」

「そりゃあ人間の前に出るときはこのままじゃ出ないよ。ほら」

そう言って今まで出していた尻尾を隠す。

「ね？」

「・・・」

再び尻尾を出す。詠春の顔が再び呆然としたものになる。
これを見てどうやら納得してもらえたみたいだ。

「先程も聞いたのですが、クウコとは一体何なのですか？」

「・・・空狐とは三千年以上生きて神となった狐だ。別名大神狐と呼ばれ、あらゆる術を使いこなすとされる神獣だ」

俺の変わりに詠春が皆に説明してくれた。

それを聞いてアルとゼクトは目を見開き驚いている。

後の二人は、

「へー、三千年も生きてるのか。もう爺さんじゃねえか」

「良かったじゃねえかゼクト。爺さん仲間ができたぞ」

なんて見当はずれなことを言っていた。

しかしそれを聞いて自然と笑みがこぼれる。

「お、おい！ナギ、ジャック！お前ら神獣に向かってなんて事を・・・！」

「神獣とかそんなの関係ないか？白は白でいいじゃねえか。それに白もそういう堅苦しそうな嫌そうだったし」

「そうだぜ。それに俺はヨウカイがどうか知ったこっちゃないしな」

ならばと俺も気にせずに答える。

「ん。いいよ。それじゃよろしくね」

「お。いいのか？やけに早い決断じゃねえか」

「うん。それよりそっちこそいいのかい？ナギとジャック以外の皆に確認とんなくて？」

「問題ない！な、いいだろ？アル、お師匠、それに詠春も」

「ええ。問題ありません。よろしくお願いします。白」

「うむ。先程の戦闘で見たが、かなりの実力を持っているようじゃったからの。仲間となってくれるのなら大歓迎じゃ」

アルとゼクトは賛成してくれてるみたいだが、問題の詠春は・・・

「一つだけ確認させて下さい。貴方はなぜ、魔法世界に来たのですか？」

なるほど、俺の目的が気になるらしい。

けど、俺の目的っていつてもなあ・・・

「んー、観光の為かな」

「・・・は？観光？」

「うん。さっきヘラス帝国と戦ってたのは偶然なんだよ。どうやって来たかは後で説明するけど、たまたまさっきの所に出てきちゃってさ。それで向うに攻撃されちゃって戦闘になったってわけ」

「はぁ・・・」

気の抜けた返事をする詠春。なんか拍子抜けしてしまったようだ。

「で、どうなんだ詠春？」

「・・・分かった。俺も賛成する」

どうやら詠春も了承してくれるようだ。

「ありがとう。詠春。それとよろしく」

「いえ、私のほうこそよろしくお願いします。えっと・・・八雲殿」

「敬語はいらなくて。それに白って呼び捨てで呼んでいいから」

「しかし・・・」

「そうだが、詠春。もう白は俺達『紅き翼』の仲間なんだからな！」

「・・・わかった。では改めてよろしく、白」

「ん。よろしくね、皆」

・ ・ ・ ・ ・

こうして俺は『赤き翼』の一員となった。

その後俺のことや幻想郷のことなど色々と話した。

幻想郷のことを話すとき詠春に、『境界の妖怪』の実態（一日十二時間は寝るなどのものぐさぶりなど）を話してやると「あの噂に名高い大妖怪が・・・」なんて言っつて頭を抱えていた・・・。

俺は見慣れてるからわからないが、そんなに衝撃的だったのかな？

第三話 狐、紅き翼となる（後書き）

読んで下さった皆様に感謝を。

そして感想どしどし書いてます。

第四話 狐、王女と会う(前書き)

筆の進みが良いので昨日に引き続き投稿です。

アリカ王女が少しおかしくなってます・・・。

ここで皆さんに一つ報告が。

この作品の主人公が使用している「力を操る程度の能力」ですが、「東方乱力録」という作品の主人公が使用しているものと同一であることが指摘いただき判明しました。

しかし今から主人公の能力を変更して書き直すようなことは作者の非力な文章力ではできそうも無いので、このままでいかせていただきます。

それでもいい。といって下さる方は、どうぞ暖かく見守って下さい。

それでは、どうぞ。

第四話 狐、王女と会う

俺が赤き翼の一員となつてから数ヶ月が過ぎたが、戦争は激化の一途を辿る一方だった。

俺達も多くの戦闘に参加し、多大な戦果を挙げていた。

中でもナギの戦果は凄まじく、連合からは『千の呪文の男』と呼ばれ慕われ、帝国からは『連合の赤毛の悪魔』と呼ばれ恐れられていた。しかし、ナギが呪文を千も知っているとは思えないんだけど……。よく使う呪文でさえ紙に書いて持ち歩いているくらなのに……。そのことをアルと話していると、

「通り名なら白も付けられてますよ」

知らないんですか？なんて言われた。

はい、全く知らないです。

詳しく聞いてみると、どうやら俺は連合からは『幻想を統べる者』、帝国からは『連合の銀の魔王』なんて呼ばれているらしい。魔王って……。

「なんで俺が魔王なの？ナギやジャックの方が戦果挙げてるのに」

「あんなことしていたら魔王なんて呼ばれても仕方ないですよ……」

あんなことって……。俺はただ鬼神兵を片っ端から『右半身と左半身の境界』を操って真つ二つにしているだけなのに。アレが居ると味方の士気が下がるから優先的に片付けてるだけなんだけどなあ。

因みに『幻想を統べる者』の方は、俺が呪文も無しで火やら水やら氷やら風やら闇やらを操ってるのが由来らしい。

空狐の特性上魔法も使えることは使えるのだが呪文を覚えるのが面倒だし能力使ったほうが早いしね。

それと新しく仲間も増えた。

元連合の捜査官のガトウとその弟子であるタカミチだ。

ガトウは元連合の捜査官という経歴から、またタカミチも少年探偵団という独自の調査組織を有しており情報収集能力に長けていた。

そして彼らが赤き翼に加わってさらに数ヶ月たったある日、ついにこの戦争の黒幕らしき組織をガトウ達突き止めることに成功した。

聞きなれない単語をナギが反芻する。

「ああ。どつやらそいつらがこの戦争を裏で操っているらしい」

ガトウの話によると、どうもその『完全なる世界』という連中は連合、帝国双方の中枢の深くまで入り込みこの戦争が終わらぬように、そして激化するように操っているらしい。

「だけど戦争なんて続けてなんの意味があるんだ？そのコズモ何チヤラって奴らは阿呆なのか？」

ジャックに阿呆なんて言われたらお仕舞いだな……。まあその意見には賛成だけど。

「戦争があると都合がいい人間も存在するのさ。例えば武器商人だつたり傭兵だつたりな」

なるほどね。ガトウの言うことも尤もだ。

この世界の戦争にはなにやら複雑で強力な武器が多く使われている。当然それらを作っている人間たちが居るのだろう。そしてそんな強力な武器は戦争ぐらいにしか使われることは無い。すると戦争が終わってしまうとどうなるか。当然武器が売れなくなり、彼らは収入を得られなくなってしまふ。傭兵に関してはそもそも戦争が無くな

ると仕事そのものが無くなるのだ。
つまりそういう連中の集まりが『完全なる世界』なんて痛い名前の
組織らしい。

「けっ！胸糞悪い話だぜ」

ナギが吐き捨てるように言う。

「とつととそいつら潰してこの下らない戦争を終わらせようぜ！」

「しかしそう簡単にもいかない。奴らは用心深くなかなか尻尾を掴
ませてくれない。組織の存在はなんとか知ることができたが、その
構成や規模は謎だ。そこで俺とタカミチはもう少しこいつらについ
て調査してみる。結果が出るまで皆は今まで通りに行動していてく
れ」

ということ、ガトウとタカミチが調査をしている間、俺達は意味
の無いと知りながら戦争を続けていくしかできなかった。

そして数日たったある日。

「何だよガトウ。わざわざ本国首都まで呼び出してさ」

俺達は今、連合の盟主『メガロメセンブリア』に来ていた。連合の最高戦力である俺達は常に戦線の最前線にいたのだが、先程ナギが言ったようにガトウに呼び出され、ここにいるのだ。

「あつてほしい人が居る。協力者だ」

「協力者？」

「そうだ」

知らない声に振り返ると、そこには立派な髭を蓄えた初老の男が立っていた。

「マクギル元老院議員！」

なんか皆が驚いているところを見るとかなりの大物のご登場らしい。つてことはこの人が協力者かな？

「いや、わしちゃう。主賓はあちらのお方だ」

どうやら違つようだ。それにしてもマクギル議員、「わしちゃう」つて……。見た目に反してなかなかお茶目な人のようだ。

「ウエスペルタティア王国……。アリカ王女」

カツ……。カツ……。と靴の踵が床を叩く小気味よい音とともに純白のローブを纏つた女性が姿を現す。

その蒼と碧の透き通つた瞳と凜々しい表情には強い意志が感じられる。

年はナギと同じか少し上ぐらいだろうか。その顔立ちはまだ若干のあどけなさを残している。

その少女を見て美しいと思わぬ男は居ないだろう。そう思わせるほどのものが彼女にはあつた。

実際ナギなんか見とれちゃってるしね。

皆アリカ王女の美しさに目を奪われていたのか、誰も動かなかつたこの場で最初に動いたのは、

「はじめまして、アリカ姫。俺はジャック ラカンと申すものです。以後お見知りおきを」

なんか変な敬語でアリカ王女に特攻をかけるジャック^{バカ}だった。

それを見て詠春、ガトウは慌て、アルはいつもの微笑、ゼクトは相変わらずの無表情、そしてナギはまだアリカ姫に見とれていた。どんだけだよ……

そしてそんなバカにアリカ王女が掛けた一言は

「気安く話しかけるな下衆が」

「」「」「……」「」「」「」

一同沈黙。

なんとも気の強いお姫様である。流石のジャックもその言葉に呆然としている。

アルだけは肩を震わせて笑いを堪えていたが……。

「で、では。赤き翼の皆には一人ずつ自己紹介をしてもらおうか」

場の空気を変えようとマクギル議員がそう提案する。

「では、まずはナギ殿から」

「……………」

「ナギ殿？」

二度のマクギル議員の呼びかけにも無反応なナギ。まだアリカ王女に見とれているらしい。どんだけだよ……………」

「おい。ナギ」

「へ？な、なんだよ詠春？」

隣に立っていた詠春に肘で小突かれてようやく気付いたナギ。どんだけだよ……………」

「アリカ王女に自己紹介だ。馬鹿」

「あ、ああ。俺はナギ スプリングフィールドだ。よろしく頼む、
姫さん」

「ほう、お主がああのか『千の呪文の男』か」

なんとナギの自己紹介にアリカ王女が反応を示した。皆が驚く中、
一人動く出ず者^{バガ}が一人。

「アリカ姫。そいつは『千の呪文の男』なんて呼ばれてますが、実際には覚えてる魔法は六しかないんですぜ」

今のを好機ととったのかジャックが再びアリカ姫に特攻を掛けるが、

「気安く話しかけるな下衆が」

「………」

再び撃沈。しかも先程と一言一句違わぬ言葉で。

今のは空気を読まずに特攻したジャックが悪いと思うが……

「まあ、元気だしなよ、ジャック」

「……おう」

一応慰めておいた。

そんなやり取りをしている合間にナギとアリカ王女の会話は弾んでいるようで、アリカ王女は相変わらず無表情だが、少し緊張した面持ちで僅かに頬を紅潮させたナギは戦場に立つときとは違い歳相応に見えた。

もちろんその光景を皆で微笑ましく見たことは言うまでも無い。ニヤニヤしながら

それから順調に自己紹介は進んでいき（ナギ以外は皆簡潔自己紹介で終わった）最後に俺の番が来た。

アリカ王女の前に立ち、名乗ろうとしたところで

「お主が『幻想を統べる者』じゃな」

なんとアリカ王女の方から声を掛けてきた。

これには一同驚いたようで皆で目を見開いている。

かく言う俺もかなり驚いている。顔には出さないが……。

「ええ。連合の兵からはそう呼ばれていますね。八雲 白です。どうぞよろしく」

「うむ。よろしくの」

びっくりした……。まさかアリカ王女から声を掛けてくるなんてなあ……。

しかしこれで自己紹介も終わったので後ろに下がろうとしたら

「お主に一つ尋ねたいことがあるのじゃが」

なんと再びアリカ王女から話しかけられた！

驚きの連続だ。とりあえず（ラカンの様に）嫌われてはいないよう

だ。

横目でラカンを見てみるとジト目でこつちを睨んでいた。いや、睨まれても……。

とりあえずアリカ王女の質問を聞いてみよう。

「なんでしよう？」

「お主の尻尾なのじゃが、それは本物なのか？」

「ええ、本物ですよ。ほら」

尻尾をフリフリと振ってみる。

しかし何でそんなことを聞くのだろうか。尻尾なんて魔法世界じゃ珍しくも無いのに。

「そうか。では、の……一つ、頼みがあるのじゃが……」

「？ はい。なんですか？」

驚きの三連続。いきなりアリカ王女に頼みがあるなんて言われた。しかもさっきまでの凜とした雰囲気は鳴りを潜め、その口調も歯切れが悪い。しかしその表情はあくまで無表情である。よく見るとほんの僅かに頬が紅潮している様に見えなくも無い。

なにか言い出しにくいことなのだろうか。

そう思い、一体どんなお願いがくるのかと身構えていると

「そ、その尻尾を触らせてくれんかの？」

「……………は？」

あまりに予想外なお願いに、王女相手であることを忘れて素の反応をしてしまった。

言い出しにくそうにしているからもつと、こつ無茶苦茶な事かと思いきや尻尾を触らせてくれとは……………。

やはり皆もアリカ姫の発言が予想外だったようで呆然としている。もちろん俺も呆然としている。

しかし当事者である俺は返事をしなければいけないのでいつまでも呆けている訳にはいかない。

「いいですよ。はい」

特に拒む理由もないので了承し、アリカ王女に背を向け尻尾を差し出す。

「うむ。感謝する。で、では……………」

肩越しに除いてみると恐る恐るといった感じで九本の尻尾のうちの一本に手を伸ばすアリカ王女が見える。

そして、むんず、と尻尾を掴まれた。

「おお……。この肌触り、なんと滑らかな……」

そして何事かをぶつぶつ呟き始めるお姫様。

先程の凜とした表情はそこには無く、今は美しいというより可愛らしいという表現が似合うような表情を（よく見ると）していた。

暫く一本の尻尾を撫でたり握ったりとその感触を確かめるように触っていたのだが、やがて意を決した様な表情をすると

「……っ!」

ぼすん!

「「「「んな!!!!??」」」」

なんと尻尾の海に飛び込みなすった!!!

「うむ……。やはり、素晴らしい……」

なんか恍惚とした表情で呟いてますが王女様……。仮にも一国の王女が男に抱きつくって……。いや？尻尾だから良いのか？

なんて思い周りを見てみると、

「・・・・・・・・」

全員に思いっきり睨まれていた（アルだけは肩を震わせて笑っていたが）。

ですよー。やっぱりまずいですよー。

「あー、アリカ王女、それくらいにしてもらえませんか？」

「む、そうか。長々とすまんかったの」

「いえいえ。こんな尻尾でよければいつでもお貸しますよ」

「そうか。ではまた頼むとしよう」

尻尾の海から生還したアリカ王女は先程までの凜々しい王女に戻っていた。

というかまた頼むつもりなのか、冗談で言ったんだけどな・・・。

「うおっほん！えー、では自己紹介も済んだようなので早速本題に入ろうか」

場の空気を変えようとマクギル議員がそう提案する。

この人さっきもこんな役回りだったような・・・。

それからマクギル議員の言う本題の話となったのだが、その話を要約すると

アリカ王女の母国であるウェスペルタイア王国は連合と帝国のちようど中間にある国でこの戦争でも随分と大変な目にあってきたらしい。そこで彼女自らが調停役となり戦争を終わらせようとしたのだが力及ばず戦争を終わらせるには至らなかった。そこで俺達赤き翼に助けを求めてきた。

という感じだった。

俺達はもちろんそれを了承し、アリカ王女に全面的に協力することを約束した。

そして今日は顔合わせを目的として集ってもらったため、詳しい事は後日話し合うことにして解散ということになった。

「ワハハハハ！上手いことやりやがってこんガキヤ！」

「ああ！？何のはなしだ！？」

「とぼけんじゃねーよ！お姫様とイチヤイチャ キヤイキヤイおしやべりしてたろーがッ！」

「してねっつの！なにがイチヤイチャだ！バカ！」

「なーに言っただよ俺なんか

」

アリカ王女との会談を終えた俺達は今夜宿泊予定の宿に向かって移動中である。

その移動中になにやらナギとジャックがさっきのことでギヤイギヤイと言いつつ合っていた。

話の内容はナギがイチヤイチャしていたとかかしていなかったとか・・まあいチャイチャしていたかは分からないけど

「少なくとも楽しそうには話してたじゃん、ナギ」

「はあ！？何言っただよ白！」

「ハハ！やっぱり白にもそう見えたか！ほら、どうなんだナギ？」

「ぐっ・・・！ってそっぴやあ白だつて姫さんとイチヤイチャしてやがったじゃねえか！」

お？まさかのナギからの反撃。
ふふ。しかし俺も伊達に三千年生きてる訳ではない。これくらい軽く返してみせよう。

「あれ？まさかナギ、焼きもちかい？」

「はあああああ！？」

「ハツハ！なんだよナギ、お前も何だかんだいってカワイイところじゃねえか！」

「んっだそりゃ！意味わかんねえっつの！勝負すつかてめえら！？」

そんなやり取りを詠春、ゼクト、ガトウ、タカミチは呆れ顔、アルは相変わらずの微笑で見っていた。

• • • •

・

こうして俺達紅き翼は、アリカ王女と協力体制となった。

それから暫くジャックと二人でアリカ王女のことをネタにナギをからかっていたが、結局ナギが楽しそうに（ジャック風に言えばイチヤイチヤ キヤイキヤイ）アリカ王女と話していた事を認めることはなかった。

全く、ナギも強情だねえ・・・。

第四話 狐、王女と会う（後書き）

読んで下さった皆様に感謝を。

実は主人公を九尾にしたのはこの尻尾モフモフをやりたいかったから
だったりする……。

感想どしどし待ってます。

第五話 狐と王女と（前書き）

少し短めです。

アリカ王女がおかしいです。

それではどうぞ。

第五話 狐と王女と

「買い物に付き合え？何で俺がッ

バチーーン！！！！

室内に乾いた音が鳴り響く。

音のした方を見してみる。そこにはナギとアリカ様。そしてナギの頬には見事な紅葉が作られていた。

なにが起きたのかは推して知るべしである。因みに俺の隣ではジャックがナギを指差しゲラゲラ笑っている。

俺が居るのはメガロメセンブリアにある豪華な宿の一室（スイートルームとかアルが言っていた）。

今俺達赤き翼は休暇中である。そこでその時間を利用して「完全なる世界」について独自の内定を開始したのだ。

今この場にいないメンバーは皆調査に出かけている。

なのにどうして俺達がホテルに居るかというと・・・。それこそ推して知るべきである。

念のため言っておくと俺は魔法世界に明るくないからという理由で調査メンバーから外された。

そんな訳で俺とナギとジャックは束の間の休暇を満喫しているとい

うわけだ。

そして何故ナギの頬に立派な紅葉が作られるような事態になったのかということ……。

先程俺達と同じくメガロメセンブリアに滞在中のアリカ様が訪ねてきてナギに買い物に付き合うように要求したのだが、ナギはそれを拒否。で、アリカ様の見事なびんたがナギの頬に炸裂したというわけだ。

ナギはもともと捻くれた性格をしており少々意地が悪いところがあ
るがアリカ様相手にはそれが顕著に出ている気がする。

何というか、好きな子を気を引こうと意地悪している子供のようだ。
その結果、毎回のようにその頬には見事な紅葉が作られるのだが・
。。。

78

「ってえな！わーったよ、付き合やいーんだろ！」

流石にナギも学習したのか、びんた一発で折れることにしたようだ。

「最初からそうすればいいのじゃ。では」

「ただし条件がある！」

ナギのささやかな抵抗。どうやら何か条件を付けるらしい。
また変なことを言っつて頬の紅葉を増やさなければいいのだが……。

「……なんじゃ？その条件とは？」

アリカ様が「変なことを言っつたらもう一発だ」と目で語り、ナギを促す。

ナギはそんなアリカ様に背を向け、少し離れたところでその光景を見ていた俺の前まで来る、と。

がしっ！と俺の肩を掴んだ。

「白も一緒に連れて行くぜ！」

「………は？」

なんか目の前のバカが有り得ないことを言っている。

ナギ……なんでアリカ様がわざわざナギ一人に声を掛けたのか考えてみなよ……。

これは特大紅葉もう一枚追加か？なんて思っつてアリカ様を見る。

アリカ様は顎に手を当て暫し何事かを考えている。

そしてその口が開かれ、出た答えは

「ふむ。まあ白なら良いか」

「・・・・・・・・・・は？」

どうしてこうなった・・・・・・・・。

ここはメガロセンブリアの大通り。そして俺の前には凜然と歩くアリカ様と大量の荷物を抱えたナギ。そしてその二人を三歩ほど引いた位置から眺める俺。

せっかくアリカ様とナギの二人で出かけるように仕向けたと言うのにこれでは意味が無いではないか・・・。

そう、今回アリカ様がナギを買い物に誘うように仕向けたのはこの俺なのだ。

そして何故俺がこんなことをしたのかと言うと、まず俺とアリカ様

のことを話さなければならぬだろう。

あの会談の後、俺は何度かアリカ様と個人的に会っている。例のアリカ様のお願いを聞くために・・・。

で、その間ただ尻尾を撫でられていただけでは話らないので、色々話している内に親しくなっていたのだ。

そのときに俺が何者なのかも話しており、それを話したときアリカ様は

「お主が三千年も生きた神獣というものならば高々十数年生きた私なんぞに謙る必要はない。これからは私のことは呼び捨てにしてもらっても構わんぞ？」

なんて言っていたのだが、流石に一国の王女を呼び捨ては不味いだろうという事で、今では「アリカ様」と呼んでいる（こう呼ぶ事に決まったときアリカ様は不満そうだったが・・・）。

そしてそのアリカ様との会話の中で、アリカ様がナギに好意を抱き始めている事を感じ取った俺は、一計を講じることにした、ということなのだ。

と言っても俺がしたことは、

一つ、今日アリカ様が買い物に出かけるように仕向けたこと。

二つ、その買い物にナギを連れて行くように助言（「アイツなら荷物持ちに最適ですよ」と言っておいた）したこと。

三つ、すれ違いにならないようナギをホテルに留めておくこと。

これだけであるが。

これらは上手く働き、アリカ様がナギを誘うまでは完璧だったのだ

が……。

「おい、白。お前も少しは荷物持ってくれよ」

「………もう少し空気読みなよナギ」

人がせつかく距離を開けて後ろを歩いているというのにこの男は……。
まあナギにそんなことを求めるのが間違いか。

「はあ、アリカ様先に行っちゃてるじゃん。ほら、荷物全部持つてあげるから早くアリカ様の所まで行きなよ」

「お、おう。意外と力持ちなんだな白って」

ナギの持っている荷物を全て引き取ると、ナギが驚いていた。
まあかなりの量があるからなあ。さっきまでナギもふらふらしながら歩いてたし。

「そんなことはいいいから、ほら早く行った行った」

「わーっただよ。………たく何なんだよ一体……」

ぶつぶつと文句を垂れながらもしっかりとアリカ様の隣に並ぶナギ。

もう少し素直になればいいのにねえ。

今も辺りを物珍しそうに（表情は変わっていないが俺にはなんとなく分かる）アリカ姫が「アレはなんじゃ」とナギに問いかけるが、ナギは「知るか」とそっけない返事しかしない。

しかし、なんだかんだ言っつけてしつかりとアリカ様に付いていき、何か言われれば必ず返事もしている。

忘れていたがよく考えてみたらナギもまだ十四歳。世間一般ではまだ子供と言われる年齢なのだ。

まあ、今はまだこんなものだろう。

前を歩く無表情なお姫様と仏頂面な少年を見て俺は小さくため息を吐き、そう思った。

くアリカ

白に言われてナギ スプリングフィールドを買い物へと誘ったのだが、断るうとしたので白に言われたようにその頬を引つ叩いてやった。

するとナギ スプリングフィールドは買い物の付き添いをする条件に白を同行させることを要求してきた。

しかし白ならば良いだろう。そう思い私はその条件を飲むことにした。

私と白はあの会談以降随分と親しくなった。

きっかけは以前から気になっていたあの尻尾。

別に尻尾自体はこの魔法世界では珍しいものでない。

しかしあの尻尾はそれらのものとは比べ物にならない・・・いや比べるなど失礼というほどのものであると、私はそれを見た瞬間理解した。

見ただけで分かるその滑らかな毛並み。

日の光を受け白銀に輝き。

風が吹かれ柔らかく揺れる。

その様のなんと美しきことか。

見ているだけで幸福な気持ちになれる。

しかし見ているではだめだ。

できることならあれに触れたい。

撫でたい。

握りたい。

抱きしめたい。

気付けば私も自分のことを彼に話してしまっていた。

彼が聞き上手なせいだろうか、私は普段なら他人には絶対に話さないようなことまでも彼に話していた。

王族として生まれ育った自分のこと。魍魎跋扈のオステイアでの暮らし。そして、妹の アスナのことまでも。

彼はそれを全て聞いてただ一言、こう言った。

「そっか・・・」

正直拍子抜けした。

私の話はお世辞にも聞いていて気持ちの良いものではないはずだ。同じ話を百人にすれば百人が哀れみや同情の言葉を私に掛けるだろう。

それに比べて彼の言葉は非常に薄情なものに聞こえるかもしれない。

しかし私はそうは思わなかった。

上辺だけの同情よりも、言葉だけの哀れみよりも彼のその一言には多くの気持ちが込められていると私は感じた。

都合の良い解釈かもしれないが私は彼の一言には、私の話を聞き理解した上で、それら全てを許容すると、そんな思いが込められていると感じていた。

だって、そう言った彼の顔は・・・・・・・・柔らかなく微笑んでいたのだから。

頬を暖かいものが伝う。

それが涙だと気付くまで少し時間がかかってしまった。

人前で泣いたことなど今までであったらどうか。

いや、自分の記憶に今までそんなことは一度たりとも無かったはずだ。

涙を流したことさえも記憶に無い。

物心付いたときから王族として生きてきた私は、他人に弱みを見せることなどできない。

それ故に涙を流すなんてことはあってはならないのだ。

そんなことも考えながらも、しかし涙は止まることなく溢れてくる。

それでも私は、

「白

溢れる涙を拭おうともせず、

「なんですか？」

感情の赴くままに、

「私と」

気付けばこの言葉を、

「友達になってくれんか？」

口にしていた。

対して白は先ほどまでと同じ柔らかな微笑を浮かべ、

「よろこんで」

そう言って、私の手をとってくれた。

こうして、私は生まれてはじめての友達を得た。

第五話 狐と王女と（後書き）

アリカ王女は白の親友という枠に収まりました。

ヒロインはまだ未定です。

希望等ありましたらどうぞ。

感想ドシドシ待ってます。

第六話 狐、地の男と邂逅す（前書き）

更新遅れました・・・。

申し訳ないです。

今回いつもより少し長めです。

それではごっげ。

第六話 狐、地の男と邂逅す

「やー、魔法世界の食べ物おいしいねー」

目の前に並んだ様々な料理に舌鼓を打つ。

どれもこれも幻想郷ではお目にかかれない料理ばかりだ。

採譜を見たら見たことも聞いたことも無い料理ばかりが書かれていたためつつい興奮してしまい興味を引かれたものを片っ端から注文していったのだがこれならペロリと食べられそうだな。
でももうちょっと薄味のほうがいいかな。

「白さんって見た目のわりにたくさん食べるんですね・・・」

俺の目の前の席に腰掛けたタカミチ少年が何か信じられないなものを見る様な目をしている。

「そうかな？」

なんて言ってみるが、タカミチ少年の言う通りだろう。

なにせ今俺の前に並ぶ料理の量はおよそ五人前はあるのだから。

魔法世界に来てから食べ物がおいしい所為か今までより食欲が増してきた。

それに今では食べることが趣味のようになってる。実際メガロセ

ンブリアに来てからこの街にある店を食べ歩き、密かに順位を付けていたりする。

因みにこの店は今までで第三位と言ったところか。味付けが濃いところが減点対象。けど最近の若い人たちには濃い味付けの方が好まれるのかもしれないな。

まあこの順位はあくまで俺の好みの順位ってことで。それにわざわざ公表するつもりもないし。

「逆にタカミチとゼクトは小食だね。たくさん食べないと大きくなれないよ。ほら、これあげるから」

ひよいひよい、と一緒の卓に着いているタカミチとゼクトの皿に、厚く切られた肉を乗せる。

「ありがとうございます」

「ワシはいくら食べても成長することはないのじゃが……。ありがたく貰っておこう」

と、いうことで現在俺はタカミチ少年、ゼクトと共に昼食に街の飲食店へと来ている。

今日、俺は朝から街を一人でぶらぶらしていたのだが偶然二人と遭遇。丁度お昼にいい時間だったのでそのまま三人で飲食店へと来たわけだ。

「そういえば、ナギさん達大丈夫ですかね？」

「んー、大丈夫でしょ」

「そうじゃの。あの馬鹿のことは心配するだけ無駄じゃ」

「そうそう、今頃犯人捕まえてるんじゃないかな」

「・・・そうですね。そんな気がしてきました」

さて、ナギがどうか皆で言っていたが何の話しかというと、昨日ナギとアリカ様は二人で街へ買い物へと出かけていったのだが、その街で爆発事件が発生。その後ナギとアリカ様は帰ってくることは無く今に至る。と言うわけである。

その爆破事件だがガトウ達はナギかアリカ様を狙った『完全なる世界』の刺客が起こしたものと推測していた。

そしてそれが真実ならナギのことだからおそらく・・・いや、確実に首を突っ込んでいるだろう。

先ほど言ったように今頃刺客の隠れ家を見つけ出しそれを壊滅させているのではないだろうか。

「ナギのことだから今頃敵の本拠地を見つけ出して壊滅させてるんじゃないのかな」

と、なんの気無しに思ったことを口に出してみると。

「・・・無いとは言い切れんの」

「と言うかそんな気がしてきました・・・」

流石我等が赤き翼のリーダー。
皆から絶大な信頼を得ている
で。

悪い意味

「じゃあ食事も終わったことだし、そろそろ戻ろっか」

「は？」

「え？」

おや？なんだか二人が驚いている。どうしたんだろう？

「気のせいかの・・・。つい先程まで白の前には五人前の料理があったはずなのに何時の間にか全て無くなっているように見えるのだが」

「一体いつ食べたんですか？」

なるほど、つまり二人はまだ食べ終わってないと。

まったく、たった一人前しかないのに食べるの遅いぞ。
仕様が無い、

「食べるの手伝おっか？」

「その上まだ食べるのか（んですか）！？」

なんだかこの時間で二人の仲がよくなった気がする。

因みにあと三人前はいけます。

さて、食事を終えて俺達の宿泊先まで戻ってきましたら、

「あれ？アリカ様帰られてたんですか？」

「白か。うむ、たった今帰ったところじゃ」

なんと廊下でアリカ様と遭遇した。

そして珍しいことにアリカ様は笑みを浮かべていたのだ。

俺と二人で話しをするときでさえ笑う時は微笑み程度で今のような笑みは稀である（ゼクトとタカミチなんて俺の後ろで呆然としている）。

だのに今、誰に見られるかも分からないこの廊下で、アリカ様は笑っている。

つまりこれの意味するところは

「何かいいことでもあったんですか？」

今、アリカ様は最高に機嫌がいいということだ。

「うむ。色々あったの。そうじゃ、ナギのやつに礼を言っておいてくれぬか？楽しかったとな」

「はい。分かりました」

「よろしく頼む。ではまたの、白」

「ええ、また会いましょう、アリカ様」

詳しく聞けなかったがやはりナギと何かあったようだ。
何があったか後でナギに聞いてみよう。

「ああ。後ろの二人も調査ご苦労じゃ、偶にはしっかり休むのじゃぞ」

去り際にゼクトとタカミチに労いの言葉を掛けるアリカ様。素敵な微笑のおまけ付きで。

いや驚いた。アリカ様が一部の人間（俺やナギなど）以外に自分から話しかけるなんて。

その事実にはゼクトとタカミチ（少し頬が赤くなっている）は口を開けて呆然としているが、アリカ様　　つまり王女様に何も言葉を返さないのは些か失礼ではないのだろうか。

まあ最高に機嫌がいいアリカ様は気にしていないみたいだが。

「ほら二人ともいつまで呆けてるの？早く部屋に帰ろうよ」

「・・・・・・・・」

返事が無い。ただの屍の・・・もとい放心状態のようだ。確かに珍しい光景ではあったがここまで驚くほどかな？
アリカ様だって人間なんだから笑うときは笑うだろうに。

しかし先ほどのアリカ様の笑顔可愛らしかったなあ。

普段が無表情なだけに偶に見せるああいう表情にはグッと来るね。
あんな女性に慕われているなんてナギも幸せものだねえ。

なんて事を思いながら、今だ微動だにしない二人を引きずって俺は部屋へと戻るのだった。

「ただいまー。ナギー、さっきアリカ様にあっただけどナギにお礼言つといてってさ。楽しかったーって・・・、何かあったの？」

俺達が部屋に入るとそこには納得がいかなそうな表情の詠春（なぜかプルプル震えている）、我関せずとソファに座っているラカン、口元を押さえて「くっくっ」と愉快そう笑うアル、そして自慢げに「な？」なんて言っているナギがいた。

どういう状況だ？

「それにちゃんと証拠も見つけてきたぜ」

「な・・・それは・・・！」

状況を把握できていない俺達三人を措いて話しは進んでいく。

いや、誰か状況説明してくれない？

あの時ナギが見つつけてきたのはメガロメセンブリアの執政官とやらが『完全なる世界』とつながりがあるということの証拠なのだそうだ。

なんでもこの証拠とやらがあればこの戦争を終わらせられるらしい。で、只今その証拠とやらをマクギル元老院議員の下に届けに来ている。

法務官を呼び、件の執政官の弾劾をするそうなの。

「マクギル元老院議員」

「御苦労、証拠品はオリジナルだろうか？」

マクギル元老院議員の下に証拠を届けに来たのはガトウ、ナギ、俺の三人だけだ。

あとのメンバーは周囲の警備に回っている。

「ハ。・・・法務官はまだいらっしやいませんか」

「法務官は・・・来られぬこととなった」

「・・・ハ・・・？」

ん？

「・・・あれから少し考えたのだがね、せつかくの勝ち戦だ。ここに来て・・・慌てて水を差すのもやはりどうかと思ってるね」

「ハア」

ふーん。

「いや・・・その・・・私の意見ではない、そう考える者も多いとい

うことだ。時期が悪い、時を待つのだ。君達も無念だろうが今回は手を引いてだな・・・」

なるほどね。さっきから目の前に居るモノに違和感を感じていたんだけど、そういうことが。

「待ちな」

ナギも違和感を感じたのか二人の会話に待ったを掛ける。
そして

「あんたマクギル議員じゃねえな。何もんだ？」

ポウンツ！！

「ぶ！？」

魔法を放ち目の前に居る男の頭を燃やす。

おー、燃えてる燃えてる。

「ちよーーーーっ！ナギおまつ・・・なにやってんだよっ！元老院議

員の頭いきなり燃やしておまつ!?!」

ナギの突然の行動に慌てふためくガトウ。
ということは、どうやらガトウは気付いてないようだ。

「大丈夫だってガトウ。ほら」

「何っ!」

轟。と突如として一陣の風が吹き今までマクギル議員モドキを包んでいた炎が消える。

「よくわかったね千の呪文の男、そして幻想を統べる者。こんな簡単に見破られるとはもう少し研究が必要なようだ」

するとそこには白髪の青年が立っていた。その佇まい、そして纏う秀囲気から瞬時に理解する。

へえ、なかなかできるみたいだねえ。

「本物のマクギル元老院議員は残念ながら既にメガロ湾の底だよ」

「!?!? てめえっ!」

白髪青年の言葉に激昂したナギが跳びかかる。

つてナギ！後先考えずにそんなことすると・・・！

フツと、青年に跳びかかったナギを挟み込むように新たな敵が二人現れる。

その二人から魔力の高まりを感じる。

全く、ナギの猪ぶりにもこまったものだよ・・・。

スキマを開き、そこからナギを引きずり出す。

フードの部分を掴んだため「ぐえ」とナギが苦しげに呻き声をあげる。

ドン！！！！

ナギが一瞬前に居た場所で巨大な爆発が起きる。

流石にあれに巻き込まれていたらいくらナギでも只ではすまなかつただろう。

「くう……。強えぞやつら、気を付けろ！」

目の前で尻餅をついているナギが涙目で注意を促す。いまいち格好

がつかない……。

その光景を見て目の前の白髪青年はフツと微笑する。

「ああ！？てめ、笑いやがったな！上等だ、やってやるぜ！」

「ふっ、失礼。いや君達と戦うのも魅力的な提案だけど、君達は少しやりすぎたんだよ。だから悪いけど退場してもらおうことにするよ」

そう言って白髪青年はまるで電話で会話をするかのように手を耳元へ持ってきていき

「わ、わしだ！マクギル議員だ……うむ、反逆者だッ！……ああ・うむ・確かだ、奴らに暗殺されかけたっ……は、早く救援を頼むッ。スプリングフィールド、ヤクモ、ヴァンデンバーグ。奴らは帝国のスパイだった！奴らの仲間もだ！軍に連絡をッ」

なんて、マクギル議員の声で（おそらく警備の者に）連絡をした。

「げ」

「やられたな」

白髪青年の見事な計略によって窮地に立たされた俺達。

正直見事な一手だ。これで俺達はもとより敵の帝国もちろん、連合からも敵と見做されることになった。つまり、俺達に味方はいなくなったというわけだ。

「おおお！」

何を血迷ったのかなギが白髪少年に跳びかかるうとする。それじゃさっきの二の舞だろうに……。

ナギが青年に跳びかかる為に大地を蹴るその足元にスキマを開く。

瞬間に

「おおおおおおおおおー!?!?!」

おおー…… おおー…… おおー……

急に足場をなくしたナギは重力に逆らえず自由落下。行き先は外に広がる湖にしておいた。

ついでにガトウの足元にもスキマを開く。

「なんで俺までええええええええええー!?!」

ええー…… ええー…… ええー……

.....

沈黙。
シーン

白髪青年は目の前で起こったことに呆然としている。
意外と表情豊かだな。

「.....どういつつもりだい？」

暫くして我に返った白髪青年。

どうやら今の俺の行動に何か裏があると勘繰っているようだ。

「特に他意はないよ。ただナギが突っ込んで怪我しないようにする
ウチのバカ
ためにやっただけ」

ガトウに関してはついでに、なんとなくやっちゃったけど。

「だけど折角静かになったから少し話しをしようか」

「.....話し？」

あまりにも場違いな提案に、きよんとした表情になる白髪青年。
やはり意外と表情が豊かだ。

「そ。じゃあまずは自己紹介。知ってると思うけど俺は八雲 白。よろしく」

「僕は・・・そうだね、フェイト アーウェルンクスと名乗っておこうか」

「ってことは偽名かい？」

「まあね。本名は嫌いなんだ」

偽名を名乗りその上自分ではらしますか・・・まあ気にしないけどね。

「それじゃあフェイト。一つ質問してもいいかな？」

「どうぞ。答えられる範囲でなら答えよう」

「フェイトたちはなんで戦争を長引かせるようなことをするんだい？君たちは武器商人や傭兵って訳じゃないんだろっ？」

「.....」

その質問にフェイトは黙ってしまっ。

やっぱりいきなりそちらさんの目的を聞くなんて突っ込みすぎただらうか。

しかしぶつちやけ武器商人でも傭兵でもない者達が戦争を長引きせる利点が思い付かないのだ。
ということ聞いてみることにしたのだが……。

暫く黙したままのフェイトだったが、唐突にその口を開いた。

「もしも」

「ん？」

「もしも僕たちがしていることが、この世界の人間を救うことになるとしたら、君はどうする？」

この世界の人間を救うとは、また大きく出たものだ。

戦争を長引かせることがどうして人間を救うことに結びつくのか分からないがフェイトのこの物言い、嘘をついているようには見えない。

「人間を救う……ねえ」

「そう。詳しくは言えないけどね。……それで、それを知った君はどうする？今までのように僕たちの邪魔をするのか。それとも……僕たちとともに往くのか」

人間を救う……か。

確かにそれはスバラシイことだろう。今は戦争を長引かせて無駄な

犠牲を増やしているが、最終的には（どうやるかは知らないが）それ意外のモノを救うと言うのだから。

だが、しかし、

「君たちと往くことはできない」

「なぜだい？まさかその過程で失われる命を許容できないって言うのかい？」

「いや、別にそういうことじゃなくてね」

ではなぜ？とその理由を尋ねてくるフェイト。

俺がフェイト達と往くことができない理由とは

「俺が連合に所属し戦争に参加してるのは、ただナギたちが連合にいたから。ただそれだけ」

「？」

「つまり、俺が戦うのはナギたちを、俺が気に入っている人たちを守るため。その他はどうなったって・・・いって訳じゃないけど、優先順位は低いつてこと」

もちろん手が空いていたらその他の人たちも守ってあげるが、俺が

気に入っている人たちの内の一人とその他百人が天秤に掛けられたら、俺は寸分も迷わず一を取る。そういうことだ。

「なるほどね。・・・全く、立派な魔法使い候補たちと違って君みたいな人は非常にやりにくいよ」
正義馬鹿

そう言っつて肩を竦めるフェイト。
しかしその表情はどこか嬉しそうだった。

「君は面白いね。君と仲間になれなくて残念だよ」

「そう言っつてもらえると嬉しいね」

「なら仲間になってくれるかい？」

「それは無理だ」

「だろうね。じゃあ、そろそろお開きにしようか。いい加減警備の人間が来るころだろうしね」

「そうだね。でも、その前に・・・」

薄く微笑む。

先ほどからうずうずしていたのだ。目の前の、魔法世界に来て初めての強敵という存在に。

全く、幻想郷にいたころに萃香や勇儀を戦闘狂だの何だのと罵って

いたのに自分も大概だったらしい。

「ちょっと遊んでいかないかい？」

そう言つて、挑発の意を込めて殺気をぶつけてみる。

だがフェイトはやれやれ、と涼しい顔をしている。

「穏やかだと思つたら急に激しくなる。君は分からない人だね」

まあ、化かすのは狐の本分ですから。

「でも僕らもそんなに時間があるわけじゃないから少しだけだよ」

その言葉が終わると同時に左右に現れる男たち。

先ほどナギを奇襲したあの二人だ。

今回も二人同時の奇襲攻撃。

咄嗟に足元にスキマを開く。

その刹那。

ドンー！！！！

巨大な爆発が起きる、がそこに俺はいない。

スキマを使いその攻撃を回避した俺は同じくスキマを使い片方の男の背後に音も無く現れる。

そしてその無防備な背中を思い切り、只力任せに殴りつける。

ドゴン！！

おおよそ人体から発せられたモノとは思えない音。

殴られた男はもう一人の男を巻き込み、

ズガァン！！！！

そのまま壁へと激突した。

殴ったときの感触からして脊椎が何個か砕けているだろう。

もう一人の男は分からないが、殴られた男は生死はわからないがとりあえずもう動くことはできないだろう。

爆発で舞い上がっていた煙が晴れる。

すると俺の全方位を囲むように石の槍が展開されていた。おそらくフェイトの魔法だろう。

そして放たれる石の槍。

しかし俺は慌てることなく自らを包み込むように幾つものスキマを開き石槍を飲み込んでいく。

これにはフェイトも驚いたのか、無数に開くスキマの隙間（ギャグ

ではない）から見たその表情は目を見開いて驚いていた。

しかしこれで終わりではない。

今開いたスキマは入り口。

では出口はどこか。

それは今から開くのだ。

では、どこに開くのか。

それはもちろん……。

「ほら、避けないと死んじゃうよ？」

^{フェイト}
敵の真上だ。

無数の石の槍がその頭上からフェイトに襲い掛かる。
が、

ガガガガガガガガガガガガガガガガガガ！！！！

確実にフェイトを貫くと思われたそれらは、しかしフェイトに触れる直前に何かによって弾かれた。

魔法障壁ってやつかな。しかもあれだけの魔法を防ぎきるモノを常時展開してるとはねえ。

「やっぱり君は出鱈目だね。確実に獲ったと思ったのにあっさりと

返してくるなんてね」

「いや、フェイトの魔法障壁も反則でしょ」

お互いの健闘を讃え（？）合う。

まあ、兎にも角にもフェイトは強い。おそらくその強さはナギやジャックに匹敵するほどだろう。

ナギとジャックとも戦ったことはあるが、それは力比べや、修行の中の手合わせといったものでもちろん命を賭けて闘うものではない。その闘いの中では『本気』は出せても『全力』を出す事ができない。なぜなら、俺が全力を出してしまうといくらナギやジャックであろうとも無事ではすまないからだ。ということでも全力を出せない俺は若干のストレスが溜まっていたわけだ。

だから、今全力を出せるこの闘いはとてつもなく楽しい。自然と笑みが零れてしまうほどに。

「やー、楽しいねえ」

「そうだね。でも、それももうお仕舞いみたいだ」

言われて気が付いた。

この部屋に無数の気配が近づいてきていることに。どうやら漸く警備の者たちがやってきたようだ。

「ほら、早く逃げた方がいいんじゃないのかい？」

「……ちよつと思っただけど。今俺とフェイトが闘つてるところを警備の人たちに見せれば誤解解けるんじゃないの？」

「……そうなるかもしれないね」

なんてフェイトは言ったがこのまま何もせず逃げるよりはいいだろう。

「じゃあ、もう少しだけ付き合ってもらおうか」

「やれやれ、君がこれほどまでに厄介な相手とは思わなかったよ。でも君たちにはここで退場してもらわなければいけないんだ」

フェイトから魔力の高まりを感じる、それもかなり大きな、だ。おそらく何かしらの大呪文を使うつもりだろう。

「やらせると思うかい？」

フェイトの詠唱を止めるため、フェイトへと飛び掛ろうとする。が、背後に突如気配が感じられた。

振り向き様に相手を確認すると、先ほど殴り飛ばした男に巻き込まれて吹っ飛んでいった男だった。

男の拳が俺の頭に迫る、俺はそれを首を傾けるといふ最低限の動作でそれを回避。続いて無防備に晒しだされたその腹部を全力で、搦り上げるように殴る。所謂アツパー。

ズドン！！

それを受けた男は弾丸のように天井に向かって飛んでいき、

ガァン！！！！

天井に突き刺さった。

この間僅か二秒。しかしその短時間でもフェイトにとっては十分だったらしく、魔法の詠唱を終えていた。

「冥府の石柱」

そして放たれる大呪文。

無数の巨大な石の柱がこの建物ごと俺を押し潰す。

ズズウ・・・ン！！！！

・ ・ ・ ・ ・

「やられたなあ・・・」

辺り一面を瓦礫が埋め尽くす元室内

今は夜空が見える

素敵な露台

に佇み一人ごちる。

フェイトの魔法をいつものようにスキマを使って回避したのだが、スキマから出てみるとフェイトは既に逃げた後だった。

これで俺達紅き翼は反逆者として連合を追われることになったわけだ。

まあ、連合を追われようが別にどうでもいいのだが、一つだけ気がかりなことが、

「アリカ様、大丈夫かな・・・」

そう、アリカ様のことだ。

今アリカ様は単身で帝国第三皇女に接触をしに行っている。

目的はこの戦争を停戦させるため。

そしてフェイトたちの目的は戦争を長引かせること。つまりフェイトたちにとってアリカ様の行動は彼らの妨げにしかならないのだ。つまりフェイトたちはアリカ様に何かしらの妨害をしてくる可能性が非常に高いのだ。

「ま、ここで考えててもしかたない、か。とりあえずナギたちと合流しますか」

スキマを使いナギたちの下へ移動する。

ナギたちと合流し一刻も早くアリカ様の下へ行く、それが最善。

アリカ様は王族だからフェイトたちが直接手を下さない限り、手荒なまねはされないだろうが、安心はできない。

そう思い俺はナギたちの下へと急いだ。

……って言ってもスキマを使っただから一瞬なんだけどね。

因みにナギたちに合流して早々ナギとガトウにおもいきり殴られた。

スキマに落とされたことの仕返しとか言っただけ。

能力使って力を減らしても良かったんだけど、ここはおとなしく殴られることにしといた。

超痛かった……………。

第六話 狐、地の男と邂逅す（後書き）

読んで下さった皆様に感謝を。

感想なぞ下さると嬉しいです。

第七話 狐、御転婆姫と会う

フエイトたちの罠に嵌められて英雄から一転、反逆者となった俺たち赤き翼。

帝国からも連合からも追われることとなった俺達は辺境を転戦していた。

そしてある日、ガトウが『夜の迷宮』という古代遺跡群にアリカ様が敵組織によって幽閉されているという情報を手に入れた。

そして俺達は直ぐ様アリカ姫を救出するために、夜の迷宮とやらに向かったのだった。

「あそこに姫さんが捕まってるんだな？」

「ああ、間違いない」

夜の迷宮上空。眼下に並ぶ古めかしい建物の一つを見据え、ナギがガトウに確認をとる。
ガトウはそれを肯定。どうやらあの建物にアリカ様が居ることは間違いないようだ。

「よし！それじゃ行くぜ！」

アリカ様の居場所を確認するや否や、ナギが突撃しようとする。

全く、相変わらずのイノシシぶりだねえナギも。

そんなナギを、

「まあ待ちなつて」

「ぐえ！？」

首根っこを掴み引き止める。

何か前にもこんな事があつたような……。

「っつ、何すんだよ白！」

「だから待ちなつて。ねえガトウ、アリカ様があの建物の中の辺り

にいるのかって分かる？」

「いや、そこまでは分からないな」

「じゃあ誰かが潜入してアリカ様の居場所を確認したほうがいいでしょ。闇雲に突入した場合、もしもアリカ様の傍に敵がいたらアリカ様に危険が及ぶことになるよ」

そう、突入したはいいが肝心のアリカ様を見つけるのに手間取ってしまい、アリカ様が人質にでも取られたら話にならない。

「・・・わかった」

ナギもアリカ様が危険に晒されるのは本位ではないためおとなしく聞き分けてくれた。

「では、潜入は白に任せてもよろしいですか？」

「もちろん」

と言うかアルに言われなくてももと俺が行くつもりだった。スキマを使って移動できる俺は潜入には打って付けだ。スキマだけじゃなくて他にも色々と便利な能力も使えるし。

「じゃあ、行ってくるよ」

スキマを開き、飛び込む。

そして飛び出せばそこはもう建物の中だ。

「さて、アリカ様はどこかな？」

早速内部の散策を開始しようとして、

「ん？そういえばこういうときに便利な能力があったなあ」

ふとアリカ様を見つけるのにあつらえ向きな能力があったことを思い出す。

『動く物（生き物）の気配を探る程度の能力』

博麗神社の近くに住む光の三妖精の内の一人（匹？）が使用する能力である。

その能力を使い建物内の気配を探る。

「ん〜・・・、おっ？」

早くも五つの気配を察知する。

その五つの気配は現在、二、三と二つの固まりに分かれている。

その内の二つの気配の片方、これはアリカ様の気配だな。
するともう一つの気配はアリカ様と一緒に捕らえられている帝国第
三皇女ものだろう。

で、残りの三つはおそらくアリカ様たちを監視する奴らだろう。
そして二つの固まりが離れているところをみて、見張りはアリカ様
たちとは別室にいると推測。

さらに能力の範囲を広げ、屋敷全体の気配を探る。

「ひー、ふー、みー、よー、・・・七つ、か」

そのほかにおそらく屋敷内を巡回しているであろう気配を七つ察知
する。

しかしたった十名で警備しているとは些か無用心ではないだろうか。
ここが襲撃されるはずはないと樂觀しているのか、それとも戦争の
影響で此方に回す人員がいないのか。

まあどちらにしても俺達にしたら好都合である。

「さて、さっさと片付けますか」

敵の位置は分かっているのだから後は排除するだけである。

スキマを使い敵の背後に現れ、妖力を纏った手刀で首を刈り取る。

ゴトリ

胴と離れた頭は重力に逆らわず床に転がった。
遅れて、頭が無くなった首から鮮血が、まるで噴水のように噴出す。
そしてゆっくりと、命をなくしたその身体は地に倒れ伏す。

ドサリ

背後からの情けも容赦もない一撃。

当然だ。これは遊びではないのだから。

もしもここで情けをかけて命を奪わなかったら、いつか再び何処かで矛を交えるときが来るかもしれない。

そしてその時に今度は此方が命を奪われる可能性がある。俺だけではなく仲間の誰かが命を奪われるかもしれない。

もちろん俺達はいいつ等のような一般の魔法使いなんかとは比べ物にならないほどの力を持っている。闘ったとしても負けるなんて事はまず無いだろう。それが何人集まるうが、今命を奪ったコイツ一人が居ようが居まいが変わりは無いだろう。

しかし、この世に絶対は無い。

偶々。

偶然。

万が一。

コイツが放った魔法が、流れ弾となり、俺を、仲間を殺す可能性は絶対に無いとは言い切れないのだ。

だからコイツは此処で殺しておく。

情けを掛けず、容赦をせず。

大切なモノを守るためなら俺は修羅とも羅刹ともなるう。

「なーんてね」

ちよつと感傷に浸ってしまった。

第一、今更ヒトを一人殺したところで傷つくような心は持っていない。

三千年生きてきた中で、これよりももっと残酷で残忍で残虐なことをしたこともある。

そんな奴の心がヒトを傷つけて傷つくようなキレイな心であるはずがない。

「あと九人。とつとと終わらせようか」

先ほどと同じ様に残りの九人も始末していく。

およそ一分後、建物内の生き物の気配は俺を除き二つのみとなった。

「アリカ」

私とテオドラがここに幽閉されてから一月ほど経っただろうか。しかし私たちが王族だからか特に手荒な扱いを受けることは無かった。

心配なのはナギや白たち赤き翼のメンバーだ。

私たちが捕らえられる前に聞かされた話によると、彼らは今連合の反逆者として追われる身となっている様だった。

彼らが簡単に捕まるとは思わないが、しかしもうこの世界に彼らに味方はいないのだ。いずれ逃げ切れなくなるかもしれない。

どんどん考えが悪い方へと向かっていく。ここに幽閉されてから外の情報は全く手に入らないのだから不安は募る一方である。

「アリカ、大丈夫かえ？」

どうやら不安が表情に出ていたようだ。

私の顔を覗き込むテオドラが心配げな面持ちで尋ねてくる。

「大丈夫じゃ、テオドラ。何、直ぐに赤き翼が来るじゃろう」

そうだ。あの連中が捕まるはずが無い。

何せ彼らの力は間違いなくこの世界最強。
特にナギ、白、筋肉馬鹿（名前は知らん）の三人は群を抜いている
と聞く。

この三人が揃えば連合や帝国の一軍隊などでは相手にはなるまい。

だから私は安心して待っていれば良い。

そうすれば直ぐにでも

ドガンー！！！！

突如壁の一角が吹き飛び、日の光が差し込む。

その光を背に受けその穴から現れたのは

「よお、来たぜ。 姫さん」

いつもと変わらず不敵な笑みを湛えた、赤毛の少年。
それに私は

「遅いぞ、我が騎士」

同じく不敵な態度で、そう返した。

く白く

建物内の掃除が終わってから俺は一度ナギ達と合流することにした。そのままアリカ様たちを救出することはできたのだが、やっぱりお^ア姫様^{リカ様}を助けるのは騎士^{ナキ}じゃないとね。ということ、アリカ様の位置と敵を排除した旨を伝えるとナギは一目散にアリカ様の下へと飛んでいった。そして、

ドガアン!!!!

アリカ様が捕らえられている部屋に魔法で穴を開けて突撃。

ちよっ、おま!?

もし壁の近くにアリカ様がいたらどうするんだよ!?

スキマを使いアリカ様のいる部屋へ。

どうやらアリカ様は壁から離れていたようで怪我は無いようだ。

「やー、よかったよかった」

「ひうつ！？だ、誰じゃ！？」

ん？どこからか声が聞こえる。
辺りを見回しても声の主は見つからない。

「じじじや、じじー！」

声はすれども姿は見えぬ。
なんと面妖な……。

「ええい！下じゃ！」

「ん？……おお！これは失礼しました」

そういえば俺は今浮いてるんだった。
下を見てみると、そこには角の生えた女の子がいた。
おそらくこの子が帝国第三皇女のテオドラ様だろう。

皇女様に頭上から話しかけるのは失礼なので地面に降りる。

「はじめまして皇女様。八雲 白と申します」

「童はテオドラじゃ、テオでよいぞ。それとそんなに堅苦しくなくて良い、楽に話してくれ」

「そうですか？では遠慮なく」

テオは帝国の皇女様だが、アリカ様とは違いなぜか敬語を使わなくてもいい気がした。
その外見ゆえだろうか……。

「うむ。それでよい。……それにしても主があのか『銀の魔王』か」

「不本意ながらそう呼ばれてるね」

「まさかこんな容姿をしておったとは……。もつと筋骨隆々な巨漢かと思っておったぞ」

テオよ……。こんな容姿とはどんな容姿だか聞かせてもらえないだろうか。あと筋骨隆々な巨漢って、それジャックのことじゃないか？

「……のう。ちと頼みがあるのじゃが……」

「？ はい。なんですか？」

頼みとな？あつたばかりで一体どんな頼みがあるのやら。
ん？なんか前にもこんなことが無かったか？既視感ってやつだろう
か。

「そ、その尻尾を触らせてくれんかの？」

「……………どうぞ」

既視感じゃなかったよ……。確かアリカ様と初めて会ったときも
こんなことがあつたぞ。

あの時は驚いてまともな返事ができなかったが今回はなんとか返事
をすることができた。

くるりとテオに背を向け尻尾を差し出す。

「うむ。では……………、てい！」

ぽすっ

おお！帝国の皇女様はなかなか大胆だな。いきなり尻尾めがけて飛
び込むなんてね。

「おお……。もふもふじゃあ〜」

俺の尻尾に包まれ幸せそうな声を上げるテオ。
て言うか、もふもふってなんだ？

「はあ〜・・・」

もふもふ・・・

「はあ〜あ〜・・・」

もふもふもふもふ・・・

幸せそうな表情で俺の尻尾に包まれているテオ。
それを見ていると、なんか、こっぴどと悪戯心が湧いてくる・・・。

ぎゅむっ

「!?!? つ〜〜〜!!」

その悪戯心に逆らえず、尻尾に力を込めてテオを圧迫してみる。
するっ、

「~~~~!!」 じたばたジタバタ!

銀色の毛玉から手足が生えじたばたと藻掻いているという奇妙な光景が出来上がった。

軽くホラーな光景だなあ

なんて考えながらも尻尾の力は緩めない。だって何か面白いから。

「~~~~!!・・・がぶ!」

「あだ!?!」

尻尾に鋭い痛みが奔る。

どうやらテオに噛まれたようだ。

「何をするのじゃ!危うく窒息するところじゃったぞ!」

「いやー、ごめんごめん。つい・・・」

「つい、とはなんじゃついとは!主はついでヒトを窒息死させるのか!」

物凄い剣幕で詰め寄られる。

テオを見ると顔は赤くなり肩で息をしている。
そして目尻には涙が溜まっていた。

本当に苦しかったらしい。加減はしたはずなんだけど……。

「ホント、ごめんなさい。あ、そろそろ移動するみたいだよ」

ちゃんと謝った後、強引に話題を変えようとするが、

「待て。話しはまだ終わっとらんぞ！」

しかし回り込まれてしまった。

「なら話しは移動しながら聞くから、ね」

ひょいっとテオを抱える。

これから飛んで紅き翼の隠れ家に移動するため自分で飛べないテオを抱えて飛ぶ必要があるのだ。
決してやましいことなど無い。

「むう、仕方ないのじゃ。ならば移動しながらたっぷりと話そうではないか」

テオもそれが分かっているのか大人しく俺に抱かれている。

「よし。あ、言い忘れたけど移動するとき結構飛ばすから、喋つてるとした噛むかもよ?」

「何!?それはどういつ~~~~!!!?」

俺の突然の発進。急加速に言葉を詰らせるテオ。

こうして俺は隠れ家に着くまでテオのお小言を退けることに成功した。

フッフ、我ながら中々の策士ではないか。

隠れ家に着いた後に、思いっきりテオに殴られたのは言うまでもな

い
・
・
・
。

超
痛
か
っ
た
・
・
・
。

第七話 狐、御転婆姫と会う（後書き）

読んで下さった方々に感謝を。

ご意見、感想等お待ちしております。

閑話 第一回、白の尻尾争奪戦!?(前書き)

短いです。

最終決戦の前に一話挟んでみました。
相変わらずアリカがおかしい・・・。

それでは、どつど。

閑話 第一回、白の尻尾争奪戦！？

アリカ様とテオを助けた後、俺たちは赤き翼のメンバーにアリカ様、そしてテオの十人で世界を救うべく行動を開始した。

まあやることといったら敵の組織を片っ端から潰していくだけなんだけどね。

敵の判別などは赤き翼の頭脳労働担当（ゼクトやタカミチ、アル）とアリカ様やテオに任せる。

そして残りの肉体労働担当が敵だと分かった奴らをボコっていく。とまあ、やることは至って単純である。

だが、毎日毎日二十四時間ずっとこんなことをしているわけではない。俺たちだって人間（俺は違うけど）である。当然疲れは溜まってくる。

そんな訳で、俺たちはお互いに休息をとりながらこの作業を行っているわけである。

そして今日、俺は一日休みを貰っている。

実は肉体労働担当の中で一番働いているのが俺だったりする。

まあスキマを使って敵組織に進入 能力使って建物破壊ってな感じで俺がやるのが一番効率がいいからなんだけど。

で、そんな俺を見かねたアリカ様が休日を獲得するように言ってきたのが先日のことである。

「はあ〜・・・」もふもふ・・・

「・・・・・・・・」

尻尾がむずむずする・・・。

おかしい。

俺は今日、確か休息日のはずである。

本当ならふかふかのベッドで一日中惰眠を貪っているはずであったが、今俺は（クッションを尻に敷いてはいるが）床に座らされている。

「はあくあく・・・・・・・・」もふもふもふ・・・

「・・・・・・・・」

そして俺の尻尾から生える二本の足。まあテオなんだけどね。

「ねえ、テオ」

「んっ、なんじゃ白っ？」

「なんで俺の尻尾に埋まってるのかな？」

「良いではないかっ。減るものでもあるまいにっ」

いや、良いんだけどね。

しかしその顔は皇族としてどうなのだろうか……。尻尾から出てきたテオの顔は、それはまあひどいものだった。頬は弛緩し尻尾が垂れ、口の端からは涎が垂れている。

ちょっと。人の尻尾に涎つけてないよね？

「でもそんなに気持ち良いかなあ？この尻」

「気持ち良い！気持ち良いのじゃ！！この温もり！肌触り！何処を取ってもこれ以上のものなど無いほどじゃ！！」

「おおぅ……」

物凄い剣幕で詰め寄ってくるテオ。

しかしここまで賞賛してもらえることに喜んでいいのやら……。

「こんな尻尾ならいくらでもどうぞ」

「こんな、などと卑下するでない。もっと誇ってもいいくらいじゃぞ」

そして再び尻尾に埋もれるテオ。

まあ気に入ってもらえているならなによりだ。

それから暫く、テオは俺の尻尾に包まれて、俺は只座っているだけで退屈なので本を読みながらまったりしている。

ガチャ

「白、居るか？」

アリカ様がいらっしやった。

「はい。居ますよ、アリカ様ー」

「おお、居ったか。少し頼みたいことが・・・、何をしておるのじや、テオドラ？」

部屋に入ってきたときは機嫌の良さそうな声色だったが、俺の尻尾に埋もれているテオを認めてから段々と暗いものになっていく。

「何といわれてもの、見て分からんかの？」

「白・・・尻尾に・・・埋もれている様に・・・見えるの」

なんか、アリカ様が怖い・・・。

気のせいだろうか、その背に何か・・・黒いモノを纏っているよう

な・・・。

「なんじゃ。分かっているではないか」

「そうか・・・。ではそこを退いてくれぬか？」

「何故退かねばならぬのじゃ？」

「私と白は無二の親友でな。今日は白が休みということとで久方振りに二人で話しをと思つての。そこに第三者が入るといふのは些か無礼とは思わぬか？」

「妾とて白の友じゃぞ？」

「たとえ友であつても、なつてまだ数週間のそれと私と白のモノを同様にして貰いたくはないな」

二人の間に火花が散っている・・・気がする。

それにしても、何なのだろうかこの状況は・・・。

一見一人の男を取り合う女たちの争いに見えなくも無いが、その実取り合つているのは（恐らく）俺の尻尾だ。

前者ならばまるで物語に出てくるような修羅場と言つ奴であろうが、これではいまいちシリアスに成りきらない。

そういえば以前にも今と同じような状況になつたことがあつたよう
な・・・。

確かあれは紅魔館行つたときだつたか、その時に俺の尻尾を取り合

つたレミリアとフランが姉妹喧嘩

これだけ聞くと少女

たちがお互いにポカポカ叩き合う可愛らしい風景を想像するかもしれないがその喧嘩のせいで紅魔館の一室が廃墟と化したと言っておく
をしたことがあつたなあ。

そういえばそのときパチユリーに

「吸血鬼さえ魅了するなんて、貴方の尻尾は正に魔性の尻尾ね」

なんて言われたっけ。

魔性の尻尾か・・・今のこの状況を見ていると強ち間違っていないのかもしれない。

なぜなら

「赤き翼のリーダーであるナギが私に翼を預けると言ったのだ。ではそのメンバーである白の尻尾は私に預けられているも同然じゃ！」

「いやいやいや！？その理屈は可笑しいじゃろう！」

こんな風に、なんだかアリカ様が普段からは考えられないような状態になっっているからである。

そしてアリカ様。俺もその理屈には無理がある・・・というか無理しかないと思いますよ。

なんて思っている間にもアリカ様とテオの争いは激しさを増していく。

女三人寄れば姦しいとは言うが、アリカ様とテオならば二人でも十分なようだ。

何はともあれ、アリカ様が楽しそうで何よりだ。

同じ王族のと言う一般とはかけ離れた立場であるテオはアリカ様のいい友人になってくれたようだ。

アリカ様にとって二人目の。同じ女性としては初めての友人だ。

ふと二人の方を見る。

今まで言い争っていた・・・いや、まだ言い争ってはいるが二人は笑顔を浮かべている。

そういえばテオも皇族なのだ。アリカ様と同じように友人など居らず、ただっ広い王宮にずっと一人だったのだろう。

こうして誰かと騒いだことなど今まで無かったに違いない。

アリカ様とテオの出会い、アリカ様だけでなくテオにとっても良いものになったようだ。

「お主にはナギが居るのじゃから白は妾が貰っても良いではないか
」！

「それとこれとは話しが別じゃ！」

「別なものか！男を二人も侍らせてどうするつもりじゃ！」

「侍らせるなど・・・！人聞きの悪いことを言うでない！」

喧々譁々。

今だ収まらぬ二人の言い争いはさらに激しさを増していく。
なんだか話の内容がおかしな方向へと進み始めたぞ・・・。

そろそろ止めたほうがいいかな？

「はいはい。アリカ様もテオもその辺にしときましょう」

ぱんぱん、と手を叩きながら二人の間に割って入る。

「む、白か。止めるでない、私は今テオと・・・なんで言い争って
おったのじゃ？」

「むゝ・・・何でじゃったかの？」

・・・まあいいか。

それだけ二人が話して夢中になっていたということだろう。
そして何気にアリカ様のテオの呼び方が変わっている。テオドラか
らテオに。

この短時間で随分と仲良くなったようだ。

「まあまあ。ところでお二人ともお腹空いてませんか？良かったら何か作りますよ？」

とりあえず話しの流れを変えるため、そう提案してみる。
ちよつどお昼時だしね。

「何！？それは本当か白！ならば妾はオムライスがいいのじゃ！」

実は俺、最近料理を始めたのだが、それが中々好評だったりする。食べ歩きを趣味としていた俺は赤き翼が連合から追われることとなつて一番困つたことが外食ができなくなったことだつた。今まで食べていた美味しい物が食べれなくなってしまった……。そして俺は思つたのだ。外食ができないならば自分で作るしかない。

と。

そうして始めた料理であるが、ある程度腕が上がつたところで皆に作つた料理を振舞つてみたところ、中々好評だつたのだ。それから時々、気が向いたときだけ皆に料理を振舞つていた。

「オムライス、ね。アリカ様は何が食べたいですか？」

「ふむ……。白が作るものはどれも美味じゃからの。何でも良いぞ」

何でもいいが一番困るんだけどな……。

「わかりました。ではオムライスと適当に何品か作りますね」

「よし！では白すぐに行くのじゃ。妾はお腹が空いたのじゃ！」

嬉々とした様子でテオが俺の手を引き、炊事場へと導く。俺は苦笑

しながらそれに従い。その後ろをアリカ様が微笑を湛え着いていく。

これは今だ終わらぬ戦いの中の、穏やかな一日の一幕。

閑話 第一回、白の尻尾争奪戦!?(後書き)

第二回はあるのだろうか・・・?

感想、ご意見等お待ちしております。

第八話 狐、決戦に臨む

俺たちが世界を救うべく行動を開始してから約半年。

敵戦力を削りつつ、アリカ様やテオの呼びかけによって協力者も大分増やしていった。

協力者を得たことで、敵の情報収集にも並行して行えるようになった俺たちはついに奴ら、『完全なる世界』本拠地を突き止めた。

世界最古の都。王都オスティア空中王宮最奥部『墓守人の宮殿』

そこで奴らはなにやら儀式の準備をしていたらしい。

その儀式というのが何でも『世界を無に帰す儀式』なんて物騒な代物なのだそう。

そんな物騒な儀式を行わせるの訳にはいかないんで俺たち赤き翼とアリカ様とテオの呼びかけによって集まった帝国、連合そして中立国だったアリアドネーの一部の軍による混合部隊はそれを阻止すべく墓守の宮殿に集結したのだった。

「不気味なくらい静かだな、奴ら」

目の前に不気味に佇む墓守り人の宮殿を見据えてナギが呟く。確かに目の前にこれだけの部隊を展開しているのに何も動きがないというのは確かに不気味だ。

何かあるのではないかと勘ぐってしまうのは当然である。が

「なめてんだろ、悪の組織なんてそんなもんだ」

ジャックはそんなことは考えないのか、なんとも気楽な考えをしている。

と、そこへ

「ナギ殿、帝国、連合、アリアドネー混成部隊、準備完了しました」

現れたのはアリアドネー魔法騎士団とやらのリーダー、セラス嬢。彼女には帝国、連合、アリアドネー混成部隊の指揮をもらっている。

「おう。あんたらが外の自動人形や召還魔を抑えてくれりゃ俺たち

が本丸に突入できる。頼んだぜ」

「ハッ。それであの・・・ナギ殿」

「ん？」

報告を終え、部隊の指揮に戻るかと思われたセラス嬢。しかしその手に色紙とペンを持ち、なにやら顔を赤らめてナギに近づき、

「ササ、サインをお願いできないでしょうか？」

色紙とペンを差し出し、そう切り出した。
どうやらナギのファンだったようだ。

「おお？ああ、いいぜそれくらい」

「そ、尊敬していました」

ナギは人気者だなー。ファンクラブなんかもあるって聞いたことがあるし。

まあ、容貌は悪くないし、それにこの大戦での活躍があるから人気者にもなるか。

「あ、あのハク殿」

「ん？」

そんなことを考えていた俺の目の前にいつの間にもやらセラス嬢が立っていた。そしてその手には色紙とペンを持っている。ということ
は、

「よ、よろしければ、ハク殿もサインをお願いできないでしょうか？」

「……ん。いいよ」

「同じ亜人として、わ、私もハク殿の様になりたいと思っていました」

「へ、へー。そっか……頑張つてね」

「は、はいっ！頑張ります！」

どうやらセラス嬢、俺のことを亜人だと勘違いしているようだ。

まあ尻尾生えてて耳まであったら普通はそう思うか。

ていうかサインなんてしたことないからどんな風に書いたらいいかわからんな……。

とりあえず名前書けばいいのかな。

八雲 白……っと。

「はい。どうぞ」

「あ、ありがとうございます！」

とりあえず漢字で名前を書いて渡すとセラス嬢に満面の笑みで御礼を言われた。

どうやらこれで良かったみたいだ。

そんな、とても決戦前とは思えないような穏やかな時間を過ごしているガトウから通信が入った。

「連合の正規軍の説得は間に合わん、帝国のタカミチ君と皇女も同じだろう。決戦を遅らせることはできないか？」

ガトウとタカミチにはそれぞれアリカ様、テオと一緒に連合、帝国の正規軍の説得へと向かってもらったのだがどうやら間に合いそうもないらしい。

今この場にいる連合、帝国の部隊は正規軍のほんの一部であり、その数は正規軍の三割にも満たない。

よって正規軍が参加してくれれば、非常に心強かったのだが……。

「無理ですね。私たちでやるしかないでしょう」

「既にタイムリミットだ」

「ええ。彼らはもう始めています。世界を無に帰す儀式を」

そう。奴らは既に儀式の準備を終え、その発動に取り掛かっているのだ。そして、

「世界の鍵『黄昏の姫御子』は彼らの手にあるのです」

アルが言った『黄昏の姫御子』とは、奴等が行う儀式の、先ほどアルが言ったように正に鍵となるモノだ。

それが奴らの手の中にある。正に一刻の猶予も許されないような状況である。

その『黄昏の姫御子』だが、どんな人物かと言うとなんとアリカ様の妹君だと言うから驚きである。

アリカ様の妹であるアスナちゃん。俺は以前アリカ様に彼女のことを色々と聞いていた。

彼女はその身に特殊な能力を宿している。その特殊な能力ゆえに彼女は今まで辛い目に遭ってきたらしい。

「アスナを助けてやってくれ」

ここに来る前、アリカ様に言われた。アスナちゃんを助けて欲しいと。

そう俺に言ったアリカ様は本当に悔しそうな表情をしていた。

親友から、そんな顔をしてお願いされたのだ。だから俺はアスナちゃんを助ける。

「だろ！」

「時間がないんでしょ？それに大丈夫だよ、ナギ。俺もあんな雑魚共さっさと片付けて合流するからさ」

そう言つて不敵に笑つてみせる。

ナギたちは今だ納得のいかない様子だったが、俺が言ったようにもう時間がない為、渋々だが墓守り人の宮殿に向かうことにしたようだ。

「わかつた……。だけど、死んだりすんじゃねえぞ！白！」

「ナギたちこそね」

そうしてナギ、ジャック、詠春、アル、ゼクトの五人は墓守り人の宮殿へと向かつていった。

ナギの千の雷で突黒い壁に穴を開け、そこを一気に突破する。召還魔たちのうち何匹かはナギたちを追うことにしたようだがその大部分は依然、此方へと向かつて来る。

「ハ、ハク殿……。どうしますか？」

セラス嬢がその敵の多さに気圧されながら聞いてくる。さて、どうするか、ねえ。

「とりあえず、セラス嬢たちは暫くここで見ててよ」

「お一人で行かれるつもりですか！？ 私たちも闘います！」

セラス嬢は俺の提案に納得がいかないのか、少し声を荒げて反論する。
が、

「気持ちは嬉しいんだけどさ。邪魔だから」

「なッ！？」

俺の言葉にセラス嬢が言葉を無くす。ちょっと言い方が不味かったかな？

「ごめん、言い方が悪かったね。もし君たちが傍にいたら巻き込んじゃうかもしれないから邪魔って言ったんだよ。もし助けが必要だと君たちが判断したら参戦してもらっていいから、それまでここで見ててよ、ね？」

そう言つて、俺は一人敵の大群へと飛んでいく。
混成部隊から俺が全力で暴れても巻き込まない位置まで十分離れ、停止する。

黒い壁は依然此方へと向かってくる。

「^{オン}？」

呪を紡ぎ、周りに無数の光球を創り出す。

さあ・・・始めようか。

「美しく残酷に

この大地から往ね」

くセラスく

邪魔だから。

そう言つて一人で敵の大群へと向かつて行くハク殿。
私はそれを無謀だと思つた。

幾らハク殿が強くて、あれだけの数の召還魔や自動人形に一人で挑むなど不可能だと思つていた。

だから私はいつでもハク殿を助けに入ることができるよう身構えていた。

しかしそれは、全く無用の心配であつた。

まず目を奪われたのがハク殿が創り出したと思われる無数の光球。それは一瞬にして辺りを白一色に塗りつぶしてしまふほどの物だつた。

次の瞬間、その光球が一齐に敵に襲い掛かつた。

白と黒がぶつかり合う。
そして、

白が黒を飲み込んでいく。

たつた一人が放つた魔法にあの大群が蹂躪されている。

そんな光景を、私も含めこの場に居る者が皆、誰一人として声を上げることなく呆然と見ている。

これだけでそれがどれ程異常なことを物語っているだろう。

戦闘開始から数十分。未だに行われている、白が黒を蹂躪する光景を呆然と見つめていると

ドッバァン!!!!!!

「!?!?」

突如、大気を揺るがすほどの破裂音が辺りに響いた。

音のした方を振り向くとそこには黒い壁にぽっかりと開いた穴とそこから数メートル離れた位置に佇む白い人影。

ハク殿だ。一体何時の間に移動したのだろうか。

ここからでは距離がありすぎるので双眼鏡を使ってその姿を確認すると……。

目に入ったのは右の拳を真っ直ぐ突き出しているハク殿。

よく見るとその腕に十二力を纏っている。

アレは……

「風?」

その腕に纏っているのは風だろうか?しかしそれでどのようにして先程の破裂音に繋がるのか分からない。

だが先程の破裂音、ハク殿が起こしたことは間違いないだろう。

拳を突き出したままのハク殿に召還魔が、自動人形が襲い掛かる。

ハク殿は特に慌てた様子もなくゆっくりと、その右腕を引き、振りかぶる。

そして、

迫り来る敵に向けて、

その拳を、

突き出した。

ドツバアン！！！！！！

それは正に暴風。

いや、アレはそんな言葉で言い表せる様なものではない。

突き出されたハク殿の拳から放たれたのは恐ろしい程の力を持った風。

放たれたソレは目の前の敵を悉く蹂躞する。

切り裂き、吹き飛ばし、押し潰す。

その一撃は、目の前に迫っていた数千もの敵を、一瞬で殲滅せしめた。

私はその光景を、瞬きをするのも忘れて呆然と見ていた。

あれが赤き翼最強と噂される『幻想を統べる者』ヤクモ　ハク殿の力。

周りの者も皆呆然とその光景を見ていた。

私と同じように瞬きすることを忘れている者。開けた口を閉じるのを忘れている者。手に持っていた武器を落としたことに気付かぬ者。

彼らがハク殿に感じているのは畏怖か、それとも憧憬か。

私は怖れた。その絶大な力を。

私は憧れた。その至大な強さを。

そして、陽の光を受け輝くその姿に、私は……。

憬れた。

彼は本当に私たちと同じ人間なのだろうか？

その姿は神々しいまでに美しかった。

いつか私も彼のようになれるのだろうか？

いや、なってみせる。

その為にこの決戦が終わったら、ハク殿に弟子入りをお願いしてみよう。

そう私が決意を固めたとき、ふと日の光が遮られ、影が差した。

おかしい。

今私たちがいるこの場所は雲よりも上空にあるはずだ。

雲より高い位置にあるこの場所で一体何が日の光を遮るといえるのだろうか。

先程まで太陽が照っていた方に目を向ける。するとそこにあったのは、

「なっ、なんだアレは!？」

余りにも巨大な、眼下の雲から上半身だけを除かせている、黒い召
還魔が聳え立っていた。

第八話 狐、決戦に臨む（後書き）

最終決戦は次回に続きます。

感想、ご意見などお待ちしております。

第九話 狐、友との約束を・・・

妖力弾を使い迫り来る敵の相手をしていたのだが、これでは効率が悪い。

もう数十分は続けているが、未だに敵の勢いは衰えない。

もっとドバーっと一気に敵を減らさないと時間ばかりが過ぎていつてしまう。

じゃあ、いつちよやりますか。

スキマを使い敵の目の前まで移動する、そして

ドッバァン！！！！

目の前の敵の塊を能力を使って吹き飛ばす。

使ったのは幻想郷の捏造新聞記者が持つ『風を操る程度の能力』。

拳を突き出すと共に能力を使い、敵へ向かっていくように巨大な竜巻を起こす。

それと同時に俺の本来の能力である『力を操る程度の能力』でその「風力」を膨大なものに引き上げる。すると、

ドッバァン！！！！！！

こんな感じで恐ろしいまでの威力を持った暴風が敵を蹂躪してくれ

る。

え？拳を突き出す意味はあるのかって？いや、ぶつちやけてしまえば意味はないのだが・・・、少しでも魔法を使ってるっぽく見せるための動作って事で。

ナギなんか千の雷撃つときもよく拳突き出してるし。

まあそんなことは置いといて・・・今の一撃、ちょっと威力があり過ぎたかもしれない。

先のと合わせて二撃で敵が半分以上は片付いてしまった。

これだけ数を減らせれば後は混成部隊だけでも大丈夫かな。

後はセラス嬢たちに任せて俺もナギたちの下に向かうとしよう。

その旨を伝えるにセラス嬢の下に向かおうとすると

「？」

ふと、陽の光が遮られた。

あれ？ここって確か雲よりも高い位置じゃなかったっけ？

そう思い、先程まで陽が照っていた方を見やると

「おおー・・・でっかいねー」

それはそれは巨大な悪魔（？）が聳え立っていた。

それにしてもこの世界の魔法使いが喚び出す悪魔はこんな風におどろおどろしいのだろうか。

パチュリーの使用魔である小悪魔こあくまみたいな可愛らしいものはいないのだろうか。

仮に先の敵の大群の全てがこゝみみたいな悪魔だったら……、別の意味で恐ろしいな。

まあそんなことはどうでもいいか。

それよりあの巨大な悪魔をどうするかだな。

恐らくセラス嬢たちにはこの悪魔の相手は荷が重いだろう。ならナギたちの下へ行くのはこいつを倒してからだな。

さて、どうやって倒してやるうか……お！

そうだ、今まで暖めておいたアレをやってみよう。

ちょうど距離も空いてるし、それになんかアイツ頑丈そうだし的としては申し分ない。

んー、技の名前どうしよっかなー……まあいいか、適当で。

「では、早速」

右の拳を、先程竜巻を放ったときと同じ様に
いや、それよりももっと引き絞る。右足を引き半身に構え、腰も捻り体全体を使って拳を突き出せるように構える。

そして能力を使い己の筋力を限界まで上昇させる。さらに体全体に妖力を纏いそれによる身体強化も同時に行う。特に右拳は念入りに他よりも多い妖力を圧縮しその拳に纏わせる。その膨大な妖力によって拳が光って見える。ここまでやれば拳が傷つくこともないだろう。

後は踏ん張れるように足元の風を操って……と。

これで準備は整った。後は実行するのみである。

「必殺」

足元の風の塊を踏みしめる。そこで得た力を足首、膝、腰、肩、肘へとそれぞれの関節を伸ばし、捻りながらその力を拳へと伝えていく。軟らかく、しかし力強く。関節を一つ通す度、力を上乘せさせていく。

その力が行き着く先の拳は、軟らかく開いておく。そして拳が目標を捕らえる瞬間に、手首の力を加えながら　　握る！

「スキマパンチ隙間拳（今命名）！」

しかし俺とあの巨大悪魔との距離は少なく見積もっても数百メートル。

ここで拳を放ったとしても届く距離ではない、が俺の拳は確かに敵に届いた。

スキマを通って。

パン！！！！

と、小気味良い音が鳴り響き巨大悪魔の頭が破裂した。

「……………あれ？」

破裂した・・・？

へー、強過ぎる力で殴ると生物って破裂しちゃうのか。
今までやったことなかったから知らなかったよ。

うん。今度やるときは力加減に気を付けよう。

今回は召還魔だったから頭が破裂しても消えていくだけだから良かったけど、相手が人間だったらかなり凄惨な光景になっていたに違いない。

試しにやってみてよかった・・・。

「そしてあの名前はないよね・・・」

スキマパンチって・・・。

咄嗟に叫んでみたがもう少しいい名前は思い付かないものだろうか・・・。

これではジャックといい勝負である。

その事実軽く自己嫌悪に陥る。

まあ今はそんなことよりも早くナギたちの下に行くとしよう。

今度こそその旨をセラス嬢に伝えるためにスキマを使ってセラス嬢の下へと移動する。

「じゃあ、俺はナギたちのところに行くから、後は任せるよ」

「ひゃっ！？ハ、ハク殿ですか・・・。驚かせないでください」

いきなり真横に現れた俺に驚くセラス嬢。

驚いた拍子に出る言葉が「ひゃっ」だなんてなかなか可愛らしい一面を持っていらっしやる。

「ごめんごめん。で、敵の数は結構減らしたと思うけど、後は任せてだいじょうぶかな？」

「はい。後は私たちに任せて下さい。ハク殿はナギ殿たちの下へ急いで下さい」

「ん。じゃあ、気を付けてね」

「ハク殿も御武運を」

後のことをセラス嬢に任せてナギたちの下へと向かう。

ナギたちなら大丈夫だと思いが何事にも絶対はないからね。急ぐに越したことはないだろう。

そして・・・

「待っててね、アスナちゃん」

アリカ様の妹君を助けるために。
俺は墓守人の宮殿へと向かった。

墓守人の宮殿内に入る。その内部に見られる先頭の爪痕。
柱が折れ、床は抉れ、壁には大きな穴が開いている。
それらがここでどれだけ激しい戦闘があったか物語っていた。

ズドン！！　ズズン！！！！

鳴り響く破壊音。

どうやらまだ決着は付いていないようだ。
あのメンバーで梃子摺る相手と言うことか・・・、
だとしたら加勢
に行ったほうがいいだろう。

音のした方へ急ぐ。

そこにいたのはナギとゼクト、そして二人と対峙する全身に黒い布

を纏ったナニカ。

何だ、アレは？

一目見てその異常さに気が付く。

まず人間ではない。そして俺たちの様な存在でもない。ならば何か？分からない。それ以外のナニカだ。

三千生きてきたがあんなモノは始めて見る。

只一つ言えることは・・・

コイツは・・・強い。

少なく見積もってもナギと同等かそれ以上。

実際、ナギとゼクトが二人掛りで向かっているのに全く引けをとっていないのだ。

ソイツの掌がナギとゼクトに向けられる。

その掌から膨大な魔力の高まりを感じる。

不味い！！

咄嗟にスキマを使い、二人をその場から此方に移動させる。
その直後

ドッ！！！！！！

二人が一瞬前まで居た場所に膨大な魔力の奔流が放たれた。

アレは不味い。アレは俺でも全力で結界を張ってやっと防げるぐらいの威力だろう。

あんなモノ喰らったらナギもゼクトも一溜まりもないだろう。

「っ!?!?・・・白か?助かったぜ」

「助かった。流石に今のは肝が冷えたぞ」

「どういたしました。それより苦戦してるみたいだね。手を貸そうか?」

二人をそっと地面に降ろしながら提案する。

その間も敵からは目を離さない。

奴さんも突然現れた俺という存在を警戒しているのか此方を注意深く見つめている(顔がフードで隠れているのでそんな気がするのだが)

「いや、白は姫子ちゃんを頼む。ここは俺とお師匠だけで十分だ」

「うむ。早く行くがよい。時間がない、もう儀式は完成してしまっただようじゃ」

「・・・わかった。二人とも、死ぬんじゃないよ」

「へっ!あつたりめーだ!」

「そうじゃの、さっさと終わらせて白の料理を頂こうかの」

「了解。・・・ところで、他の皆は？」

「大丈夫、皆無事だ」

「そうか。それを聞いて安心したよ」

誰も死んでない。その事実にあ堵し軽く息を吐く。
そしてこの場から離脱するためにスキマを開く。

「じゃあ二人とも、頑張つてね」

「ああ！」

「うむ」

二人の返事を聞き、俺はスキマの中へと身を滑らせた。

墓守人の宮殿最奥部。そこでアリカ様の妹君であるアスナちゃんを
発見した。

何かの結界だろうか。アスナちゃんはその身を巨大な水晶のような
物に閉じ込められていた。

左右で結った長い夕陽色の髪が美しい。

その小さな身体に今までどれ程の物を背負わされてきたのだろうか。

ふと、アスナちゃんがその眼を開いた。

お互いの視線が交差する。

美しい蒼と碧の瞳。

世界の全てに絶望してしまったような、そんな悲しい瞳。

その視線を真っ直ぐに受け、俺は優しく微笑んだ。

その悲しみから、今解き放ってあげよう。

その水晶へと掌を向ける。

そして彼女を解き放つための能力を使おうとした、そのとき

カチリ、と

ナニカが嵌ったような音がした。

これは・・・ちっ、儀式が発動したか。

しかしそれでも彼女は救ってみせる。幸い彼女はこの儀式を発動させるための鍵のようなもので、発動した後はその術との相関などはないようだ。

使う能力は毎度お馴染み「境界を操る程度の能力」。

結界とは詰りは結界の「内」と「外」を隔てる境界なのだ。ならばそれを破壊することなど簡単だ。この能力でその境界を破壊してやればいい。

パキーン！

巨大な水晶が砕け散る。

その内に居たアスナちゃんは重力に伴ってその身を落下させる。

その身体を優しく抱きとめる。

そして優しく、優しくその頭を撫でる。

「もう、大丈夫だよ」

アスナちゃんの瞳が俺を捉える。

「貴方は・・・誰？」

先程と違い、僅かに感情が籠った瞳。

その瞳に籠っているのは驚き、だろうか。自分が助かったのが信じられないといった風な感じだ。

未だ呆然としている少女に俺はとびっきりの笑顔でこう答えた。

「俺は八雲 白。君を助けに着たんだよ」

第九話 狐、友との約束を・・・（後書き）

やっと最終決戦終了。そして少し早い明日菜救出。
魔法世界編もあと少しです。

しかし原作に入るのはまだ先になりそうです。

感想、ご意見などお待ちしております。

第十話 終わりの始まり（前書き）

更新が少し遅くなってしまい申し訳ありません。

今回からタイトルの表記を少し変えさせていただきます。

今までの感じだとタイトルを考えるのに凄い苦労してたので・・・。

それでは第十話、どうぞ。

第十話 終わりの始まり

アスナちゃんを無事助けた俺はスキマを使って墓守り人の宮殿から脱出する。

そして俺たちが外に出た瞬間に墓守り人の宮殿の中心から巨大な光球が発生した。

その光球はどんどん大きさを増して行き、今や墓守り人の宮殿を完全に飲み込む程の大きさになっていた。

アレが『世界の始まりと終わりの魔法』ってヤツか。

このまま放っておけばコイツは世界を覆うほどに膨らみ、この魔法世界を無に帰すのだろう。

が、そうはさせない。

此処にはアリカ様たちがいる。彼女達の故郷を無くさせやしない。

それにこの魔法はアスナちゃんの力で発動したモノ。そんなモノで世界を消したとなると彼女がその罪を背負わせることになる。

そんなことには、させない。

そう思い、あの光球を押さえ込むために結界を張ろうとした、が

ゴオン

！ゴオン

！ゴオン

！ゴオン

！

「ん？」

突如、辺りに無数の戦艦が現れた。

あれは・・・メガロメセンブリアとヘラスの艦隊か。
アリカ様とテオが説得に行っていた連合、帝国の正規軍がやっと到着したようだ。

その無数の戦艦たちは未だその大きさを増す光球を囲むように展開する。

どうやらあの光球を何とかする手立てがあるようだ。
なら俺は黙って見ておくとしよう。もしそれが駄目な場合のことを考えて何時でも結界を張れる様に準備はしておくが。

ウォン！

光球を囲む戦艦に乗る魔法使い達が協力して巨大な魔方陣　　結

界か何かだろうか？　　を光球を包むように複数展開させる。

それらが光球を押さえ込む。
すると光球は徐々にその力を失っていくかのように小さくなっていく。

「おお・・・」

思わず感嘆の声が零れる。

あれ程の大魔法を力を合わせてとはいえ封じるとは、やっぱり人間は面白い。

個としての力は俺たちのような存在に劣るが（偶に凄まじい力を持った者もいるが・・・）彼らは力を合わせることによってそれを補

ぎゅっ

ふと、胸元を引っ張られる感触を感じる。

視線を下げると、大きな鬨の声に吃驚したのか先程から俺に抱かれている（所謂お姫様抱っこというやつ）アスナちゃんが俺の服をぎゅっ握っていた。

そんなアスナちゃんに俺は優しく話しかける。

「大丈夫。もう終わったから。これでアスナちゃんは自由だ」

「自由・・・？」

言われたその意味が分からなかったのか、アスナちゃんは首を傾げて聞き返してくる。

自由の意味が分からない・・・か。いや、意味は分かるけどそれを自分に当てはめられないのかな。

「そうだよ。これからアスナちゃんはおいしいものを一杯食べて、面白い本を一杯読んで、楽しい時間を一杯過ごすんだよ」

アスナちゃんにも分かるよう、優しく諭すように話し聞かせる。

「特においしいものに関しては俺が腕によりをかけて作ってあげるから。でもそうするとアスナちゃん食べすぎちゃってぽっちゃり」と

太っちゃんかもね」

「それは・・・嫌・・・」

どうやら太るのは嫌なようだ。やはり彼女もしっかりと女の子なようだ。

まあ、今の彼女は碌に食事をとっていなかったのか、かなり痩せているので少しぐらい太ったほうが良いと思うのだが。

「なら食べた後にはたくさん運動もしなくちゃね。俺も一緒にやるからさ」

「・・・うん」

こくりと、アスナちゃんは頷くとその顔を俺の胸元に埋める。暫くそのまましているとじわり、と胸元が何か暖かい液体で湿っている。

しかし俺はそれに気付かないふりをして、少しだけアスナちゃんを抱く腕の力を強くした。

辺りには未だ関の声が響いている。

その関の声に、少女の小さな嗚咽は掻き消され誰にも聞かれることはなかった。

さらに後ろに俺が続く。

現在、ここオステイアでは終戦を記念した式典が開かれている。その式典でこの戦争で多大なる功績を残した（そんな実感はないのだが・・・）俺たち赤き翼の受勲式が行われていた。

今ここにいないアルはサボリ　　ではなく、アスナちゃんのことを見てもらっている。まあ、その役目が無かったとしてもこの式典に参加するつもりは無かったようだが。

そしてゼクトは・・・、あの黒いナニカとの戦闘で殺られたことだった。

やはりあの時俺も戦闘に参加するべきだったか・・・いや、そうするとアスナちゃんを救えなかった可能性がある。

過ぎてしまったことを悔やんでも仕方がないのだが・・・。

そういえば、ゼクトのことを話す時、ナギの様子が少しおかしかった様な気がする。

と、いうことはゼクトはただ殺られた訳ではなく・・・。

いや、ここで考えても仕方の無いことか。今はゼクトが生きているかもしれない、その可能性が出来ただけでも良しとしよう。

そんなことをウジウジと考えていると何時の間にかアリカ様たちが目の前にやってきていた。

いや、俺たちがアリカ様たちの目の前まで歩いてきたのか。

そして俺たちはアリカ様やテオにこれまでの功績に対しての賛辞を頂き、一人一人の首に金の賞牌を掛けていただいた。

始めにジャック、続いて詠春、そして俺の番。

「話しは聞いておるぞ。万を超す魔物の大群に一人で立ち向かったそうじゃな」

「いえいえ、あれぐらい何でも無いですよ」

アリカ様と一言交わし首に賞牌を掛けてもらう。

その時、アリカ様の顔が最も近づいたときを見計らい

「アスナちゃんは無事助け出しましたよ。今はアルに見てもらっています」

そう、アリカ様にだけ聞こえるように言った。

「っ！・・・そうか・・・」

アリカ様は一瞬だけ驚いたように表情を崩したが、その後はいつものように落ち着いた声音でそう返してきた。
しかしその中にはどこか安堵したような響きが含まれていた。

「白よ。アスナのことを宜しく頼む」

「勿論です。暫くは窮屈な生活をさせるかもしれないけど、熱りが冷めたら皆で何処かに出かけましょうよ」

皆と話し合った結果、アスナちゃんを救出したという事実は隠すこ

とにした。

理由は彼女のその能力を悪用しようとする奴等がまだ居るかもしれないということだ。

戦争が終結し黒幕であった完全なる世界も居なくなった今、そこまでする必要があるのかと言う意見もでた。

が、そもそもこの戦争がここまで惨憺さんたんたるものになったのはそうだった、善からぬ事を企む人間がいたからである。

そいつらが完全なる世界に同調しなければここまで酷い状況にはならなかったはずだ。

そうだった理由でアスナちゃんの存在は極秘扱いとなり知っているのは現在紅き翼のメンバーとアリカ様のみとなっている。

「そう・・・じゃの」

「旧世界の京都なんてどうでしょう。詠春の実家もあるようだし、そこに皆で押しかけてやりましょうよ」

「ああ。それは、楽しそうじゃな・・・」

「・・・アリカ様？」

アリカ様の様子がおかしい。

しかしそのことを問おうとしたところでアリカ様は俺から離れ、賞牌を授けるためナギの下へと移動してしまふ。

アリカ様はナギの首に賞牌を掛けようとしたがふと、その手を止め

スパーン！

平手びんた一閃。

ナギがまた余計なことでも言ったのだろうか。

先程感じた違和感は気のせいだったのだろうか？

今はアリカ様はいつも通りに見える。

気のせいだったのだろうか。

俺はそう思い、それ以上考えるのをやめた。

くアリカく

式典が終わり、オスティアの町並み見渡せる王宮のテラスに一人佇

む。

戦争はこれで終わった。

しかし、これからだ。

これから始まるのだ。崩壊^{終わじ}が。

あの決戦の最後に現れた光球、世界を滅ぼす「反魔法場」、その効力をこのオスティア内に向けて封印した。

その為あと僅かな時間でこのオスティア周辺を魔力消失現象が襲うだろう。

世界を救う為とはいえ己の国を滅ぼすなど、私は確実に地獄に落ちるだろう。

しかし、悔いは無い。

先程ナギと二人で話をしたのだが……。

あの男、何か隠しておったな。無理に明るく振舞っているように見えた。

しかし、そんな中でも私が何かを隠していることに気付き、そのことを心配してくれた。

それに……

「フツ……。世界の果てまで連れて行ってやる……。か」

などと、珍しく真面目な顔をして言いおって……。

私にはその言葉だけで十分だ。

「陛下、時間です。間も無く崩落の第一段階が始まります」

後ろに控えていたガトウ・カグラヴァンデンバーグから声がかかる。その隣には彼の仲間のクルト・ゲーデルの姿もある。

「進捗状況は？」

「反魔法場の封印直後から艦艇全力であたっており現在37%」

くっ……未だその程度か……。

「陛下のお考え通り式典と称しこの離宮島に全市民を誘導しております。情報統制により混乱もこれまでのところありませんが、崩落が始まればその限りでは……。全市民の救出は困難を極めるかと……！」

状況は絶望的。しかしやらねばなるまい。一人でも多くの命を救う為に。

「わかった。私も直接指揮にあたる！」

「お待ち下さい、陛下！」

私が現場へと赴こうとしたとき、今まで黙っていたクルト・ゲーデルが私を引き止めた。

「なんだ？」

「赤き翼の一人ヤクモ　ハクが扱う力は魔法でも氣でもないものと聞いております。なら彼に市民救出の助力を願えば良いのでは？」

確かに白の力ならばこの魔力消失現象の中でも使うことが出来るかもしれない。しかし……。

「……ならん」

「何故ですか!？」

白ならば私が助けを求めれば必ず力を貸してくれるであろう。しかし私は白に助けを求めることは出来ない。何故ならば、

「この事態が収まった後、恐らく私はこの状況を作った張本人としてメガロメセンブリアに拘束されるじやろう。そして、それは私に力を貸してくれた者達にも及ぶはずじゃ。だから私は白に力を借りることは出来ん。彼はこれからの時代を担う者となるだろう。その者をこんな所で失うわけにはいかん」

そう。私に力を貸したとなると、メガロメセンブリアの連中に目を

付けられる可能性が高い。

それに白は赤き翼の一員。その力を怖れて拘束される確立が高い。無論、白だけならばそんなことにはならないだろう。彼の力を持つてすればメガロメセンブリアの者達から逃げることなど容易いことだろう。

しかし私が人質にでも捕られたら、白は抵抗を止め大人しく捕まるだろう。

私の所為で白に　　我が友に迷惑がかかってしまう。

私はそれがどうしようもなく嫌だった。

時代を担う者を失うわけにはいかなど何などと言っておきながら・
・何のことは無い。私はただ白にこれ以上迷惑をかけたくないだけなのだ。

己の国の民より一人の友のことを優先する女王・・・か。

やはりこんな私は地獄へ堕ちるのが相応しい。

ズズン・・・!!!!

唐突に、空に浮かんでいるこのオスティアの大地が揺れる。

どうやら始まったようだ。

「後のことは任せたぞ・・・。白」

こうして、この国の崩落^{終わり}が始まった。

第十話 終わりの始まり（後書き）

感想、ご意見等お待ちしております。

引き続きヒロイン候補の投票も行っております。
是非この娘をヒロインに。などありましたら感想にてどうぞ。

第十一話 食事の後は・・・（前書き）

まず、更新が遅れてしまい申し訳ありません。

最近色々と忙しく、これからも更新がかなり不定期になってしまいかもしれません。

ただ二週間に一回は更新していきたいと思うので、これからも宜しくお願いします。

それでは第十一話、どうぞ。

第十一話 食事の後は・・・

ヒュッ ボッ !

空気を裂く音と共に繰り出される拳を、その場を一步も動かさず上体の動きだけで避ける。

迫る拳は疾く、鋭い が、それだけだ。

動きは直線的で、虚実を混ぜることなくただ振られる拳など・・・。

至極、読み易い。

がしっ・・・!

繰り出される拳を掴み、その力を殺さずそのまま後方に投げる。

「 ツー!?」

投げられた相手は空中で身体を捻り崩れた体勢を立て直すと、長い夕陽色の髪をはためかせ危なげなく着地した。

「んー……。動きが正直すぎるかな。もう少し動作に虚実を織り交ぜたほうが良いよ、アスナちゃん」

振り向きながら、今己と対峙している相手に先程の問題点を指摘する。アスナちゃん

さて、何故俺がアスナちゃんと拳を交えているのかというと、別に喧嘩や仲違いをした訳ではなく、ただの食後の運動である。

ただの食後の運動なのにこんな手合わせのような事をしているのか
と言うと、それは偏にアスナちゃんからそう希望されたからである。
曰く、

「運動するなら、為になることの方がいい」

とのことである。いやはや、なんとも合理的な考え方である。

この手合わせは今から二年ほど前から行っているのだが、始めてから今日までのアスナちゃんの成長ぶりは凄まじいの一言に尽きるものだった。

俺が彼女の拳を難なく凌いでいたのは、俺の身体能力が人間よりも遥かに優れているからである。

同じ人間（氣や魔力を使用していない状態）であるならば彼女の拳を凌ぐならば少なくとも達人と呼ばれるほどの実力が無ければ難しいだろう。

因みに、俺も彼女もこの手合わせでは氣や魔力、妖力などでの身体強化を一切行っておらず純粹に己の身体と技術を競っている。

たった二年間でそれほどまでに成長したアスナちゃん。
しかしこの二年間行ってきたことといえば昼食後に行われるこの俺
との手合わせのみである。

内容は先程の通り、ただ二人で拳を交え彼女の問題点を俺が指摘す
るというもの。

手取り足取り教えたのは、初めに基本的な体捌きを教えた時ぐらい
である。

それだけで彼女はこれほどまでに強くなったのだ。

全く恐ろしいものだ、『天賦の才』と言うものは。

そこで思考を止め、意識を投げ飛ばされた位置から未だ一步も動か
ないアスナちゃんをに向ける。

俺とアスナちゃんとの距離はおよそ10mほど。

先程も言ったようにこの手合わせでは氣や魔力、妖力などの使用は
不可となっている。

それ故に相手に攻撃を行うなら直接打撃を行うほか無い。

しかし彼女は、両の手をズボンズボンのポケットポケットに入れたままその場を動
かない。

あの構えは!?

それに俺が気付いた瞬間、彼女の腕がぶれるのを俺の目が捉えた。

『居合い拳』またの名を『無音拳』とも言つ。
ポケットを刀の鞘に見立て、その名の通り剣術の一つである居合の
様にポケットから拳を抜き放ち「拳圧」を飛ばすというトンデモナ
イ技である。

咄嗟に右手で頭部を、左手で胴体を庇うように手を翳す。
その直後、

パパパパパパパン

！

繰り出された八つの拳圧が

俺の両足に直撃した。

カクン、と膝が折れる。

一つ一つの拳圧は大した威力でないがそれを左右それぞれ4つずつ、
しかも全て同じ所に打ち込まれたら、幾ら俺でも身体を妖力で強化
していない状態では、ほんの一瞬であるが足の力が抜けてしまった。

やられた・・・！

これは、居合い拳という相手の間合いの外から一方的に攻撃できる
手段があるならば狙うのは合わせれば人体の急所の半分以上がある
頭部と胴体だろうと高を括った俺の失態。

そしてその思い込みを上手く利用し無防備な足を狙いに来たアスナ
ちゃんの見事な判断力が招いた結果だった。

その場に崩れ落ちる俺にアスナちゃんは止めを刺すべく一気に距離を詰める。

彼女が狙うのは俺の頭部。

腕を引き、腰を捻り、その小さな身体全体をバネの様に使い自身が出せる最高の一撃を用い、俺の頭部を破壊せんと拳を繰り出す。

この一撃、喰らえば頭蓋が砕けるか、頸椎が折れるか……。兎に角只ではすまないだろう。

それほどの一撃を、只の手合わせで繰り出すなんて危険ではないのか？と思う者もいるだろう。

しかし、全力で行わない鍛錬を行ったとしてもそれで身につくことなど微々たるものだ。

それに全力で仕合うことが危険なのは実力が拮抗している者同士が行った場合の話だ。

実力に絶対的な差がある者同士がやればその限りではない。

要は実力のある者が相手の攻撃を全て躲し、防ぎ、喰らわなければ良いのだ。その上に相手の指導もしてやれば申し分ない。

この鍛錬を始めたばかりの頃はアスナちゃんも危険だと思ってか全力を出さずに行っていた。

先程も言った通り、俺は鍛錬は全力で行ってこそ意味があると思っているのでアスナちゃんにその旨を伝えたのだが、まだ抵抗があるか釈然としないようだった。

そんなアスナちゃんに、少し意地悪が悪いかとも思ったのだが、俺はこう付け加えた。

「どうせ当たらないから」

と。

この俺の言い方に流石に少しカチンときたのか、それ以降アスナちゃんの手合わせで手を抜くことは無くなった。

そして今日、手合わせを行うようになってから初めてアスナちゃんからの攻撃を喰らった。

直接拳を喰らったわけではないから、アスナちゃんが居合い拳を使えるなんて知らなかったから、なんて言い訳にもならない。

居合い拳は立派な手段の一つだし、手札は隠しておくものである。ただアスナちゃんが俺の予想を上回った。それだけだ。

そして尚、油断無く俺に止めをを刺そうと迫るアスナちゃん。

見事だ。アスナちゃん。

この二年間でここまで強くなるなんて、思ってもみなかったよ。でも……。

まだ、負けてあげる事は出来ない。

迫り来る、アスナちゃんの拳。

それに対して俺は只、身体のを抜く。

倒れていく身体の重心を前に、前に。

身体を滑るように前へと、倒れこむように進ませる。

足は無駄な力を入れず、地を蹴らず、氷の上を滑るかのように運ぶ。速く動いているわけではない。只これらの動作を滑らかに、身体全体を連動させるように行う。すると、

ヒュボツ！

風を切るような音。
アスナちゃんの放った拳は俺を捕らえることなく頭上を通過する。

「ッ！？」

驚愕の表情を浮かべるアスナちゃん。
何が起きたのか理解できていないのだろう。
確実に捕らえたと思っただ俺がなぜ自分の攻撃を避け自分の懐に入っているのかを。
なぜ目の前の俺が突如、消えたのかを。

「よっつと」

ひよい。

何はともあれ、渾身の一撃を空振りし隙だらけのアスナちゃんを肩に担ぎ、仕合終了。

「はい、終わりー。惜しかったね、あと少しかったのに」

「・・・今、何したの？」

アスナちゃんはやはり先程の俺の動きが気になるようだ。

まあ、捕らえたと思った相手が目の前で消えたら気にもなるか。アスナちゃんを下ろしその動きの正体を明かす。

「あれはね、『無足之法』と『順体法』って言うちよつと特殊な動きをしたんだよ」

「むそくのほう？・・・じゅんたいほう？」

こてり、と小首を傾げて聞き返すアスナちゃん。

その動作が非常に可愛い。

「うん。どんな動きかって言うとな」

そんなアスナちゃんの頭にポン、と手を載せその二つの動きについて説明する。

『無足之法』

身体が倒れる力を利用し、地を蹴らず歩む歩法。
力を否定し、脚力に頼らないその動きは予備動作や動作後の反動と
が生じない。

故にその動きは足音もたたず、動きを悟らせること無く、氷の上を
滑るように相手に近づく。

『順体法』

手先や足先から動くのではなく身体全体から動く体捌き。

その動きは身体の全体が連動しており、特定の部位が攻撃目標に向
かっているわけではないので、相手はその動きを認識できず、まる
で消えるような動きとなる。

つまり先程の動きは

膝が折れ、身体が倒れるのを利用して『無足之法』を。

そしてその際『順体法』を用い、身体全体を使って移動することに
よりアスナちゃんはまるで俺が消えたように錯覚したというわけだ。

「　　ってことなんだよ」

「・・・ずるい」

俺の説明を聞き終えたアスナちゃんはぶくつと頬を膨らませて此方
を睨む。

うん。とっても可愛らしい。

「そんなの、今まで使ってなかった」

「まあ、それを使わなくちゃいけないほどアスナちゃんが強くなっ
たってことだよ」

ぼんぼん、とアスナちゃんの頭をあやすように撫でる。

「それにアスナちゃんだって、居合い拳なんて何時の間に覚えたの
？と言っか、ガトウも何時の間にアスナちゃんに教えたのさ？」

今まで俺たちの手合わせを見ていたガトウの方　　因みにその
隣にはタカミチもいる　　を見る。

そう。アスナちゃんが使用した居合い拳はガトウが得意とする技で
ある。

よってアスナちゃんはガトウに居合い拳を教わったと思ったのだが、

「いや、俺は讓ちゃんに居合い拳なんて教えてないぞ」

どっちらっどっちらしい。

どっちらっどっちらしい……？

「ガトウ……さんの見て、覚えた」

と、事も無げに言うアスナちゃん。

それがどれ程凄いことなのか理解していないようだ。

その言葉を聞き、ガトウに師事し居合い拳を教えてもらっても未だ会得できていないタカミチが涙目になっている。

本当に恐ろしいものだ、『天賦の才』と言うものは……。

「じゃあ、食後の運動も終わったことだし、俺はそろそろ行くよ」

俺はアスナちゃんとの運動が終わった後に、毎日ある場所へと足を運んでいる。

これはアスナちゃんとの運動同様に、二年前から続けていることである。

「もうそんな時間か。じゃあ俺とタカミチはナギたちと合流するか」

「……ナギはまだ？」

「ああ。相変わらずだ」

肩を落とし頭を振りながら答えるガトウ。

ナギはまだ立ち直れていない……か。二年前のあの日から。

くらくい。

ふと、袖を引つ張られる感触。

振り向くと、そこには小さな包みを両手で差し出すアスナちゃんが。

「これは？」

「昨日、白と焼いたクッキー……。美味しかったから」

なるほど、つまり渡してほしいと。

「わかった。アスナちゃんからって言って渡しておくよ」

「うん」

さて、最高の手土産もできたことだし。今日も行きますか。

「じゃあ、行ってきまーす」

スキマを開いて、いざ目的地へ。

きっとアメリカも喜んでくれるだろう。

第十一話 食事の後は・・・（後書き）

アスナ強化フラグです。

これからアーティファクトも手に入り、さらに強化していく予定。

え？誰とのアーティファクトか、ですか？

それはもちろん・・・ねえ？

第十二話 失意の王女と（前書き）

何時の間にか1000・000PV、15・000ユニークってま
した・・・！
びっくりです。

これからも皆様にご愛読いただけるよう精進してまいりますので宜し
くお願いします。

それでは第十二話、どうぞ。

第十二話 失意の王女と

くアリカく

薄暗い室内。

光は遙か頭上の小さな窓から差し込むもののみ。

音も無く、まるでこの世界には己一人しかいないのではないかと錯覚させられる。

私がこのケルベラス無限監獄に投獄されてどれ程の月日がたっただろうか。

オスティアが崩壊したあの日から私は住む国を無くし難民となった民たちの援助をメガロメセンブリアの元老院議員に日々訴えていた。

そしてある日、私は逮捕拘束されることとなる。

罪状は父王殺し、及び完全なる世界との関与の疑い等々、挙句の果てには完全なる世界の黒幕とまで言われるようになった。

この不毛な戦争によって疲れ果てた人々の不満や憎しみを押し付けられる生贄。

それに私はまさに打って付けだったと言うわけだ。

そして何時しか私は『災厄の女王』などと呼ばれるようになった。

そんな私の味方をする者は、この世界からいなくなった。

たった一人の例外を除いて。

「やつほー。今日も遊びに来たよ、アリカ」

目の前で何も無い空間が裂け、無数の瞳が覗く亀裂が現れる。その光景はかなり異常なものだが、もはや慣れたものである。

そしてその亀裂から顔を覗かせるのは我が親友、八雲 白である。彼は私がここに投獄されてからほぼ毎日私のところに来ている。

「全く、また来たのか・・・そんなに暇なのか？」

などと言いながらも、私は口元には笑みが浮かぶのを抑えられない。私は白が来てくれるこの時間を毎日心待ちにしていた。

この暗く狭い空間に閉じ込められた私にとってこの白との時間だけが唯一、私に生を実感させてくれる。

もし白が居なかったらと思うとぞっとする。

恐らく私はこの仕打ちに耐えられず、絶望に沈み、生きることを放棄していたであろう。

実際に投獄された当初、私は半ば生きることが放棄しかけていた。自分が人々の憎しみを引き受けて処刑されることで世にある不幸を少しでも減らせるのなら本望だと考えていた。そんな時に白が来て私に希望を与えてくれた。

いつも様に変わずに、話しかけてくれた。

「こんな何も無いところに来て、何をするといいのじゃ？」

白が私のところに来るようになり幾日か経ったある日、精神的に追い込まれていた私は彼を突き放すように、そんなことを聞いてみると彼は

「確かに何も無い殺風景な部屋ですけど、アリカ様が居るじゃないですか」

なんて笑いながら答えた。

その言葉を受け、暫し呆然としてしまう。

私が居るからここに来た・・・か。

もう世界の何処にも私の味方は居ないと、そう思っていた。

だがここにいた。

何故忘れてしまっていたのだろうか？

私にはこんなにも自分のことを思っていてくれる親友がいるではないか。

私の顔に徐々に笑みが浮かんでくる。

「それだけで、俺がここに来る理由には十分です。ああ、そういえばアリカ様はもう女王じゃあないんですたっけ？ならこれからは」

アリカ』と呼び捨てでもいいですよね？」

そして彼はニヤリと、まるで悪戯を考え付いた子供の様な笑みを浮かべる。

「フ、そうじゃな。私はもう女王ではない。そんな私に様付けなど不要じゃ」

そんな彼に私もニヤリと、笑みを浮かべてそう返す。

「じゃあ改めて宜しくね、アリカ」

「ああ、宜しく頼む、白」

こうして私たちは、身分や立場など関係ない、本当の親友となったのだった。

く白く

「全く、また来たのか・・・そんなに暇なのか？」

なんて一見此方を突き放すような言い方をするアリカだが、それが本心からの言葉ではないことは分かっている。その証拠に彼女の口元には笑みが浮かんでいる。

「まあそう言わずに・・・今日はお土産もあるんだから」

ジャーン！と手に持っていた小さな包みをアリカに見せる。

「なんじゃ？それは」

「アスナちゃんと俺で焼いたクッキー。アスナちゃんがアリカに渡して欲しいって言うからさ」

「・・・そうか。アスナが・・・」

ポツリと呟き、その顔に笑みを浮かべるアリカ。
その柔らかな笑みを見て思う。アリカはもう大丈夫だと。

ここに初めてきたときのアリカは本当に酷い状態だった。
この世の全てに絶望してしまっただかのような、虚ろな瞳。
この世にたった一人取り残されてしまっただような、哀しい瞳。
そんな状態だったアリカがやっと笑顔を取り戻せた。
その瞳にはもう絶望も哀しみも無い。
だから、もうアリカは大丈夫。

あとは、アイツ^{ナギ}だけ・・・か。
まあ単純なアイツのことだからちよつと尻を蹴ってやれば直ぐにいつもの調子を取り戻すだろう。

今はアリカとの時間を楽しむとしよう。

「はい。アリカ、あーん」

包みを開きクツキーを一つ摘みそれをアリカの口元まで持っていく。
え？何でそんなことするのかって？
だってアリカは両手両足拘束されてるから俺が食べさせてあげられないじゃない？

て言うか両手両足を拘束するのはやり過ぎじゃないか？
こんな状態じゃあ飯を食べるところか満足に睡眠も取れないだろう。

コレでは拷問と変わらないではないか。

一応飯は毎日出るみたいだがどうやって食べると？
這い蹲って犬のように食べと？

囚人にも人権はあるだろうに。

それとも一応添えられているスプーンで食べると？

両手を拘束された状態でどうやって使うのかを教えて欲しい。

まあここで愚痴っても仕方が無いことだが、それでもアリカがこんな扱いを受けていることに腹が立つてくる。

よし。とりあえずアリカを嵌めた奴は抹殺しよう。

なんて物騒なことを考えていると、

「あ、あーん・・・あむ」

頬を紅く染めたアリカがその小さな口を開いてクッキーを頬張る。

・・・なにこれかわいい。

数秒前まで荒んでいた心がこの一瞬で癒された。

しかし食事のときに何度か食べさせているのだが、未だに慣れないのだろうか？

羞恥で紅く染まった頬がとても可愛らしい。

「どうかな？アスナちゃんと俺の合作は？」

「ああ。素晴らしい出来じゃ。アスナにも礼を言っておいてくれ」

柔らかな笑みを浮かべそう答えるアリカ。
うん。いい笑顔だ。

「それは良かった。じゃあ、も一つどうぞ。はい、あーん」

「う、うむ。・・・あー・・・む」

それから残りのクッキーをアリカに食べさせながら、いつものように取り留めの無い話をする。

それは本当になんでもない話。

アスナちゃんと一緒に料理をしたこと。

ジャックと詠春が喧嘩をしたこと。

それをガトウと二人で止めに入ったこと。

等々。

この狭い部屋に閉じ込められているアリカからは話題の提供は無いが、それでも俺が話すのをアリカは時折相槌を打ちながら、楽しそうに聞いている。

「ナギはどっしてるのじゃ?」

ふと、アリカに尋ねられる。

やはり思い人がどうしているか気になるだろう。
会うたびにナギがどうしてるか聞かれるし。

「ナギなら相変わらずですよ。毎日毎日、狂ったように人助けに励んでるよ」

人を助けるのは良いことだが、ナギのあれは何かから目を背ける為
にやっている様に感じられる。

まあ十中八九アリカのことだろうが。

「全く、アリカが『女一人救ってる暇があるなら一人でも多くの民
を救え』なんて言うから……。ナギはあれで結構純粹だから、ア
リカの言っことを律儀に守ってるんだね」

「……そうか」

「まあ純粹で単純でもあるからちよつと火を点けてやれば直ぐに復
活すると思っけどね。だから心配しなくていいよ。やっぱりアリカ
も愛しの王子様ナギに助けてもらいたいでしょ？」

にやり、とちよつと意地の悪い笑みを浮かべる。

「む……うむ……」

頬を紅くし、こくりと頷くアリカ。
んー、乙女だねー。

こりゃ何としてもナギを復活させないとね。
まあ案外簡単にいきそうな気もするけど……。

カッーン カッーン

ん？

ふと、靴の踵が床を打つ音が響く。
まだ巡回の兵が帰ってくるには早い時間だが……。

サツとアリカに目配せをして、能力を使って姿を消す。

『光を屈折させる程度の能力』

博麗神社の近くの巨木に住む光の三妖精の内の一人（匹？）が使用する能力。

光を屈折させ己の姿を消すことが出来る、なんとも使い勝手の良い能力である。

足音はこの部屋の前で止まり、

ゴトゴトゴトゴトゴト

重苦しい音を立てて分厚い扉が開く。

「これはこれは……。見るにも耐えぬみすばらしい姿ですな。最古の王家の末裔にこのような仕打ち……。まことに心が痛みます」

その扉から現れたのは、耳につく不快な声音のローブを纏った男。芝居がかったその口上がさらに不快にさせる。

「言うつか手前等がやったんだろが。」

「刑の執行は十日後と決まりました。……その前に今一度お尋ねしましょう」

不快な音を発する男が一步、また一步とアリカに近づく。

「黄昏の姫御子と共に封印された墓所の最奥部……。そこに至る方法を貴女は知っているはずだ」

「……………」

アリカは答えない。

当たり前だ。あの場所へ行く方法をコイツなぞに教えたらどんな馬

鹿をやらかすか分かったものじゃない。例え既にそこにアスナちゃん
んが居なくともだ。

また一步、男がアリカに近づく。

既に手を伸ばせば触れることが出来る距離まで近づいている。

その一步を男が踏み出すとき思わず飛び掛りそうになったがアリカ
に目で制されたので何とか踏みとどまった。

どうやら興奮して能力が解除されていたようだ。
慌てて能力を使い、再び姿を消す。

今のは危なかった。

あんな野郎がアリカに話しかけるのでさえ我慢なら無いのに、あんな
にも近づくものだから、危うくあの男を殺してしまうところだっ
た。

流石にここでコイツを殺してしまうのは不味い。

折角アリカを救う算段をガトウたちと立てているのにソレが全てお
じゃんになってしまつところだった。

アリカが制してくれなければ本当にアイツを殺してしまっていただ
ろう。

それぐらいに我慢の限界だったのだ。

だと言うのに、

目の前のこの愚物は、

アリカの美しい髪にその汚らしい手を伸ばし、

あるうことかその髪を掴み、引き上げた。

先程は危うく飛び掛りそうになったが今回はそんなことは無かった。ゆっくりと歩を進め、確実に目の前のソレに近づいていく。

ハナセ

「言つのです！！これは世界を滅びから救う為でもあり、最愛のアスナ姫をお救いする為でもあるのですぞ！？」

愚物が何かを喚いているが、そんなものは聞こえない。

ソノケガラワシイテフレルナ

一歩、また一歩ソレに近づく。

余りに一点を凝視しているため、視界が明滅する。

ソノテヲハナセ

終に手を伸ばせばソレに触れることが出来るほどに近づいた。目の前のソレはその下劣な顔をアリカに近づけている。

サモナクバ

未だアリカの髪を掴み上げているソレ向かって、
ゆっくりと、手をその首へと伸ばす。

ブ
チ
コ
ロ
ス
ゾ

この手が目の前の首を捕らえようとした、正にその瞬間、

「ま……て……」

搾り出すようなアリカの声が聞こえた。

ピタリと手が止まる。

アリカの方に目を向けるとしっかりと俺を見つめていた（どうやら
また能力が解除されていたようだ）。
つまりアリカは俺に向かって言ったのだ。

「待て」と。

「ん？やっと思える気になりましたか？」

目の前の愚物が何か喚いている。

その間にも俺とアリカは見つめ合う。

その瞳からアリカの意味が伝わってくる。

「殺しては駄目だ」と。

しかし先程のように簡単には引き下がれない。

この愚物はアリカにこれ程の事をやったのだ。

友に此処までのことをされて耐えるというのか……！！！！

その意思を瞳に乗せてアリカにぶつけるもアリカの瞳は揺らがない。

暫くそのまま見つめ合って 否、睨み合っていたが……

スッと、男の首下に持っていった手を引く。

アリカがここまで強くやめろというのだ、今この場で殺すのは勘弁してやるう。

そして、アリカが自分の後ろをじっと見つめていることに漸く気付いた男が後ろを振り向こうとしたので能力を使って姿を消す。

男は暫く此方を見ていたが当然何も見つけられなかったので再びア

リカの方へと顔を戻す。

「フン・・・使えぬ女だ」

そう吐き捨て、男はアリカの髪を放す。

この言葉に再び怒りが込み上げてくるが拳を握り締め、溢れる衝動を何とか抑える。

「いや、これは失礼。言い過ぎました。貴女は十日後の死によって充分に世の役に立つことになるのでしたな。そう・・・世界平和の礎として」

嘲笑うようにそう言った男は、その言葉を最後に部屋から出て行った。

ガゴオン

!!

扉が閉まったのを確認して姿を現す。

「大丈夫かい？アリカ

」

アリカの下に駆け寄り長い間髪を引つ張られ、痛かったであろうそ

の頭を撫でようと手を伸ばす。
が、その手は拳を強く握り過ぎたのか、血で汚れていた。
流石にこの手でアリカの頭を撫でるわけには行かないので手を引っ
込める。

「大丈夫じゃ、あれぐらいなんとも無い」

その光景をしっかりと見ていたアリカは、不敵に笑ってそう言い放つ。
それに俺も笑みで答える。

「じゃあ、俺はそろそろ行くよ。色々と準備しなくちゃいけないこ
とがあるからね」

そう言い、俺はスキマを開く。

「ああ、そうだ。ここに来るのは今日で最後になるだろうから、十
日後にまた会おう、アリカ」

そして、やんわりと刑の執行当日に行動を起こすことをアリカに伝
える。

もちろんそれに気付いたアリカはフツと微笑む。

「ああ。またの、白」

それを確認して俺はスキマへと身を投じた。

さーて、あの馬鹿ナキの尻でも蹴りに行くとしますか。

第十二話 失意の王女と（後書き）

ご意見、ご感想等お待ちしております。

なお、ヒロインアンケートですが、現在の順位は以下のようになっております。

1位 桜咲 刹那

2位 龍宮 真名

3位 近衛 木乃香 大河内 アキラ

他にもエヴァ、茶々丸、楓、夕映、裕奈などにも票が入っております。

皆様奮ってご参加下さい。

第十三話 落着（前書き）

長い間更新できなくて申し訳ありませんでした。

これから更新がかなり不定期になると思いますが、完結目指して頑張りますので宜しく願います。

それでは第十三話、どうぞ。

第十三話 落着

「アリカ」

吹き抜ける風が頬を撫ぜる。

約二年ぶりに感じる風はとても心地よいものだった。

遠くでは日が昇りその光がこの身を照らす。

二年間もあの暗い部屋に閉じ込められていたためか、その光の眩しさに私は思わず目を閉じてしまう。

しかし身体を包むようなその暖かさはとても心地よい。

風と日の光の心地よさに身を委ねていると

「これより重戦争犯罪人、アリカ・アナルキア・エンテオフユシアの死刑を執行する！」

「歩け！」

太い男の声が響く。

そして後ろから槍を持った男に前へと進むように急かされる。

目の前に広がるのは広大なケルベラス渓谷。

その谷底では無数の魔獣が蠢き、さらに魔法は一切使えない。魔法使いにとって正に死の谷となっている。

その谷底に突き落とす。

これがこの魔法世界に古くから伝わっている最も残虐な処刑法なのだ。

「触れるな下郎、言われずとも歩く」

後ろから槍をチラつかせて急かす男に言い、溪谷の中心へと伸びる細い橋の上を歩く。

そこに恐怖は無い。

一歩、

何故ならば、信じているから。

また一歩、

また会おうと言った、我が無二の親友を。

橋の終わりに向かって歩き、

そして。

終にその端に足が懸かり、

私の危機にきつと駆けつけてくれるであろう、我が騎士^{ナギ}を。

最後の一步を踏み出した。

ぐらり、と身体が傾き、浮遊感が訪れる。

瞳を閉じ、そのまま重力に逆らわず、身体は谷底へと落ちていく。

肌を撫ぜる風は荒々しく冷たい。

聞こえてくるのは轟という風の音だけ。

身体を襲う浮遊感がどうしようもなく不快だった。

しかし、それは唐突に終わりを告げた。

ふわり、と。

身体を包む暖かく、力強い感触。

ゆっくりと瞳を開く。

するとそこには、

「遅いぞ、我が騎士よ」

私がこの二年間、思い続けた男の姿があった。

だからアリカを助けるタイミングはここしかないのだ。
……つてガトウが言ってた。

「お？」

そんなことを考えていると漸くアリカが降ってきた。

落下地点に移動し、衝撃を殺しながら、キャッチ。

すると自分一人の体重でも高度を維持するのがやったただったため、
アリカの重さも加わった今、徐々に下降していく。

およそ二年ぶりに見るアリカ。

少し痩せただろうか。

しかしそれ以外には特に変わったところも見られない。

あの時と同じ白い肌に金の髪。

俺が惚れたあの美しいアリカのままだった。

今まで閉じられていたアリカの瞳がゆっくりと開かれる。

その蒼と碧の瞳が俺を見つめる。

二年ぶりの再会を果たしたアリカがその口を開き

「遅いぞ、我が騎士よ」

紡いだ言葉はなんとも色が無いものだった。

その言葉に思わず苦笑が漏れる。

「ったく、二年ぶりに会ってそれかよ・・・」

俺としてはもっと・・・こう、感動的なものを想像してただけど・・・。
涙を流しながらのハグとかさあ・・・。

「白から聞いたぞ。この二年間、お主が何をしておったのかな」

「う・・・」

そう言ってニヤリ、と意地悪く笑うアリカに思わず身を引いてしま
う。

白から何を聞いているのかは知らないがその笑みを見ればその話し
が良いことだけではないのが想像できる。

「私の言いつけを守って民を助けていた事は良い。が、随分皆に迷
惑をかけたようじゃな」

「・・・」

ぐうの音も出ない。

実際に二年間の俺はそれは酷い有様だった。

只アリカに言われたから、人を救う。

嫌なことから目を背けるように、只それだけを、ひたすらに行く。それが逃げだと分かっているてもそうせずにはいられなかった。

俺は弱かったのだ。

「で、そんなお主がここにいるのは・・・白のお蔭か？」

「ああ・・・、白に言われたよ。『好きな女も救えない奴が世界を救うなぞ片腹痛いわ!!』ってさ」

そしてその言葉とともにボディに良いのを一発。

それがどれ程の威力だったかと言うと、100m程吹っ飛び巨大な岩に激突するも尚止まらず、更に巨大な岩を二つほど抜いたと言っておく。

目が覚めるどころかそのまま永眠しそうになったが直ぐに白が不思議な術によって回復してくれた。

「私もそうじゃが、本当に白には世話になりっぱなしじゃな」

「ああ、そうだな」

白がこの魔法世界に来たのは観光のため、つまりは気まぐれだったのだろっ。

あの時、白とであってなかったら……。そう考えると少しゾツとする。
必ず悪い方へいつていたとは限らないが、そうになっていた確立が高いだろう。
ホントに感謝しても仕切れないな……。

そんなことを考えていると、谷底が見えてきた。
ここまでくるともう魔法は使えず身体は重力に逆らわずに落下していく。

この速度で人を一人抱えて落ちれば無事では済まないだろうがそこは白が何とかしてくれるようだ。

谷底を見ると辺り一面が真っ黒だ。

その黒の中にぽつぽつと赤い光が見える。

恐らくこの黒いのがケルベラス渓谷の谷底に住む魔獣だろう。

その谷底を埋め尽くすほどの数にゾツとする、が。

「ん？」

黒一色の谷底の一面に、茶色い地面が覗いている部分を見える。

と言うか、恐らくそこは俺たちの落下地点だ。

さらにその真ん中に見慣れた姿を発見する。

その人物は俺たちに向かって手を振っていた。

その人物とは勿論

「おい！ナギー、アリカー」

俺とアリカの親友。八雲 白だった。

く白く

空から降ってきたナギとアリカを発見。

魔法が使えないから結構な速さで降ってくる二人を、風を操りゆつくりと地面に降ろす。

「助かったぜ、白。しかしホントにこの谷底でも使えるんだな白の術は」

「まあね。て言うか、術を使ってる訳じゃないからね」

ただ能力で風そのものを操っただけだからね。魔力とか関係ないし。つてナギにも説明したんだけどなあ……。まあいいか。

「や、アリカ。十日振りだね」

「うむ。先ず助けてもらったことに礼を言おう。本当に有難う」

そう言つて深く頭を下げるアリカ。

そんな律儀なアリカに苦笑しながら

「あゝ、良いつて頭なんて下げなくても。友を助けるのは当然のことなんだし」

「それでもじゃ。親しき仲にも礼儀あり、と言つじやる」

その言葉にまた苦笑してしまう。

「ん。なら素直に受け取っておくよ」

「うむ、そうしてくれ。それよりも……」

俺の言葉に微笑んで頷いたアリカだが辺りを見回して何か聞きたそうにしている。

はて、何かあったかな？

「ん？何だい？」

「この状況は一体何なのじゃ？」

と、俺たちを囲むように佇んでいる無数の魔獣を指差しながら言った。

「あ、それは俺も気になった。何でコイツ等こんなに大人しいんだ？」

と、ナギ。

どうやらナギもアリカ様と同様に疑問に思ってたようだ。

しかし何かと言われてもなあ……。

「さあ？俺がこの谷底に来た瞬間からこの状況だったしなあ……。
まあ、多分だけどその理由は」

こういつた魔獣たちは本能で動く。
だから感じたのだろう。その本能で。

「この場で誰が強者なのかをわかってるからじゃないかな？」

俺に逆らうとどつなるのかを。^{強者}

「そ、そうか……」

「な、なるほど……」

俺が微笑みながら言うとは何故か二人は一步後ずさってしまった。
あれ？もしかして何か漏れてた？
まあいいや。

「それよりナギ。ちゃんとアリカに伝えたのかい？」

「いや……。まだ……」

「ん？何のことじゃ？」

俺の言葉にナギはばつが悪そうに顔を背け、アリカは何のことかと首を傾げる。

まったく、何をやってるんだか……。

で、伝える云々などと何の話をしているのかと言うと、ナギは今日、

アリカに思いの丈を伝えると宣言して此処に来ているのだ。
これはナギ本人が言い出したことで決して誰かが言わせたわけでは
ない（まあ多少焚き付けた所はあるが・・・）。
にも拘らずこの有様である。
このへタレめ！！

ナギの首根っこを掴みぐいと引き寄せる、アリカに聞こえないよう
に話しかける。

「何やってんの。早くこの場で伝えちゃいなよ！」

「ええ！？此処でかよ！」

「何か問題でもあるの？」

「いや、だって白がいるし・・・」

「は？俺がいることの何処に問題があるの？」

「や、人に聞かれるのって恥ずかしいじゃねえか・・・」

「あ あーっ！このへタレめ！！」

うじうじぼそぼそと喋るナギにいい加減痺れを切らせる。

スキマを開き二人つきりになれる場所につなげる。

場所は此処から少し離れた小高い丘。昇る朝日も拝めてシチュエー
ション的にも問題ないだろう。

「ほら、場所は用意してあげたんだからさっさと思いを伝えて来い
」!

「や、でもよ……」

「さっさと行け」

げし、と

スキマの前でうじうじと悩んでいたナギをスキマの中に蹴り入れる。

さて、これで舞台は整った。

「お待たせアリカ。さ、アリカも早くこの中へ。ナギが待ってるよ」

「う、うむ。よく分らんがこの中に入ればいいのじゃな?」

突然の状況に戸惑いながらもスキマへと進んでいくアリカ。

スキマの中へと一歩アリカが踏み出そうとしたとき俺はその背中へと声を掛けた。

「アリカは幸せになっても良いんだよ」

その背中を優しく押してあげるように。

「・・・分かっておる。私が幸せにならなければ危険を冒してまで助けてくれた白たちに申し訳が立たないからな」

アリカはそれを受け、優しく微笑んでそう返してくれた。そしてアリカはスキマの中へと姿を消していった。

「これから二人が歩む道程に、幸多からんことを」

二人が消えたスキマを閉じ、呟いた。

「やっ」

あの二人はこれで大丈夫。

で、俺はもう一仕事やらなければならぬことがある。

いや、別にやらなければいけないかと聞かれれば別にそうでも・・・
・・・無くはない。

やはり殺らなければならぬな。俺の気持ち的に。

「やっさと終らせませますか」

スキマを開き目標へと移動する。
その目標とは何か、いや誰か？それは勿論……。

「みーつけた」

アリカがお世話になったこの糞爺だ。

く？く

「クソクソクソクソクソツッ！！」

仰々しいローブに身を包んだ男がその肩を怒らせながら歩く。

此処はケルベラス無限監獄の建物内部。

そして男はアリカ王女に全てを押し付け不満を抱える人々への生贄とし、アリカ王女の死刑執行を企てた張本人である。そんな彼の計画は脆くも崩れ去った。

「赤き翼の奴等め！あと少しのところで邪魔をしておつて！」

たった六人の男たちの手によって。

谷底で魔獣の餌となったと思われたアリカ王女は彼等によって救われた。

彼等を取り押さえようにも男の手勢では大戦の英雄と言われる彼等に敵う筈も無く、男は早々にその場に見切りを付け自分に被害が及ぶ前にこうして建物内部へと逃げてきたのだ。

「……だが、まあいい」

今まで憤怒の表情だった男が、その顔に嫌らしい笑みを浮かべる。

「これで表向きにはあの女は死んだことになったのだ。我々の邪魔になることもあるまい」

男は呟きながらもその足を止めず、やがてある一室へとたどり着いた。

「後々追っ手を放ち、始末すれば良いだろう」

男は万が一の時の為にこの部屋に転移装置を用意しておいたのだ。誰か一人でもそれを使用すれば活動を停止し、その移動先を判別されないよう細工を施したものを。

「いや、あれ程の女だ。捕らえて我等の慰み者にするのも良いな」

その醜い顔を一層醜く歪ませて男が嗤う。

男の目の前には自分が用意した転移装置。

後一步踏み出せばこの場から消え、自分を追うことは出来なくなるのだ。

それ故、男はこの時既に自分が助かったと確信していた。

「みーつけた」

その一言を聞くまでは。

く
白
く

みつけた。

アリカを嵌めた糞爺を。

男の前には、恐らく転移装置だろう。これで逃げる算段だったのか。危うく逃がしてしまうところだった。

「随分と機嫌が良いようだけど」

スキマから出て男に近づく。

「何か面白いことでもあったのかな？」

男はその場から動かない。否、動けない。

「俺にも教えてくれないかい？」

小刻みに震えるその肩に、ゆっくりと手を置く。

「ねえ？」

「っ！！」

その瞬間弾かれたように男が動き出した。

後一步。そんな距離にある転送装置に向かって足を踏み出し、そして

男の足が転送装置に辿りついた。

ブン。という音がして、男の身体はこの場から消え去った。

ゴトリ。

その首から上を残して。

男が動き出した刹那、俺は男の肩に置いた手を横に滑らせその首を切断したのだ。

本当はもっと甚振るつもりだったのだが・・・まあいい。

何はともあれ、これで落着。

結果は最上ではないかもしれないが、それでも上々だろう。

これで漸くこの魔法世界に來た本来の目的である観光へと移れそう
だ。

随分遠回りした気がするがそのお陰でアリカやナギ、赤き翼の面々
といった友も得ることが出来た。

まずは何処へ行こうか。

アリカが大手を振って歩けるようにやはり旧世界の方がいいかな？

まあ何処でもいいか。

アリカにナギ、ジャック、詠春、アル、ガトウ、タカミチ、そしてアスナちゃん。

皆がいればきつと何処だって楽しいだろう。

これからのことを考え顔を綻ばせながら、俺は皆と合流するためスキマを通るのだった。

第十三話 落着（後書き）

ヒロイン投票ですが、次話更新時をもちまして締め切らせていただきます。

この娘を是非ヒロインに。という娘がおりましたら奮ってご参加下さい。

第十四話 初めての仮契約（前書き）

相変わらずの亀更新で申し訳ありません。

しかし、キチンとゴール（完結）出来るよう頑張りますのでよろしくお願いします。

主人公の設定についてご指摘をいただきましたので、主人公設定を追加しました。

良かったら読んでください。

それでは十四話、どうぞ。

第十四話 初めての仮契約

ひらり、ひらりと薄桃色の花弁が舞う。

季節は春。満開の桜の木がずらりと立ち並ぶその光景はただ「美しい」の一言に尽きる。

その光景を眺めながらお猪口に並々と注がれた美しく澄み切った液体を喉に流す。

「ん、満開の桜を肴に花見酒。乙だね」

アリカを救出してから数カ月後。

現在俺たちは旧世界は日本の京都、そこにある詠春の故郷へとやってきていた。

魔法世界ではアリカは処刑されて死んだことになっていたので大手を降って歩けるように旧世界へとやってきたのである。
で、どうせ来たのならと京都にある詠春の実家へと顔を出し、美しく咲く桜を肴に花見酒へと洒落込もうとなったわけである。

「どうぞ、白はん。杯が乾く前にもう一杯」

「ああ、これはどうも木乃葉さん」

そう言って徳利を上品に両手で持ち美しい動作で酒を注いでくれる

のは近衛 木乃葉さん。
美しい長い黒髪に白い肌。正に大和撫子という表現がピッタリな美人さんである。

そして何を隠そう木乃葉さんは詠春の婚約者なのだ。
ナギといい詠春といい羨ましい限りである。

注がれた酒をぐい、と煽る。

美味い。肴である桜はとても美しいしこの酒も相当良い物なのだろ
う。

しかし何よりも

「うん。やっぱり美人に酌をしてもらった酒は格別だね」

「いややわあ白はん、そないなお世辞言つて」

「いやいや、お世辞だなんてとんでもない。木乃葉さんみたいな人を妻に出来るなんて詠春は幸せ者だよ」

口元を隠し上品に笑う木乃葉さんを見てそう思う。
因みに、その幸せ者とはというと。

「うおーい！白ーう！お前もこっち来いよー！」

「がははは！そうだぜ！そんな所でちびちび呑んでないでこっち来い！」

「……………」

その手に一升瓶を持った馬鹿ナギとジャック二人に付き合わされていた。首をジャックにがちりとホールドされてぐったりとしている。あれはどう見ても極まっているだろう。因みに既に意識は無いようだ。

「二人とももう少し静かに呑めないの？あとジャック、そのままだと詠春が死ぬ」

そう注意するとジャックは「おお危ねえ危ねえ」とパツと詠春を掴んでいた手を離れた。なもんだから、

ゴン。

と鈍い音をたて詠春は頭から地面に落下した。そしてピクリとも動かない。まあ生きてはいるだろう。
・・・たぶん。

ぐいっ

ふと袖を強い力で引っ張られる。何かかと思いきちらを向いてみると。

「・・・・・・・・」

その小さな頬を膨らませ無言で此方に徳利を差し出すお姫様の姿が。

アスナ

「ん？どうしたの、アスナ？」

「・・・・・・・・」

問いかけるが尚も無言で徳利を差し出し続けるアスナ。
よく分からないが酒を注いでくれるということなのかな？

残りの酒を飲み干し空になったお猪口を差し出す。

すると直ぐにアスナは酒を注いでくれた。その際少し溢してしまっ
たのはご愛嬌。

「・・・・・・・・」

そして今度は何かを期待するような目でじっと見つめてくる。
早く呑めということか？

ぐいっと注がれた酒を一気に呑む。
うん。やはり美味しい。

「美味しい？」

ぐっと身を乗り出し聞いてくるアスナ。その姿がどこか必死に見えるのは気のせいだろうか？

「ああ、美味しいよ。何ていったってアスナが注いでくれたお酒だからね」

「・・・そう」

そう言うのと俺の答えに満足したのかアスナは乗り出した身をスッと引いた。その口元を綻ばせながら。

何かよく分からないがアスナが喜んでくれたようでなによりだが、今のやり取りを見てニヤニヤしているアリカとアル、そして「あらあら」と微笑んでいる木乃葉さんは一体なんだというのだろうか。

「そういえば、白はミニステル・マギを作らないんですか？」

ぼん。と手を叩きながらアルが唐突にそんなことを言う。なにがそういえばなのかまったく分からないが、

「みにすてるまぎって何？」

とりあえずアル言っている「みにすてるまぎ」なるものが何なのか
まったく分からない。

「ミニステル・マギとは魔法使いのパートナーのことです。魔法使
いは呪文詠唱中は全くの無防備となります、その間に攻撃されてし
まえば呪文は完成しません。それを守護するパートナーが魔法使^{ミニステル・マギ}
の従者なのです」

知らなかったのですか？とミニステル・マギとは何ぞやを説明して
くれるアル。

知らなかったが今の説明で理解した。

そして理解した上で、

「俺には必要なくない？呪文の詠唱なんてしないし、それに魔法使
いじゃないし」

俺には必要ないと思った。
が、

「いいえ。作っておいて損はないと思いますよ。白にメリットは
余り無くても契約したパートナーにはそのパートナーの潜在能力を
引き出すことができる固有のアーティファクト、つまり魔法のアイ

テムが与えられますしね」

何故かアルは執拗に勧めてくる。

「ふーん」

「そうそう。仮契約バクテイオーと言うものもあり、本契約が一人としか出来ないのに対し、こちらは何人とも契約を結ぶことが出来ます。所謂お試し期間のようなものです。因みに私とジャックはナギと仮契約してるんですよ」

「ほー」

「仮契約でしたら契約は何時でも解除することが可能ですし、せめて一人ぐらい従者を持ってもよろしいのではないのでしょうか？表向き白は魔法使いということになってはいるのですし、いいカムフラージュになるんじゃないでしょうか」

「ふーむ」

「お相手は・・・そうですね。従者とはいつも一緒にいるのが好ましいので身近な方がいいですね。ですから・・・アスナさんなんてどうでしょうか？」

「うーん・・・って、アスナだった？」

ビクッ！！

話しに拳がったアスナを見てみると、急に自分の名前が呼ばれたからかその肩を大きく震わせていた。それにミニステル・マギの話が始まったときから何となくそわそわしていたような気がする。

「はい。いかがでしょうか？」

「いや、いかがでしょうかって言われても……。俺一人じゃ決められないよ。当事者であるアスナにも聞かないと」

確認を取るためにアスナの方を見ると、そこには俯き胸の前で両手の人差し指をツンツンと合わせたり離したりしている少女が。そして何故か髪の間隙から覗くその首筋は真っ赤になっている。

怒ってるのかな？そりゃ嫌だよね従者なんて。

まあ無理強いするつもりは無いし、この話は無かったことに

「いいよ」

「……へ？」

「なる。……白の、ミニステル・マギに」

俯いたままそう応えるアスナ。

てっきり断られるものだと思っていたので返答に困ってしまふ。
どうしていいのかわからずアリカに助けを求めようと目を向けると

「うむ。白ならば私も安心じゃ。アスナのことを頼むぞ」

なんて言われてしまった。

え？いいの？そんなに簡単に妹を人の従者なんかにして。

まあアスナを従者にしたからって何かをさせることも無いだろうけど。

寧ろアーティファクトってヤツが手に入ってアスナにはいいんじゃないかな。

あれ？

つてことは全然問題ないじゃん。

「じゃあ、やってみますか仮契約」

「では、白とアスナさんはこちらへ」

準備は出来ていますよ。と手招きするアルの足元には魔方陣が。
一体何時の間に……。

アルの仕事の速さに少し引きながら、アスナと一緒に魔方陣の上に。

「ど、どしするの？」

「とりあえず白は座って下さい」

言われた通りとりあえず座る。

「目を閉じて下さい」

目を閉じる。

「さあ、アスナさん」

「……ッ」

聞こえるのはアルの声、そしてアスナが息を呑む音。
どうやらアスナが何かをするようだ。

目を閉じて待つ。

待つ。

待つ。

……。

何も起きないけど、まだなのか？

暫く待つてみたが何も変化が起きないので目を開けて確認しようとした。

そのとき、

ガシッ

と、顔を（おそらくアスナの）小さな両手でガッチリと固定され

そして、

ちゅっ

何か柔らかく、暖かいものが唇に触れた。

いや、これってアレだよな。
しかも状況から察するにアスナの。

そっと目を開いてみると、目の前には目をぎゅっと閉じて真っ赤な顔をしたアスナがいた。

あらかわいい。

じゃなくって。

どうして俺はアスナと接吻をしているのだろうか？
逃げようにも顔をアスナにガツチリとホールドされているので逃げられない。

ほとんど困って視線をさ迷わせると、こちらを見ていたアリカと目

が合った。
すると、

「…………グッ！」

無言でサムズアップを返された。

え？あなたそんなキャラでしたっけ？

などと色々と困惑していると、ふと俺とアスナの間に眩い光が生ま
れた。

そして身を離すアスナ。

唇が離れたときに「ぷはっ」と息を吐いてたのでどうやら息をとめ
ていたようだ。

……だからなんだという話だが。

それはさておき
閑話休題

光は徐々に収まっていき、そこには一枚のカードが残されていた。

カードを手取る。

そこには白い狐の面で顔の半分を隠しているアスナが描かれていた。

「これは？」

「それは従者のカードです。契約した証ですね。白にはオリジナルカードをアスナさんにはコピーカードを渡しておきますね」

アルは俺の手からカードを取るとどうやったのかカードを二つに分裂させ一つを俺に、もう一つをアスナにと手渡した。

「ではアスナさん。早速アーティファクトを呼び出してみてください。呪文は『アテアット来たれ』です」

「……来たれ」

アスナが呪文を唱えた瞬間、その手に現れたのはカードにも描かれていない白い狐の面だった。

「ふむ……。形状からして顔に装着して使うものだと思いますが……。とりあえず着けてみたらどうですか、アスナさん？」

アルの言葉に頷き、手に持つ面を顔に着ける。

「……」

一通り辺りを見回して、

外す。

そしてまた着ける。

外す。

着ける。

外す。

着ける。

そして、

「これ、凄い」

面を着けているため少しくぐもった声でそう呟いた。

「凄いつて何が」

「うおーい！なんだあ譲ちゃん？面白いもん持ってんなー！ちょっと貸してみー！」

何が凄いのかアスナに聞こうと思った瞬間、ベロンベロンに酔った馬鹿ジャックが現れた。

そしてアスナが着けている面に手を伸ばすが

ヒョイ。

とアスナに躲されてしまう。

「……………」

「……………」

暫し二人は睨み合い。

再び攻防が始まる。

バツバツバツバツ……………

ヒョイヒョイヒョイヒョイ……………

ババババババババツ！

ヒョヒョヒョヒョヒョヒョヒョヒョヒョヒョイ！

ジャックの猛攻をアスナは全て、それも紙一重で躲し続ける。

「これは……………」

その光景を見て思わず言葉が漏れる。

面を獲ろうと攻めるジャックはただ手を伸ばしているだけではない。巧みにフェイントを織り交ぜて（大人気ないことに）かなり本気でアスナの面を獲ろうとしていた。

しかしアスナはそのフェイントに全く引っかからない。いや、反応すらしないのだ。

まるでジャックの動きを全て分かっているように。

.....

そして数分後。

「ぜっ……はぁ……ぜえ……はぁ……!」

「……………」

地に跪き肩で息をするジャックとそれを見下ろすアスナ（お面付き）。

「驚いた……。アスナがこれ程まで強くなっていたとは」

今の光景を見てアリカがそう漏らす。

確かにアスナは強くなったが、流石にジャックの動きにここまで付いていける程では無い筈だ。
ということはある面はやはり

「アスナ、その面は……」

「うん。動きが見える」

問いかけるとアスナは俺が何を言いたいのか分かったのか聞きたかった答えを教えてくれる。

やはり・・・か。

「どづいうことですか？」

「この面の効果のことさ」

問いかけてきたアルに説明する。

「どうやらこの面を着けていると相手の動きが分かるらしい。そのお陰でアスナはジャックの攻撃を躲し続けることが出来たってわけ」

「分かる、じゃなくてちょっと先の動きが見える。大体二秒くらい」

俺の説明にアスナが補足してくれる。

いやー、それでも充分でしょ。

かなり強力なアーティファクトなんじゃない、コレ？

「凄いですね。かなり強力なアーティファクトですね」

ああ、やっぱりそうなんだ。

って、この面と居合い拳の組み合わせってかなり凶悪じゃないか？
避ける先避ける先に一方的に拳圧を打ち込まれるって・・・。

何とか耐え切って接近戦に持ち込んでもこっちの動きを完全に見切
ってくる相手と殴り合ってもねえ……。

嬉しそうに白狐の面を抱えるアスナを見ながら、俺は密かに冷や汗
を流すのだった。

これからの鍛錬、どうしようか……。

第十四話 初めての仮契約（後書き）

アンケート結果発表！

さて、ヒロイン投票の結果発表です。

見事ヒロインの座に輝いた上位三名は・・・！

一位 龍宮 真名

二位 桜咲 刹那

二位下 近衛 木乃香

でした〜！

あと、特別枠として誰か一人追加しようかなー、とか思ってますがヒロイン増やしすぎて捌ききれなくなるかもしれないのでまだ未定です。

投票して下さった皆様、どうもありがとうございました。

第十五話 訪れた平穩、そして漂う暗雲（前書き）

今回は終始明日菜視点です。

まだ原作っぽい明日菜になってないので違和感が凄いです……。原作突入までまだ暫くかかりそうな予感。

それでは第十五話、どうぞ。

第十五話 訪れた平穩、そして漂う暗雲

（明日菜）

「……………う……………」

朝。

カーテンの隙間から差し込む朝日の眩しさによって目を覚ます。眠気でまだ開ききらない目を擦りながらベットの傍らにある時計で時間を確認する。

単身、長針ともに六と七の丁度真ん中をさしている。つまり現在の時刻は六時半。

目覚ましをセットしていた七時より三十分ほど早く起きてしまったようだ。

そこでふと、あるべきはずの隣の温もりが感じられないことに気が付いた。

辺りを見回すがその姿は見えない。

しかし耳を澄ますと隣の部屋から、トントントントと小気味良い音が聞こえてくる。

「う……………ん……………」

一度大きく伸びをしてから起き上がり、隣の部屋へと移動する。

隣の部屋へと続くドアを開けるとふわり、とお味噌のいい香りが鼻をくすぐった。
すると、

くーう・・・

おなかの虫が控えめに自己主張をする。

朝起きて直ぐにこんなに良い臭いを嗅がされたのだ。おなかが鳴っても仕方が無いだろう。

・・・うん。仕方が無い・・・よね。

「あれ？アスナ？おはよう、今日は早いんだね」

「・・・おはよう」

ふと、キッチンに立ち朝食作っていた白から声がかかる。

まさか・・・聞こえてた？

「朝ごはんはもう少しで出来るから。早く顔洗ってきな」

「・・・」

どうやら確実に聞こえていたみたいだ。
うう……恥ずかしい……。

しかし騒いでも仕方が無いので白に言われたとおりに洗面所に顔を洗いにいく。

冷たい水で顔を洗えば残っていた眠気も吹き飛び、先程の失態で火照っていた顔の赤みも治まった。

さて、ここで少し現状を整理してみよう。

私ことアスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアと八雲白は現在旧世界の日本にて暮らしています。

お家は二十五階建マンションの二十一階の一室。間取りは2LDK。室内は白を基調とした落ち着いた内装。バルコニーはガラス手摺になっていて開放感溢れるつくりになっている。

なんて長々と説明してみたけど、つまり今私たちが住んでいるのはちょっとお高そうな小洒落たマンションだということ。

そんなマンションを買うお金が何処にあったかと言うと白が魔法世界で稼いだお金をこつちのお金に換金したんだとか。

一応白は魔法世界を救った英雄なのでその時の恩賞なんかでお金はたっぷりとあるらしい。

で、私たち二人がここに住むようになって八年はたっただろうか。

京都の詠春の実家でのお花見の後、皆はそこで別れた。

ナギと姉さんは新婚旅行の続きへ。

ジャックは魔法世界に帰り。

詠春は京都に残り。

アルはふらりと何処かへと。

私と白は此処に住み、偶に旅行に行ったりしてのんびりと暮らして

いる。

くうー……

と、そこまで考えていたら、もう一度おなかの虫が鳴いた。先程、朝食のいい臭いを嗅がされてもう限界なようだ。濡れていた顔をタオルで拭き、急いでダイニングへと戻る。

ダイニングへと戻るとテーブルには白いご飯、お味噌汁に卵焼き、ほうれん草のお浸しと純和風な献立の朝食が並べられていた。

「よっし。じゃあ食べよっか」

そこに二人分の焼き魚（鯖かな？）を持った白がやってくる。

二人で席に着き手を合わせる。

「いただきます」

まず味噌汁へと手を伸ばす。
箸で軽くかき混ぜ一口啜る。

思わず、ほう。と息を吐いてしまう。

おいしい。

やっぱり白の作るご飯はおいしい。朝からこんなに美味しいものを、それも毎日食べられる私は凄く幸せものなんだろうな。

でも女の子としては凄く複雑な気分・・・。

私も料理できるようになったほうがいいかな？

うん。今度白に教えてもらおう。

やっぱりお嫁にいくなら料理くらいは出来ないよ。

べ、別に白のお嫁さんになりたいとかそんなわけじゃないんだけど、いやでも白のお嫁さんになるのが嫌ってわけじゃなくて寧ろなりたいというかでもまだそういうのはちょっと早いかななんて思ったりしてだって私たちは別に付き合っているわけじゃないんだしあれでも私たちって八年も一緒に住んでるつまりは同棲してるって事でしかもこの前しちゃったよねキスしちゃったよねキス大事なことだから二回言ってみただけでもそれは八年も前のことだしそれから何の進展も無いわけで私としてはもうちょっと何かあってもいいんじゃないかななんて思ったりもするんだけどほらこうなんて言うか大人のキスつまりはディーブっていやいやだからそういうのはまだ早いってさっきも言ったけど私たちはまだ付き合ってるわけじゃないってまだってなによまだって今のところ私たちにそんな雰囲気はないし私ももうちょっとだけ今のままでいいかななんて思ったりしてでも白ってちょっと背は低いけどカッコイイし有名人だしもたもたしてたら誰かに獲られちゃうかも知れないしああ私はいいたいどうしたら

！！！！

「ねえ、アスナ」

「ひゃいっ!!!?!」

「うわ!?!びっくりした……。どうしたの?」

「う、うん。なんでもないっ!」

ふう……。急に白が話しかけるからびっくりしちゃった……。
ああ、恥ずかしい……。なんか変な声も出ちゃったし。

「そう?ならいいんだけど。で、アスナに一つ提案があるんだけど」

うん?一体なんだろう?

「提案?」

「うん。アスナさ、学校に行ってみない?」

「学校?」

「そう。学校」

学校って子供が集まって勉強したり運動したりする、あの?

「なんで?」

「いや、だってアスナ行ったことないでしょ、学校？」

「行ったことないけど・・・」

うん。確かに私は学校に行ったことは無い。行ったことは無いんだけど・・・

「勉強は白に教えてもらうからいい」

そう、実は白はこう見えて（って言ったら失礼か・・・）物凄く頭がいいのだ。

現に私は白に勉強を教えてもらっている。

ただ、教えるのはあまり得意では無いようで、参考書を片手に四苦八苦しながら教えてくれるのだ。

その必死な姿を見て密にかわいいと思っているのは内緒。

「うん。別に勉強は俺が教えてもいいんだけどさ、学校ってそれだけじゃないでしょ？」

「勉強以外のこと？」

「そう。例えば、友達を作るとかね」

友達・・・かあ。

言われて、自分が他の子たちと遊んでいる場面を想像してみる。

.....

ぜ、全然想像できない.....

そもそも今の子どもって何して遊んでるのかな？

それに私うるさいの好きじゃないしあんまり大勢で騒ぐのはなあ.....

と、言うことで

「別に欲しくない、友達」

という結論に至った。

「じゃじゃ、そんなこと言うなって」

私の言葉に白は苦笑しながら言う。

って言われても友達がどんなものなんだか分からないから仕方ないので、白に聞いてみることにした。

「白は友達いるの？」

「勿論、たくさん居るよ。大酒呑みの鬼が二人だろ、それから大喰らいの亡霊。風神に祟り神と.....。吸血鬼の姉妹にそのメイドで

しょ。あと喘息持ちの魔女に居眠り門番。不老不死と半人半獣の少女。凶悪花妖怪に発明河童。肉体派僧侶に……。ああ、冴えない古道具屋をやってる半人半妖の男もいたな」

指を折り折り、自分の友達を挙げていく白。

なんか妙な人(？)たちばかり……。。

て言うか神様って言わなかった？それも二人も。

まあ(忘れてたけど)白も神様らしいから神様の友達がいてもおかしくない……。のかな？

「みんな癖が強いけど良い奴だよ。いつかアスナにも会わせてあげるよ」

うーん……。会ってみたいような、みたく無いような……。。

でも、その友達のことを話す白の顔はとても楽しそうで。

何故か私はちよっと悔しくなった。

だから、

「……。わかった」

私も友達というものを知りたくなかった。

「私、学校行く。で、友達作る」

「……うん。じゃあ早そk」

「ただし！」

「……へ？」

学校には行く。

でも白と離れるのは何か嫌だ。

べ、別に寂しいとかいう訳じゃなくて……その……そう！白が一人だと心配だから！うん、白って一人だとフラフラと何処か行っちゃうし迷子になったら大変だからね！
だから

「白も一緒に学校に行くこと」

「……は？」

私の言葉に「何言ってるの？」って顔をする白。

ふふん。惚けたって無駄。私は知っている。白が麻帆良学園ってとこから教師の誘いを受けているということ。

「知ってるよ。白、学校から教師として誘われてるでしょ？」

「……あゝ。そういえばそんな話もあったよっな……」

あつたんだよ。だって白から聞いたんだもん。

「でもなあ・・・確か誘いがあつたのって中等部からなんだよね。しかも何故か女子の」

「？」

「いや、だからね」

白が何が言いたいのかわからず首を傾げると、

「今のアスナってどう見ても中等部の子には見えないよね。初等部、それも低学年の子にしか見えないよね」

「!?!?」

白の口から衝撃の事実が告げられた。

そう・・・だった・・・。

今の私はどう見たって七歳くらいにしか見えない。

私が白に助けられてから既に十年は経っているのに、だ。

そう。私はこの十年間全く成長していないのだ。

何でなのかわからない。

昔からこうだっただろうか？

思い出そうにもどうも白に助けてもらつまでの記憶が曖昧で思い出せない。

と言うか、こんな状態で学校なんかに通えるのだろうか？

周りの子は成長しているのに私一人だけ成長しないなんて状況になつてしまうのでは？

そここのところ白に尋ねてみたところ・・・

「案外周りの子たちに釣られて一緒に成長するんじゃない？まあそうならなかったら俺がなんとかするし」

なんて楽観的な答えが返ってきた。

ていつか何とかできるんだったら今何とかして欲しいんだけど・・・。

「と、言うわけで。アスナは初等部から通つてことで」

「えー・・・」

「えーって言われてもなあ・・・。じゃあアスナが中等部になったら俺も先生として学校に行くってことで」

「・・・わかった」

不満を漏らした私に白が妥協案を提示する。

その案に私は渋々承諾する。

「よしよし。まあ学校に行くのも今すぐってわけじゃないからな」

私が承諾したのを見て、白は満足気に頷く。

「さて、今日は詠春から呼ばれてるんだよ。何でも二人きりで話があるらしくてね。ガトウとタカミチを呼んどいたから今日はアスナは二人と一緒に居てね」

「分かった。・・・詠春の話ってナギと姉さんのことかな？」

「・・・さあ？」

少しの空白の後、帰ってきたのは低い声だった。

数ヶ月前、魔法世界である噂が流れ始めた。

その噂は当然私と白の耳にも入ってきた。

只の噂であって欲しかったがガトウや詠春に確認を取ったのだが残念なことにその噂は本当だった。

「ま、行けば分かるさ」

白はなんでもないのでそう言って、止まっていた食事を再開する。だがその声音は明らかに先程より沈んだものだった。

あの何時でも飄々としている白がその心情を隠せていない。

それほどにその噂が本当だということは、衝撃的なことだった。

その噂と言っのは

『大戦の英雄、ナギ・スプリングフィールドが
死んだ』というものだった。

第十五話 訪れた平穩、そして漂う暗雲（後書き）

今更なのですがこの小説の東方成分は薄いです。

今のところ主人公設定ぐらいですしね。

ただこれから東方キャラも出していく予定です。

今のところ2人は確実です。

一人は感想で公言してます。

もう一人のヒントはつるp・・・おや、誰か来たようだ。

第十六話 少女の秘密（前書き）

やっと明日菜以外のヒロインを出せました。
まだ幼女ですけど・・・。

ちょっと刹那の生い立ちが原作と違いますがそこはスルーでお願いします。

それでは十六話どうぞ。

第十六話 少女の秘密

カ、コーン・・・・・・・・。。

ああ、獅子威しの音を聞くなんて久しぶりだなあ・・・

なんて思いながら俺は蘭草の香る畳張りの部屋にて暖かい緑茶を一口啜る。

さて、ここは何処かと言うと京都は詠春の御家、関西呪術協会の総本山である。

アスナのことをガトウに預けてから俺は直ぐに詠春の家へと向かった。勿論スキマを使って。

したらばちよっと来るのが早すぎたのか直ぐに詠春とは会うことは出来ず、屋敷の一室で待つように言われてしまったのである。

これまでのことを思い出しながら緑茶を啜っているとこの部屋へと近づいてくる気配が一つ。

随分懐かしい、およそ八年振りに感じる気配。

それは俺が居る部屋の前で止まり音も無く襖を開けた。

「久しぶりだな、白。よく来てくれた」

そう言って現れたのは関西呪術協会の長であり我が友である近衛詠春だ。

八年前の花見の日から連絡は取り合っていたが直接会うことは一度

も無かった。

つまり八年ぶりの再会ということになる。

そして八年ぶりに我が友を見て思うことはと言うと

「老けたね、詠春」

「会って第一声がそれか・・・」

俺の一言に大きく肩を落とす詠春。

どうやら本人も気にしていたようだ。

しかし実際に詠春の顔はそういわれても仕方が無い程に変わっていた。

やはり関西呪術協会の長になったことが原因なのだろうか。組織の長ともなればそれなりに苦労ことが絶えないのだろう。

「苦労してるんだねえ」

「まあそれなりに、な」

俺の言葉に苦笑しながら答える詠春。

その姿には妙に哀愁が漂っていた。

「で、今日呼ばれた要件は何なんだい？ナギの事が何かわかったの？」

「……いや、相変わらずナギの事は何も分からないままで」

空気を悪くしないように至って軽く聞いたつもりだったが、詠春はその表情を険しくして答える。

「そか。じゃあ一体なんだい？態々二人きりで話したいことなんてさ」

その空気を払うようにナギの話を終らせる。

分からないならこれ以上話しても仕方が無いし、八年振りに友と再会したのだ、態々空気を悪くすることは無い。

「……ああ、今日は白に会ってほしい子がいるんだ」

こちらの意図を理解してくれたのか、一呼吸空けてから話し始めた詠春は何時もの調子に戻っていた。

「会ってほしい子？」

『子』って子供のことだよな。って事は詠春の子供かな。

もしかして子供の自慢をするために俺のことを呼んだのか？

「ああこの部屋に来るよう呼んであるからもう直ぐ来ると思っただけど……」

と、詠春が言った直後、なにやら廊下からドタドタと音が聞こえ始めた。

恐らくそれは足音。人数は二人分。音が軽いことからその足音の主は子供であることが想像できる。

「どうやら来たようだな」

詠春がそう呟いた瞬間この部屋の襖がスパーン！と豪快に開け放たれた。

「おとうさまー！せつちゃんつれてきたえー！」

「こ、このちゃんまって……！」

そこから現れたのは二人の少女だった。

一人は綺麗な長い黒髪を腰の辺りまで伸ばした、おっとりした雰囲気だが元氣一杯な少女。

もう一人はこちらも綺麗な黒髪だがそれを頭の横で結って一つに纏めている。少し吊り気味で凛々しい双眸をしているがもう一人の少女の背に隠れている内気そうな少女。

二人ともが詠春の子供なのだろうか。双子にしては余り似ていないが、まあそんなこともあるだろう。

唐突に現れた彼女達であるが今は尻尾は隠しているので問題は無い。彼女たちが魔法のことなどを知っているか分からないからね。

「これこれ。お客様の前ですよ、このか」

長髪の少女はこの部屋に入ってきた勢いのままに詠春へと飛びつきその腰に抱きつく。
それを詠春は苦笑しながら優しく窘める。

「紹介するよ、白。俺の娘のこのかだ」

腰に抱きつく少女の頭を撫でながら言う詠春。
そして紹介された少女は詠春の腰から手を離し、俺の方へと向き直り

「このえ このか言います。よろしゅうな、お兄さん」

その小さな手を差し出し花のような笑顔でそう自己紹介をしてくれた。
その手を取り俺も彼女に精一杯の笑顔で応える。

「このかちゃんか。俺は君のお父さんの友達の小雲 白。よろしくね」

「白お兄さんやな。なあなあ、ウチと友だちになつてくれへん？」

「友達かあ・・・勿論いいけど、俺ってこのかちゃんのお父さんよりずっと年上だよ？」

「えー！ホンマなん？」

「ホントホント。こつ見えてもうおじさんなんだよ」

「白おじさん？・・・うん、やっぱりお兄さんやな。全然おじさんに見えへんもん」

「はは。嬉しいこと言ってくれるねえ。ところで・・・」

「？」

このかちゃんとの会話を切り上げ彼女の後ろへと意識を向ける。

先程から気になっていたのだが、そこにはこのかちゃんの背に隠れこちらをちらちらと伺っているお下げの少女がいた。

先程から俺と目が合うとサツとこのかちゃんの背に隠れてしまう。

そしてまたそろりとのかちゃんの背から顔を出し、また目が合うと・・・を繰り返している。

「その子の名前はなんていうのかな？」

「そつやった。ほら、せつちゃんもちゃんと挨拶せな」

「ちよっ！まってこのちゃん・・・！」

そう言つてこのかちゃんちゃんは少女の背をぐいぐいと押す。
少女は必死に抵抗するも、このかちゃんちゃんは意外と力があるのかその動きを止めることできなかった。
そして少女の抵抗も虚しく、俺とご対面。

「っ!？」

「っ!？」

顔を赤くしわたわたと可愛らしく暴れる少女。
逃げようにもこのかちゃんちゃんに肩をガツチリと掴まれているためその場を動くことが出来ない。

そんな少女に俺は腰を屈めて視線を少女と同じにし、出来るだけ優しく話しかけた。

「はじめまして。俺は八雲 白つて言うんだ、よろしくね。君の名前はなんていうのかな？」

「……さくらざき……さつなでう……」

それが功を奏したのか少女は小さな声ながらもそう返してくれた。
相変わらず顔は俯き気味だがちらちらと上目使いにこちらを見てくる。

「刹那ちゃんだね。いい名前だ」

「あ、ありがとうございます」

そう言つて刹那ちゃんの頭を優しく撫でてあげると、漸く彼女は笑つてくれた。

相変わらず声は小さいがお礼の言葉はしっかりと聞こえた。

「あー！せつちゃんだけずっこい〜！ウチも撫でてー」

「よしきた。このかちゃんにも大サービスだ」

ずるいずると寄つてきたこのかちゃんの頭を少し強めに撫でる。それをこのかちゃんは気持ち良さそうに目を閉じ受け入れる。

このかちゃんも刹那ちゃんも髪がさらさらで撫でてる方も気持ちがいい。

暫くその髪感触を楽しむように二人の頭を撫でていると

「うおっほん！あー、そろそろいいかな？」

詠春の態とらしい咳払いによつてそれを中断され、二人の頭から手を離す。

その際二人が少し残念そうな顔をしていたがこのままじゃ話が進まないので我慢してもらおう。

「自己紹介も済んだようだし、話を進めようか。このか、これからお父さんたちは大事なお話をしなくちゃいけないんです。少しの間この部屋から離れててくれますか？」

「うん。ほな、せつちゃん行こー」

「ああ、待ちなさいこのか」

「？」

刹那ちゃんの手を引いて部屋から出て行こうとしたこのかちゃんを詠春が呼び止める。

「これから話すことは刹那君にも聞いてもらわなくちゃいけないんだ。だから悪いけどこのか一人で待っていてくれるかな？」

「えーウチだけ仲間はずれなん？」

「お話が終わったら遊んであげますから・・・白が」

「って俺かい。まあいいけど・・・。」

「むー。約束やで、白お兄ちゃん」

「うん、約束。だからいい子で待ってるんだよ」

「うん！」

軽く頭を撫でてあげるとこのかちゃんは元気よく頷いてくれた。

「じゃあせつちゃん。またあとでな」

刹那ちゃんへと手を振り、このかちゃんはこの部屋を後にする。

そして残ったのは俺、詠春、刹那ちゃん。

刹那ちゃんはこのかちゃんという心の拠り所を失ってしまったことで俺と詠春の間でオロオロとしている。

その様子がなんだか小動物チツクで可哀想だなと思いつつも見ていて笑みが零れてしまう。

が、何時までもこんな状況では彼女が倒れてしまいそうなので詠春に話を促すことにした。

「で、話つて言うのは何なんだい、詠春？まあ刹那ちゃんに関係する事だつてのは予想が付くけど」

自分の名前が呼ばれた瞬間、ビクツと肩を震わせる刹那ちゃん。

そんな彼女を安心させるためその頭に優しく手を置き、ゆっくりと撫でる。

手を置いた瞬間は再び肩を震わせたが、撫でるうちにそれも収まっていった。

詠春は待っていてくれたのか刹那ちゃんが落ち着いたのを見て話し始めた。

「まず白に来てもらった理由だが……。単刀直入に言おう、白には刹那君を引き取って欲しいんだ」

「え、詠春さん!？」

「……どういうことだい？」

驚く刹那ちゃんを尻目に詠春へと問いかける。

こんな事を言うからには何か理由があるのだろう。受けるか受けないかは先ずそれを聞いてからだ。

「これはまず刹那君の出自について話す必要がある。もう気が付いてると思うが刹那君は俺の娘ではないんだ」

「うん。それは何となく気付いてた」

だって娘として紹介したのはこのかちゃんだけだったしね。

「刹那君は神鳴流師範がとある孤児院から引き取り養子になった孤児……。と言う風に表向きにはなっている」

「表向きには……。ね」

「ああ。孤児と言つるのは間違いではないのだが彼女の場合は少し状況が特殊なんだ」

「特殊とは？」

「刹那君はある理由によつて生まれた里を追われたんだ」

里を追われた……か。なんだか穏やかじゃないな。

「……彼女が生まれた里は烏族の里。彼女は烏族と人間とのハーフなんです」

詠春の口から語られた刹那ちゃん秘密。

それは彼女がヒトと妖との混血。半人半妖だということであつた。

「そしてもう一つ……刹那君、彼に見せてあげてくれないかな」

「……」

刹那ちゃんは詠春が話している間、俯き何かに怯えるように身体を震わせていた。

彼女にとつて半人半妖であるという秘密を知られることだけで恐怖なのだろう。

その上まだ何か知られたくない秘密があるという。

刹那ちゃんは詠春の言葉が聞こえていないのか、俯いたまま肩を抱き震えていた。

その姿が余りに痛々しくかったから。俺は彼女に近付き両の腕で彼女を抱き、隠していた尻尾を顕現させるとその九本の尻尾で彼女を優しく包み込んだ。

「大丈夫。怖がらなくていい。刹那ちゃんにどんな秘密があったって、俺は君を拒絶しない」

優しく、優しく語りかける。

すると刹那ちゃんは落ち着いてきたのか体の震えも治まった。

腕を解き、刹那ちゃんと少し距離を空け先程と同じ様に腰を屈め彼女と同じ視線にする。

「見せてくれないかな？刹那ちゃんの秘密を」

「……………うん」

刹那ちゃんは小さく、しかしはっきりと頷いた。

そして彼女の秘密が明らかにされた。

「はぁり、と」

彼女の背から生える一対の純白の翼。

それが彼女のもう一つの秘密。

烏族について詳しくは知らないが彼らは皆一様に黒い翼を持つ。

しかし刹那ちゃんの背から生えているのは純白の羽。

つまり彼女は異端。恐らくはそれを理由に里を追われたのだろう。

しかし烏族の掟なぞ俺は知らない。

そんな俺から見て刹那ちゃんの翼は只々

「綺麗だ」

「え？」

「凄く綺麗だよ、刹那ちゃん」

美しい。それだけだった。

「あ、ありがとうございます・・・」

俺の言葉に顔を赤らめる刹那ちゃん。

そこに先程のような何かに怯えた様の表情はない。

「でもまあ、俺の尻尾には負けるけどね」

なんて、刹那ちゃんの翼と同じ純白の尻尾を振りながらおどけた調

子で言ってみる。

「ふふ……。そうですね。白さんの尻尾もとってもキレイです」

すると漸く彼女はその顔に笑みを浮かべてくれたのだった。

第十六話 少女の秘密（後書き）

総合評価1000pt越え、お気に入り登録400件間近!!

これも偏にご愛読いただいている皆様のお蔭です！ありがとうございます！！
います！

これからも拙い文章ではありますが、よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9872r/>

とある狐の魔法先生

2011年12月7日03時04分発行